

東方鶴行記

タリオン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東方大好き高校生の夜鳥 剣二のお宅に急遽訪問してきたのは、平安京にお住まいの方なら誰でも知ってるあのお方だった!?

「誰もが一度はなりたいたいと思う、ハーレム的な展開になると思ってた時期が私にもありました」

はてさて、これからどうなることやら……。

笑いあり、涙……は多分無いけどシリアスな展開は欲しいと思ってる作者が、趣味の範疇で書き上げるストーリー、ここに開幕。

目次

東方鶴行記の序	1
第一話	6
第二話	16
第三話	24
第四話	37
第五話	46
第六話	59
第七話	72
第八話	86
第九話	99
第十話	110
第十一話	128

第十二話	146
第十三話	164
第十四話	182
第十五話	195
番外其ノ一	207
第十六話	220
第十七話	237
第十八話	252
第十九話	266
第二十話	282
第二十一話	295
番外其ノ二	311
第二十二話	329

第二十三話



東方鶴行記く序

果たして、この世で起こることは全てが必然であるのか、それとも偶然であるのか。

必然であるのなら全ての事は予測可能、対処可能であるし、それとは対照的に偶然であるのなら予測不可能、対処も不可能であることは賢明な諸君のことなら考えずとも頭に浮かんでくることだろう。

では、世に起こる事象が全て必然であるのなら、何でもできるのではないかという問いには、しかし「ノー」と答えなければならないであろう。

理由は単純、全ての事を例えば数値で表すことができたとしても、膨大過ぎて予測することができないからである。余りにも私たちには見えないものが多すぎる。

逆に言えば、全てのことを数値化してしまい、計算ができるのなら、一ヶ月後の天気でも、何年も先の未来ですら手に取るようにわかるだろう。

今は技術が無いだけで、将来は簡単なことなら未来視すらできるようになるんじゃないか、というのが俺の持論である。

故に、俺は心霊現象を信じないし、「奇跡」なんて言葉は使いたくもない。

少なくとも未確認飛行物体が自分の目の前に現れるだとか、物理的に起こりえないことが起こるのを自分の目で確認するか、体験するかくらいしなれば信じないことにしている。

俺はこういったことを、テレビなんかで心靈特集や奇跡！ ○○のスクープ！ みたいな番組を見るたびに考えている。まあ言わば科学という名の宗教の信者ってやつだ。

「信者」なんて言葉を使って表すあたり、俺もまだまだなのかもしれないが……。
まあいいか。

さて、ここまで長々と持論について語ってきた俺だが、とどのつまり何が言いたいのかというところ……。

「むっ……ぐっ……」

「どうした、頭上ががら空きだぞ？」

「ハッ!？」

「脳天がち割ってやるぜ！ モーゼエエエエエエエエエエ!!」

「ぐわああああああああああああああああああ」

……少なくともこの場では奇跡なんぞ起こりえない、ということだ。



「ふむ、これで通算135戦で俺の全勝だなあ?」

「けっ、勝ち誇りやがって……。強すぎなんだよお前は」

ここは高校の情報処理室。つまりコンピュータールームだ。

俺たち二人……俺こと夜鳥刀哉と、腐れ縁の友人、循太は無断で持ち込んだノートパソコンで「東方非想天則」という弾幕アクションゲームをプレイしていたのだ。

説明するまでもなく、この俺が圧勝。135勝という驚異の数字を叩き出した。しかし、これは別に俺が強いという訳ではない。

「違うね、お前が弱すぎるんだ」

「なっ、なんだとう!?!」

なんせこいつ、先にプレイしていて俺に東方やこのゲームを勧めてきたくせに、コンボの一つもできやしないのだ。ゲーム音痴にも程がある。後から始めた俺の方が上手

くなっているのだからよっぽどだろう。俺に勝てる日はくるのだろうかとか心配になるレベルである。

「悔しかったらWikiでも見て勉強してくるんだな。コンボすらできないとはお話にならないね」

「くっ……いいだろう、今回は見逃してやる」

「どうしてそうなる」

「そ、それじゃあ気を付けて帰るんだぞ！俺はもう帰るから……」

と、言いかけたところで俺は循太の肩を鷲掴みにした。

勿論、帰らせないためである。このまま帰ってもらっては個人的に非常に困るのだ。

「んん、俺が一度も敗北せずに通算が120勝を超えてしまった時はどうするんだったかな？なあ循太君よお？」

「……………」

「潤んだ目で見つめてきてきてもダメだ。むしろ気色悪いからやめたまえ」

「マジで言ってるのか……？」

「大マジだ。こちとら生活費の関わる死活問題なんだ。きつちり奢ってもらおうぜ?」

そう、俺は循太に先ほどの条件を満たして勝つことができれば一食を奢りにする、賭けゲームをプレイしていたのだ。当然ながら俺の方も一度でも負ければ奢るという条件付で手加減無しの試合をしていたのだからちやんと賞品は支払ってもらわないと困る。今月はピンチなのだ。

「じゃあ学校近くのラーメン屋な」

「へいへい……まったく、容赦ねえなあ」

「何を言うか、15戦も伸ばして一度でも勝てば帳消しにするとかいう追加ルール加えやがったくせに」

「うっ、頭が」

「……まあ奢ってもらえるんなら何でもいいけどさ」

「はあ、秋のために貯めてたのに……」

「自業自得だな。それにお前はまだまだ金あるだろ? バイトしてんだから」

第一話

下からカップ麺（シーフード）を持ってきた剣二は、今は画面を見ながら麺をすすっている。

「まあ、しかしあれだな。俺には少々簡単過ぎたかな？ EXTRAも楽勝楽勝!!」

どの口がそんなことを言うのだろうか。

さつきクリアしたときは残機無しボム無しのギリギリだったくせに。こんなのではEXTRAのクリアなど夢のまた夢だ。

因みにEXTRAとは難易度の一つで、いうなれば本編をクリアしたら出るおまけモードみたいなものである。しかしおまけと侮るなかれ、実は難易度の中では1、2を争うほどの難しさだ。EXTRAの名は伊達ではない。

「おっしや！ 始めるぜー！ EXTRAなんてかるくく……」

ピチューン

それがこのざまである。

この間わずか六秒。間違いなく新記録達成だろう。なんの記録かはご想像にお任せする。

二時間後。

あゝ……疲れた。クリアしてハイになってた俺が馬鹿だったわ。しかしそこは流石の俺。

試行錯誤してパターンを組みつつ、何回も何回も挑戦し、やっとここさ中ボスを倒し、勢いづいた俺はどんどん先へと進んでいく。そろそろボスが出てきそうな雰囲気だ。

「つしやあー！ あともうちよいだろー！」

——と、そのとき。

「ドサツ」と後ろで何かが落ちた音がした。

なんか二時間前も同じようなことがあったんじやねえか？ と、デジャヴを感じながら、後ろを振り向く。

ハッ……と苦笑しながら画面を見ようとし、

後ろを猛烈な速度で二度見した。

結論からいうと、なんか座っていたのだ。

なんか存在がフワフワしているようで、あまりはつきりとは分らないが、俺の目が狂っていないければ、それは小学生くらいの子供だった。

しかし、この状態はと言えばよいのだろうか、霞がかっているというか、輪郭がぼやけているというか……

いや、断じて目が疲れている訳では無い。確かに何時間もぶつ通しでゲームやっていたが、そんなことで疲れる程、俺の目はやわでは無い。

ほら、現に他のところははつきりくつきりと見える。時計の針もほら……つて、え？ いやもうこんな時間なの!?

冬だから早めに夜がきたと思うってゲーム続けていたらこんなことに……馬鹿過ぎる。

せつかくの休日を完全に無駄にってしまった。

ていうかそんなことは問題ではない。いや問題だけど。

ええい！ くそ！ なにこれ、何を言っているのか自分でもわからなくなってきたじゃねーか！ 俺は誰に逆切れしてんだよ！ そもそもなんでこの星は平和にならないんだよ！

……落ち着け俺。ピークール、ピークールだ。冷静になれ。この星の平和事情を案じてどうする。すーはーすーはー

ふう、話を本題に戻そう。なんでこんな子供が俺の部屋にいるんだ？ 高校入ってから今まで一人暮らしだったが、こんなことは無かった。

しかも空き巣に入られるならまだしも、こんなに純粹無垢そうな子供だ。見た目で判断しちやいけないけど、これぐらいの年だったらみんな純粹なもんだし、悪意があつて入ってきたわけじゃなさそうだが……。それに一応戸締まりには気をつけているつもりだ。

一体どうやって入ってきた？ 考えても、ますます謎が深まったただけだ。むむむむ……。

これはやはり本人に聞くしかないかな。

少年問答中・・・

なにこれダメだわ。てこでも動きやしないぞこりや。何聞いてもだんまりを貫き通したただだった。

お前はなんなんだ。あれか、石像の子孫か何かなのか。もうちよい可愛げがあつても

いいとお兄さんは思うのだが。何か他の方法で……。例えば……。つとお。唐突に、ある案が閃いた。それはもう、稲妻のようにビビっと。

ゲーム見せてお近づきになればいいじゃないか。

なんで今まで思いつかなかったんだ？ 子供の時に興味をもつのは大体はゲームだろ。異論は認めん。

というわけで、東方を見せることにした。ちょうどボス戦前だったしね。

え？ ゲームのチョイスが間違ってるんじゃないかって？ こまけえこたあきにすんな!!

で、だ。

ボスまで進めてきたわけだが、今も、今までも反応が無いんだが、どういうことなの？

興味とかあるもんじゃないの？ 本格的にどうしようか迷ってきたぞ……。

警察に保護してもらおうにも、名前くらいは聞き出さないと、どうしようもないな。ていうか、無表情なんですけど。何？ すごく重い過去でもあったの？

……子供には笑顔が一番だぜ？（キリッ

と、心の中でカッコつけて若干周りが寒くなつたのを感じつつ、話す内容を考えていく。ヤベ、超気まずいわ。

子供と一緒に無言でいるのって同年代というより疲れるもんなんだね……。

頭はフル回転させているが、興味を引きそうな話題が頭のどこを探しても見つからない。

誰か！ 誰か話題の提供者はいませんか!? このままだと見えざる圧力に押しつぶされて死んでしまいます!!

などと内心で来るはずも無い助けを求めていると、いよいよボスとご対面だ。いやでもこのどう考えても俺が楽しんでいるだけの状況を果たしてこのまま続け……

「え？」

ktkr! ついに口を開いてくれましたかそのチビっ……

「ハア？」

なんか変な声をあげてしまったが、これはしようがないと思う。
だって、そこにいたのは……

東方星蓮船EXTRAボス、「未確認幻想飛行少女」の二つ名を持つ……………

封獣

ぬえ

その人だったのだから。

第二話

あ……ありのまま、今、起こった事を話すぜ！

「東方を プレイしていたと

思ったら いつのまにか隣にぬえがいた」

な……何を言っているのかわからねーと思うが

俺も何をいつてるのかわからねえ。

頭がどうにかなりそうだった……幻覚だとか夢オチだとか
そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を、味わったぜ……

テンプレ的に説明してみた。

うん。お察しの通り、まだ頭が追い付いていないんだ。心なしか口調もおかしくなってるしね。

……さあ思考が出来る状態になったところで、状況の整理といこうじゃないか。

まだ体は落ち着いてなくて、口半開きのままバカみたいな顔して隣見たままだけど。

でも、そんな状態でもしつかりとポーズボタン押してるあたりは流石俺だな。シューターとしての力が芽生え始めてる証拠かね？

ま、それはさておき、まずは容姿の確認といこう。

黒髪のショートヘアで、黒のワンピース、黒ニーソと黒づくめだが、ワンピースの赤い渦巻き模様と赤い靴がアクセントになっている。

……ちよつとまで、これ土足だろ。マジか。お前マジか。ここは欧米かよ。

ホームパーティーに招待されましたっけ、このやろう。

まあ、そんな些細なことはどうでもいい。今はそんなこと気にしてる場合でも無いからだ。

さて、容姿の確認を続けよう。顔立ちは整っているし、そちらにも注目を集めるとは思うが、それは絶対に二の次になるだろう。

まず最初に目を引くであろうものが、なんといつてもその背に生えている羽っぱいものだ。

本当に「っぱい」としかいようがない。某軟体動物の侵略者を彷彿とさせる触手のような青いものが三本、さらに切れ味の良さそうな赤いナイフのような羽が、これまた三本と、三対で合計六本生えている。

うむ……どっからどう見てもぬえだな。

某笑顔静画なんかでよく見た俺がいうのだから間違いないはずだ。

だって黒ニーソでミニスカだぜ？これが男にとって興味ないわけがないだろう、j

k。

すまない、話が少しそれたな。

そんなわけで、今ぬえが……いや、多分ぬえのコスプレした人だろう。

うん、そっちの方が現実的だな。どうやって家まで入ってきたか、という最大の謎は残ったままだが。

というか、ここまで語つといてなんだが、ぶつちやけどつから来たか、とか、それがモノホンのぬえなのか、とかどうでもいい。

ただ、幻想郷が本当にあつたら、いかなる手段を用いても行つてやるのにな、とか思っただけだ。

ぬえの姿をしている人が、傍にいただけでなんか幸せな気分になる。

初対面なのにこんなこと思うなんてどうかしていると思うだろうが、しょうがないじゃないか、こんな近くでコスプレみたのなんて初めてだもの。

うむ、そろそろ何か行動を開始せねば。いまだどちらも固まったままだ。

そうだな、東方やろうか。まだ途中だし。

……頭がどうかしているなんていわないでくれ。こんなシチュエーション初めてなんだよ。

ていうかないでしょ、こんなシチュエーション。

考えた末に、結局東方することになった。こういうときに限って、頭が回らないのはご愛嬌ってことで勘弁してください。

さあ始まったぞ。

……なんでこんなときに限ってすっごく避けられるんだろうね。早く終わらせたいんだけど。

ああ、気まずい。すごく気まずいわあ……。

チラリ、と横目でぬえ（仮）を見てみる。

あれ？なんか心なしか震えてる気がするんだけど……どういうことなの？

霊夢にボコボコにされたトラウマが残ってるとかね。

ハハハ、そんなこと、……ありそうだから怖いね。

あ、撃墜されちゃったか。初見で五つのスペカ、うむ、上々だな。

それから隣の様子を確認してみる。ぬえ（仮）はいまだ固まったままだ。あんたごんだけシヨック受けてんのさ……。

声をかけてみるか。

「あのー……」

ビクツと肩を振るわせてこちらを見てくる。少し不安げな表情で、目が泳いでいる。何このかわいい生き物。

さらにこちらから畳み掛けてみる。

「あなたは？」

どう答えればいいか迷っているようだ。

少しの間、考えている様子を眺めていると、やがて意を決した様子でこちらを見てきたので、応答した。

「どうn……」「御免!」……え!?

こちらに手を向けてきた。ちよつと待ってくれ、それはなんだ!?
なんか手から黒いもやが出てきてるんだが!?

ウエイトオ!!

うわうわうわうわ待つて待つて待つて待つてごめんなさいごめんなさい痛いのは本当に勘弁してくださいこの世に生まれてすいまs……

……………ん?

何なんだ?何も起こらないが、これは一体……??

うわ、なんか、かめ〇め〇の練習っぽいことしてるわ。

相当焦ってるみたいだけど、こっちからはなんか痛い人にしか見えない。

なんかさつきまで頭抱えてたのが恥ずかしくなってきた。

くそう!驚き損じゃねーかよ!

などと心の中で愚痴つてると、ぬえ(仮)が地べたにへたり込んでしまった。

なんか涙目になってる。かわいい。

……そろそろ可哀想になってきたので、声を掛けてあげることにした。

肩に手をおいて、こう言った。

「元気出せよ」

と。

第三話

今、ぬえ（仮）と俺は、机に向かいあつて座っている。

お茶と茶菓子を出してあるので、口寂しくなることも無いだろう。
さて、まずは何故こんなことになったのかを話すとしよう。

東方やつてた

←

なんか隣にぬえっぽい人がいた

←

色々やつて何故か涙目になった

←

慰めがてらお茶と茶菓子持ってきた

←

今ここ

ということで、この状況になったわけだ。

……うん。何一つ分かんないな。これでは詳しい説明のしようが無い。

とにかく、まだ一言も言葉を交わしていないので、そろそろ話を始めようと思う。

え？

そんなこと一々言わなくてもいいって？

貴様、リア充だな!? 自分家に女の子が来るとすっげえ緊張するんだぞ!?

俺に彼女ができないくらい当たり前なことだけどな! 何話していいかわかんねえし、頭まわらんねえし、話題見つかんねえし、というかそもそも貴様らリア充はだn (ry

コホン、少し取り乱してしまったな。すまない。

それでは、改めて、

「自己紹介でもしようか」

「……」

「俺は夜鳥 剣二つていうんだけど、君は？」

「……ぬえ。封獣ぬえ。」

おっ？

最初に名前教えてもらえると、意外と好感触？

あと名前はやっぱりぬえだったか。ううむ……まだまだ情報が足りないな。

「どうも。まあ、お茶でも飲んで落ち着きなよ。色々話すのはその後でも十分間に合うから。」

女の子を前にしてここまで淀みなく話せている自分を褒めたい。

そしてぬえはズズズ……と不機嫌そうな顔でお茶を啜っている。何故？

「なんでそんなに不機嫌そうなの？」

聞いてみた。すると、「プチッ」と何かが切れたような音がして、ぬえがいきなり椅子からガタツと音をたてて立ち上がった。

あれ？これ地雷踏んじやつた感じですか？

「みんなあんたのせいなのよ!! 能力が解けたのも、幻術が失敗したのも、全部あんたのせいよ! 大体なんなの? なんで化け物の姿の私に易々と話しかけられるの!」 馬鹿なの! 絶対そうよ!!」

一気に言い切ったのですごく疲れたようだ。

息も荒いし。あと八つ当たりと馬鹿認定されちゃった。ひでえ。

しかし、気になったのは化け物という単語だ。化け物なんて見たか？

考えられるとすれば……ぬえだな、というかぬえしかない。

俺が見ていたのは子供の姿だったが、伝説によると鶴は、頭が猿、手足は虎、胴は狸、尾は蛇、というような怪物だったはずだ。

でもその姿を俺は見えていない。となると、考えられるのは能力だ。

ぬえの能力は「正体を判らなくする程度の能力」で、効果はその場の環境やら人の精

神に依存するものだったはずだ。

簡単に説明すると、夜に不安な状態で正体不明なものに会ったら怖いものに見えるだろ？つてことだ。

このように、その場や精神にもっとも合った姿に見える。

それが、たまたま今回は家の中で、しかもハイテンションな状態で出会ったから、子供の姿に見えてしまったのだろう。

空き巣に入ってきたおっさんなら自然に見えるだろうが、見知らぬ子供で。小説の読みすぎですか、そうですか。

さて、これつて「この方が俺にとつては自然だろう。というかそうであつて欲しい。」みたいな希望も含んでいるはずだ。

そして、子供が見えたということは、子供が家に来てたらいいなという希望……

まさか俺はロリ、もしくはシヨタコン……だと……!?

なんてこつた、こんなところでそんな疑惑が浮上してくるなんて!

なぜ普通の女性に見えなかったんだ!

……あ、さつき自分で家に女の子来るのが初めてだ、的な発言してたような……

畜生!自分で納得しちまつた!死にたい。

ま、まあ、このことはどっか遠いところにおいて、問題は何故ぬえが「俺が見たのは怪物だった」という結論を出したのか、ということだ。

こんな俺でもちよつと考えれば分かったくらいだ、能力を持っているぬえ自身が分からないはずが無い。

では何故間違えたのか。

それは、見知らぬ場所に突然呼び出されて、どうしたらいいか分からないので、とりあえず能力を発動させてみたものの、ゲーム内に現れた自分に驚き、思わず能力解除してしまい、正体がバレたので、妖術を発動させようと試みたが、それも出来ず、ついには涙目になってしまった、というわけで、

つまり、何が言いたいのかというと、

テンパって判断ミスするぬえさんマジキュート

ってことだ。

「……あんた、なんか失礼なこと考えてるでしょ？」

何故バレたし。

「顔に思いつきり書いてあるわよ。」

そんなに顔に出やすかったかな？

おっと、それよりもっと大事なことを聞くのを忘れてたな。

「あと聞きたいんだけど、ぬえはどっから来たんだ？」

さて、何が出てくるのか・・・？

「幻想郷つてところだけど、それがどうかしたの？」

ビンゴオオオオオオオオオオ!!

出ました俺が一番求めてた答え!出ましたよ!

ぬえで、妖術で、幻想郷ときたら、もう東方の世界しか無いでしょうよ!もしかしてスキマですか!?!スキマで来たんですか!?!

「多分そうだと思うけど……うっわキモ」

なんか言われた気がするけどそんなことはもう気にならないぜ!

ヒヤッホーイ!!

などと心の中で小躍りしていると、ぬえが質問をぶつけてくる。

「ところで、あんたは何なの?」

何、とききましたか。何者、ではなく何、ですか。物扱いとは……完全にぬえの中で格下げされたねこりゃ。

少し頭がクールダウンした俺は、クールに答える。

「俺はこの日本に住むしがない高校生さ。」

ポーズも決めてみた。

……ちよつとやめて、その可哀想な目で見るのやめて。

こつちも悲しくなってくるから。

しかしぬえはまだこちらを最低ランクには格下げしていないようで、話を続ける。

「そういうことじゃなくて、なんで幻想郷のこと知ってたり、スキマのこと知ってたりするのかってことよ」

なんだそんなことか、と俺は東方について色々説明をしていく。

「なるほどね……そういうわけか。ということは、ここは外の世界なのね？ 道理で知らないものがたくさんあるわけだ。」

納得してくれたようだ。

さて、これであらかた聞きたいことは消化できたな。これからどうしようか……と考えていると、ぬえが言い出した。

「じゃあ、いる場所も分かったわけだし、そろそろ行こうかな。」

「……何処へ？」

ピシツ、とぬえが固まった。何も考えてなかったのだろう。ギ・ギ・ギ・と首をこちらに向けてくる。一々挙動がかわいい。

「……何処だろう？」

「いや、俺に聞かれても。」

何処に行けばスキマがあるか、なんて分かっただもんじゃないなあ。

というか本当にどうしたかったんだらう。飯も食えないし、寝る場所も無いし。

……いいことを思いついたぞ？

「なんか悪いこと考えてるでしょ。」

だから何故わかる。

「だから顔に書いてあるって」

「そんなことより俺、幻想郷への帰り方分かるかもしれないぜ？」

「本当に!？」

おお、食いついた。さあ、畳み掛けるぞ。

「ああ、幻想郷とこの世界に接点が無い、というわけじゃないんだ。幻想郷がある時点で確信した。つながりはかなり薄いと思うけど……試してみる価値はあると思うな。」

「何処なの、そこ!？」

「まあまあ、慌てるな。その前に、なんも用意が無いのに、行って何するつもりだ？」

ぐう、と唸った。本当に何も考えてなかったんだな。だがそこがいい。

「心配するなって、そこに行くまでの間、俺の家にとけばいいから。」

また固まった。

頭を抱えてもの凄く悩んでいる。ハッハア！さあ悩め！

「うぎぎぎぎぎ………ふう、仕方ない。行くまでの間はここにいさせてもらおうとするわ。……ハア、なんでこんなことに……」

よっしやあ！

夢が……夢が叶ったぜ！

横の方で「あのスキマ、今度会ったらぶつ殺す」とか不穏な言葉が聞こえてくるけど、俺には関係ないぜ！

「あ、一応言つとくけど、なんか変なことしたら……分かってるわね？」

と、笑顔で机に置いてあつた湯のみを握りつぶした。

……なんか、シヤレにならないことになった気がするけど大丈夫だよね？

第四話

ぬえが俺の家に居候することになったぞ！

命懸けだけどな！

やあ、毎度お馴染み夜鳥 剣二だ。さつきぬえを、少しの間俺の家に居候させることに成功した。

今は反省している。

後悔もしている。

さつき変なことをしたら、暗に殺られる宣言をされてしまった。

こんなに近くににいるのに、なにもできないなんて生地獄だよ！

あ、いかがわしい意味じゃなくて、ちよつとお話したり、ちよつと食事したりしようとしていただけだ。

俺はジエントルマン。

つまり紳士だ。他人の趣味を否定する気はないが、ロリコンの紳士などではなく、健全な紳士なのだ。

そこんとこだけは勘違いしないで欲しい。

で、当のぬえはというと、

「あ、これ面白いわ〜」

布団の上で菓子食いながらマンガ読んでた。

「お前……ちよつとは遠慮しようとかないのか？」

「妖怪だもの、自分勝手になんか悪い？」

「いや、でもマンガ読んでいいか？ とか、菓子食べていいか？ とか、フリでもでもいいから許可取ろうぜ？」

「へー、これはマンガで、これは菓子なのかー」

「聞いちゃいねえ……」

……少しからかってやろうか。

ああ、そういうやついでにまだ聞きたいことがあったから聞こうかな。

「あー、さつき何か妖術使おうとしてたけど……」

「そ、その話はするなってさつき言ったでしょ！」

赤面して食いついてきた。相も変わらずかわいいな。これは友に見せたら問答無用

で襲いかかるだろうな……。

ちなみに、その友は俺の東方仲間であり、変態でもある。

この前、東方の布教目的といって、公園の中を走り回りながら「東方最高オオオオオオオオオオオオ!!」と叫んでいた。

どう見ても変態かつ不審者です、本当にありがとうございました。

その間、俺は他の友と共に家に帰ってゲームしてた。

関わりたくないからね。

変態の友がその後、どうなったかは知らない。

警察に色々聞かれたとかいう噂があったが、たぶん気のせいだろう。

ま、そんな話は今は正直どうでもいい。

今大事なことは、

「その妖術って今は使えるのか？」ってことだ。

「も、もちろんよ！あときは焦ってただけで……ホラ」

なんて言ってるが、突き出した手から黒いもよとなつて妖力っぽいものが漏れだすばかりだ。

「なんでこつち来てからできないのよ……ねえ?!」

いや、知らんがな。俺に聞かれても。憶測だけなら俺にもいえるけどさ……。

「ハア……ここに来てからなんか変なのよね……力が抜けるというか、妖力が空中に広がってしまつていうか……」

「ふーん……もしかしてこの世界には空気中に漂っている妖力が少なくて、すぐに妖力が拡散するのもかもね。ちょうど水に砂糖が溶けるみたいに。だから妖術に使うだけの量の妖力を溜められない……とかそんな感じじゃねえの?」

「……そうなの?」

完全に適当に答えました。

サーセンｗｗｗ

「握りつぶしていい？ 何をとはいわないk 「すみませんでした」 あっそ。」

完全に暴力がこの部屋を支配してるよ。誰か助けてくれよ。

先にかかったのは確かに俺だけどさあ……せめて俺の意見を少しでいいから聞いてくれ。

さ も な い と

「飯抜きだぞ？」

「ぐっ……夜鳥のくせに交渉を持ちかけてくるなんて生意気じゃない……」

「なんとも言えばいいさ！ 苦しむのはお前自身だぜ？」

「むう……分かったわ。ただし一対九くらいの割合だね。」

「フツ。残念だ……飯も九割減だな。」

「!? ……しようがない、五対五で手を打つわ。」

「飯の量が半額割引セールになっちまうがいいのか？」

「分かったわよ！ 話聞けばいいんでしょ、聞けば！」

「そうだよ、それでいいんだ。話聞くだけで飯貰えんだぜ？ お得だろ？ じゃ、交渉成立だな」

ぬえの方は少し不機嫌ながらも、互いに固い握手を交わした。

……正味何をやっているのか分からなくなってきたが、ぬえもノリノリなのでよしとしよう。

さて、交渉も終わって夜になったところで飯にでもしようか。

ここでは、少しご飯の事情が複雑なのだ。

一人暮らしをしていると前に説明したが、ここは学校の寮になっている。だから友達が他の部屋に住んでたりするのだ。

なんとかして色々な物を買ったり、どっかに遊びに行きたい俺らは食費を抑えるため自炊をしている。そんなわけで作りすぎたりした料理は分け合ったりしているのだ。

俺らって偉いね。

そして、今日は友達が作りすぎたカレーを少しもらって、晩飯にしようということになった。

ちなみに、俺も自炊できる。

簡単なものくらいしかできないけどね。

「んじゃ、カレー貰いに行ってくるから、留守番頼んだぞー」

「か、かれー？ ってなんなの？」「見たら分かるって」……ちよつとー？」

この数分後に、ぬえにとって初めての外の世界での食事が始まるのであった。

さてさてどんな反応をするのだろうか……
そのことがとっても楽しみな剣二であった。

第五話

夜鳥 剣二は 晩飯 を 手に入れた！

インド発、複数の香辛料を使い、肉や野菜など、様々な食材を味付けした、常に小学生の人気料理の上位に位置する、子供なら誰もが大好きなあの料理。

そう、カレーである。

先程俺は同じ寮の友達の家へ行き、カレーを貰ってきた。

一回言ったとは思いますが、俺たちは自炊をしているのでこのようなことが多々あるのだ。だから少なくとも俺の友達は全員飯が作れて、レパートリーもそこそこある。……

味はともかくとして。

しかし、このカレーを作った奴は格が違う。

なんせ、そいつ自身が無類のカレー好きで、一週間に一回は必ずカレーを作っているぐらいだ。

そんな奴のカレーがうまくない訳が無い。

しかもその友三点……めんどくさいな、Kでいいか。Kは毎回毎回試行錯誤を繰り返してカレーを作っている。

それで中々いい出来のカレーを、友達価格で配ったりしているのだ。

ちなみに、有料であるにも関わらず、友達からは大好評だ。

正直言って、俺もあれはプロ顔負けだと思う。

もうカレー店開けばいいのに。

で、それほどまいカレーの香りは必然的に強く、いい香りになる訳で、

「お……お……」

香りを嗅いだらしいぬえが飛び出してきた。

って、ちよwwおまww

まだ食ってないでしょうに。

っーか、よくそっから嗅ぎ取れたな。

「とりあえず食べよう！　そういえばお腹減ってるの忘れてた！」

テンションたけえな。

じゃ、さっそく食べるとしますか。

少年準備中……

本日の献立

- ・友達による特製カレー
- ・サラダ
- ・麦茶

……シンプルイズベストってことで。決して手抜きでは無いぞ？
たまにはこんなのもいいでしょ。

つてか、さつきからぬえがウズウズしてるな。どんだけ腹減ってたんだろう。
そろそろ焦らすのも可哀想なので、食べるとしよう。

「もういいぞー、つて馬鹿野郎」

「あ痛あ!？」

ぬえの頭に軽くチョップした。なんでかって？

そりやお前、「いただきます」ぐらいは言わないとダメだろう。

「食う前にはいただきますすぐr」「いったいただきます!」速えなおい」

早いではない。文字通り無駄に速く、動きが見えなかった。

今も手を合わせたままの残像が残っている。

妖怪クオリティマジパネエ。

しかしおいしそうに食べるな。どれ、俺も食べるか。

……うん、いつも通り美味しい。

「こんなにおいしい料理食べたのいつぶりだろう!？」

「そりや良かった。作つ……じゃない、貰ってきた甲斐があるってもんだ」

やっぱり美味しいなこのカレーは。

しかし、初めて食べたときは吃驚したもんだ。何故かという……

「モグモグ……う、うん？ ……かつ、辛ア!!」

そう、滅茶苦茶辛いのだ。

もう今では慣れてしまったが、大分前にこれを食べたときは悶絶してたっけなあ。

だがそこがいい。

今日このカレーを夕食に選んだのは、実はこの反応を見たかったからだったりする。

そして、このカレーの凄い所はここからだ。

辛くて箸が止まらない。辛いけどあとを引く美味さがあるので、あと少し、あと少し、と食べ進めていくうちにカレーが全部無くなっているのだ。

というか、もう器が空になった。勢い余って、スプーンを皿に思いつ切りぶつけてしまった。バカス。

気づかずに全部食べ終わるとか絶対におかしいよね？

もうこれが、かの有名なGODなんじゃないかと思ってしまったほどだ。
あいつまた腕あげたな。

妬ましい。

などと考えているうちに、ぬえも器に大盛りあつたカレーをたいらげた。

「ごちそうさまでした！」

辺りを静寂が満たし、そしてぬえとともに仰向けに寝転んだ。

心地よい満腹感と、幸福感が一挙に押し寄せてくる。

この世で最大の悪は空腹だ、って言った人誰だっけなあ。今ならまさにその通りだと実感できる。

なんでこの世には紛争なんかが起こるのだろうか。

満腹だったらそんなことは起こらないだろうに。

ま、そんなことよりも今はこの心地良さを満喫しようかな。

「ZZZZ……」

ヤベエ！こいつ寝てやがる！

この一瞬の間に!?

……じゃなくて、こんなときに寝たら夜寝れないし、なにより……

言うのが憚られるが………太るぞ!?

「あべしッ」

こいつ……寝ていないだと!?

てかグーで殴られた!?

両親にも殴られたことないのに!!

……ぶたれたことはあるけど。

というか、めっさ痛い。

ピッチングマシンの野球ボールを無防備な腹に食らったような感触がするわ。

腹を押さえて悶絶しながら、ぬえのほうをチラリと見てみると、なんか微妙な表情だった。

強いていえば、反省はしてるけど、後悔はしてないっていう表情だな。

一応反省はしてるって時点で意外に好意はあるのかね？

まだ決まったわけではないが。

「また変なこと考えてたでしょ？」

さとりだろ。こいつももう種族名さとりで確定だろ。

「私は正真正銘生粋の鶴よ？」

……もう何も気にしない。うん、そうしよう。

おっと、そーいや伝えることがまだあったよな。

「はーい、ちゅうもーく！」

「何？　しょうもなかったらぶつ飛ばすわよ？」

「うわひでえ……まあすでにぶっ飛ばされてるしいや。今後の予定を発表するぞー」

「あんたねえ……遊びじゃないのよ？ 一刻も早く帰らないといけないって時に、あんなときたら……」

「だから、それについての話だ。明後日にちよつとしたところに行く予定があるから、ここにぬえも一緒に連れて行こうと思ってる。若干問題があるのは否めないが……気にしても仕方ない問題だから、ぶっつけ本番でいこうと思う。あと最後に聞いとくが、戻れる保障は無いし、むしろ少ない方だろうと俺は思ってる。それでもついて来る気はあるのか？」

「うん。どうせ他に方法も無いだろうし、帰れなかったらどこか放浪して、適当に探しくから大丈夫」

たくましいな。

俺ならそんな異世界に行ったらどうするだろうか。のたれ死ぬのがオチだろうな。

旅しながら生きるなんてこと、現代っ子の俺が出来る筈がない。

俺みたいに超かっこよくて親切な紳士に出会ったら生きれないことも無いだろうが

……

え？一言余計だつて？どこにそんな余計な言葉があるんだ？

……ハイ、すみませんでした。

だからそんな目で見ないでください。俺泣くよ？

という俺の願いが届いたのか、ぬえはパツと顔を切り替えて言った。

「じゃ、私お腹も一杯になったし私は寝るわね」

「歯磨きは？」

「え、何それ」

どうやら知らないようだ。それでそんなにキレイな歯なのか。

羨ましすぎるぞコノヤロウ。

「知らないならいいんだ。それじゃ、おやすみな」

「おやすみ〜」

さつてと、俺も寝るとしますか。

歯磨きもしたし、さあ……

俺の布団でぬえが寝てるのだけど、
いったいどうすれば良いのでせう？

第六話

「あゝ……体中が痛いわ……」

毎度お馴染み、夜鳥 剣二だよ。

なんで腰を押さえながら、こんなお年寄りみたいなこと言ってるのかというと、話は一昨日まで遡る。

簡単に説明すると、

ぬえ「眠たいわ」

俺「じゃあ寝れば？」

ぬえ「なら寝るわ」

俺「ちよw それ俺の布団w」

俺「しようがないし、床で寝るか」

で、この状態である。

いや、最初は若さにまかせればどうってことは無いと思ってたんだよ。

それで寝てみたら翌日から寝起きはひどいわ、体中が痛いわでもう散々だったんだよ。

でも女の子を床に寝かせるわけにはいかないでしょ？

そういうことする奴いたら俺はそいつの頭を疑うね。

んで、俺の部屋にはソファアとか気の利いた物はないから、ずっと床で寝ていたんだ。いやあ、この二日は大変だった。

寝るのがこんなに苦痛だと思っただのは生まれて初めてだね。

え？

ぬえと一緒に寝かせてもらえればいいのに、だつて？

そんなことしたら俺のどっかが吹っ飛ぶこと請け合いだな。

……どことは言わないが。

まあ、そんな話は置いといて、今日は俺にとつても、ぬえにとつても大事な日だ。

そう、お察しの通り、日帰り旅行と言う名の「ぬえを幻想郷に帰そうプロジェクト」というものを実行しようとしている。

因みに参加人数は二人。ぬえと俺だけだ。

他のやつは参加させてないし、そもそもぬえを紹介してすらいない。

そんなことをしたらどうなるか、そこの君には分かるだろう？

というわけでこれから出発しようと思う。

今は朝五時半。少々早いのだが、遠い地へと赴くのだから致し方ない。少し可哀想だがぬえを起こすとしてしよう。

「朝だぞー起きろー」

「ううー……あと十二時間……」

どんだけ寝るつもりだよ!?

あ、妖怪だし夜行性だろうからしょうがないのかも？

しかし今はダメだ。心を鬼にして、布団を引き剥がしにかかる。

「オラア!! 早く起きろ!!」

なにいつ!?

寝ているのにこの防御力の高さだと!?

転がしても布団が剥がれる気配がないぞ!?

仕方あるまい、最終手段だ。

「ほらほらどうした早く起きろー」

「ホッ……ホットケーキ?!」

ガバツと布団から這い出てきた。

いやあー、効果抜群だな、俺特製ホットケーキ。

昨日デザートに作ってみたところ、たいそうお気に召したようだったので、こんなこともあろうかと朝早めに起きて作っておいたのだ。

ぬえはすごい勢いでホットケーキを食べ進めている。その顔からは思わずかは知らないが笑みがこぼれていた。

これは早起きした甲斐があつたというもの。

朝から絶好調だな、俺。

「そろそろ出掛けるからな。準備はいいか?」

「いつでもどうぞー」

それじゃ、小旅行の出発といきますか。

「出席とるぞー。番号！」

A 「イチ！」

B 「ドゥーエ！」

M 「サード！」

K 「スー！」

「見事なまでに多国籍な返事をありがとう。全員いるようだな。よっし！ それでは彼の地へと出発だあ！」

「「「オオー！！」」」

K 「あの朝日に向かって走ろうぜ！」

(うっわ、朝からテンション高いなー……)

で、小旅行が始まったわけだが、少し説明をすると、Kがあのカレーを作った友で、Mがあの変態野郎で、AとBは普通の友達だ。

因みに全員東方ファンだったりする。

あ、厨ではないので、そこんとこ気をつけていただきたい。

そしてダルそうな表情をしているのが、言わずとも分かる今回の裏メイン、封獣ぬえだ。

今回、ぬえには完全黙秘を頼んである。俺が色々と設定を作ったので、ボロが出ないようにするためだ。

何で、当日にいきなり見知らぬ子供を連れてきたかを説明するのが一番悩んだところなのだが、適当に説明すると、適当に納得してくれた。

まあ、自分の財布が痛むだけだしね……。

……そんなことは記憶の片隅においやって、次いこう！次！

―電車―

A 「……で、俺はてんこが最強だと思うわけよ」

M 「そんなことより腹減ったな」

B 「そういやそうだな」

A 「スルーとかひでえ!？」

「じゃあ、飯にすつかー」

K 「フウーハハハ！ 我の弁当を見よ！」

M 「はいはい、カレー乙です」

俺 A B 「『そうだな』」

K 「うわひでえ!？」

M 「俺の弁当が最高だな！」

「キャラ弁作ってきてやがるぞこいつ！」

A 「しかも何気にうまい……だと!？」

B 「このチルノの青みは一体なにで……」

M 「ハハハハハ！ もっと我を崇め奉れ！」

(……楽しそうだしいいか。もう一眠りしようかな……)

「着いたー!!」

B 「割とすぐ着いたなー」

A 「オラわくわくすつz」

B M K 「おいやめろ」

「華麗にスルー」とにかくそこら辺をまわるとしよるか」

A 「異議なし!!」

B 「ないんかい」

M 「じゃあ適当にいくか」

K 「レッツゴー!」

(こんなんでも本当に戻れんのかな……)

そして、おみやげ物屋へ行ったり、ボロいゲームセンターへ立ち寄ったり、名所かどうかとも分からない場所へと行ったり来たりフラフラしながら……

彼らの今回の目的地————

諏訪大社へと辿り着いた。

第七話

やあ、毎度お馴染み夜鳥剣二だ。

なんか最初の口調が毎回変わってる気がするが、つつこまないでほしい。つつこむとしたら作者にいつてくれ。変える気は無いと思うけどな。

ところで、今俺たちはどこにいると思う？

そう、長野県の諏訪大社だ。

色々と電車を乗り換えたり、寄り道をしたりしながらもここまでやってきたのだが、

ここで一つ、ある問題が発生したのだ。

それは、ぬえの姿があいつらにどう見えているかということだ。

よく考えてみれば、ぬえって見る人によって姿が違うんだから、そこからボロが出るということもあり得る。

俺としたことが迂闊だった。

……しかし、考えていても仕方が無いので、思い切って聞いてみることにした。

「()いつ何に見える?」

「()お前より断然可愛い小学生だな()」

「()おお……ふ」

息ピッタリ合わせてきやがった。

いや、状況を考えるとそっちの方がいいのだが……

可愛さはどうでもいいとして、なんというか、ホラ、小学生に見えるってことは、俺

に女がついてくるわけがないというのを確信しているということなのでもあって、こ
う、つまり要約すると、「お前に彼女なんてできるわけねえだろjk」ということなのだ。
……自分で言つて悲しくなってきたので、もう次にいききたいと思う。

「ようしお前ら！ 神社でのルールを四つだけ答えよ！」

A 「参道の真ん中は歩かない！」

B 「二拝二拍一拝！」

K 「手を洗うときは左から！」

M 「痛絵馬はかけない！」

「なんか一個おかしいのあったがよしとしよう！ 他にも色々あると思うが、とりあえ
ず全速前進DA☆」

「「「おおー！」「」」」

(「いっつらは疲れというものを知らないのかしら……」)

ということ、今は参道をZUNZUN進んでいる。

若干体に疲労がたまってきたかな、というところで、本殿へと辿り着いた。後ろを見てみると、M以外はひぎに手をつけてハアハアいつている。

まさに死屍累々といった有様だ。

……さすがにそれは体力無さすぎだろお前ら……

M「だらしねえぞーお前らー」

そうだった。

何故かこいつだけは体力あるんだっけか。いつも家でゲームばつかしてる体のこと、こんな体力があるんだってほどすごいのだ。

この体力をフル活用して、警察から逃げたという逸話もあるくらいだ。

何をしてしまったかはプロローグ参照で。

こいつだったら幻想郷でも生きていけるんじゃないかと思ったりしたこともある。これぞ天性の才能というやつだろうか。妬ましい。

あと、完全に余談になるが、俺が東方を知ったすべての元凶はこいつだったりする。

そんなことを考えているうちに、みんな二拝を始めてしまった。

ヤベ、俺も始めないと。

俺は賽銭を取り出し、二拝二拍一拝を始める。

A (慧音先生に日本史を教えてもらいたいです)

B (おぜうさま h s h s したいです)

K (ゆゆさまにカレーを食べさせてあげたいです)

M (ゆうかりんに踏みつけてもらいたいです)

といった具合のことを願ってたりするんだろうな、こいつらは。

ちなみに俺は「ぬえが無事に幻想郷に戻れますように」だ。
ちゃんとした願いだろう？

こらそこ、意外だとか嘘だろとかいうな。

これくらいは当然のこと。日本国紳士としてはね？

ハイ、すみません。

某英国紳士の教授の真似がしたかっただけです。

でも、このことを願う気持ちは本物だぜ？

と、そうこうしているうちに、他のみんなも終わったようだ。

さて……これで何か変わってくればいいのだが……。

ここで自分がすることはこれだけだ。

そう。本当に神頼みだけなのだ。

情けないが、思いついた方法がこれだけだった。

諏訪子様ならなんとかしてくれるだろうと思つて、諏訪大社まで来て幻想郷の守矢神

社に届くように必死にお願い、もとい信仰したのだが、流石にこれだけでは効果は薄いだろう。

「というか、これだけで戻れるのならぬえは苦勞しないはずだ。」

「なので、なるべくしたくは無かったが、もう一つの作戦を实行したいと思う。」

「なんでかって？」

「そりやお前、この歳で半殺しか、運が悪ければ殺されるような経験なんてしたくはないだろう？」

「勿論、全員道連れだ。ぬえ除き。」

K 「お、おい……本当にやるのかよ」

A 「大丈夫だ、問題ない。ここまですればもはや生存フラグだろう。いや、そうだと
思いたい」

「みんな、死ぬ覚悟はできたか？」

M 「俺は別にどうってことないがな」

B 「よ、よし……いくぞ!?」

「せえーのお!!」

「「「「スキマBBA——!!でてこいやあ——!!」」」」

(うわ、ほんとに言っちゃったよ。殺されなきゃいいけど)

シーン……

「……生きてる?」

A 「うおおー!! やったあー!! 生きてるぞおー!!」

B 「まさかこの歳にして生の喜びを感じる時がくるとは……」

K 「……（半泣き）」

M 「面白くねえーな、なにかしらアクションあつてもいいのにな」

ふう……とりあえず死ななかつただけ儲けもんだな。あいつらは冗談半分で言ったのだろうが、存在が確認できてる分だけ、俺は怖かった。

マジで冷や汗出たしね。

そして、半分はMの言葉に同感だ。

というかアクションが無いと困る。

ぬえにとつての帰り道が無くなったことと同義なのだから。

……しかし何も無かつたものは仕方が無い。

俺がぬえにしてやれることはここまでのようだ。

あとは旅に向けて食料を渡すとかそれくらいだろうか。

俺だつて辛い、本当に仕方が無い。現実はいつでも無情なものなのだ。

「すまなかつたな、ぬえ。どうやらここまでが限界みたいだ（ボソツ）」

「いいって、どうせこうなるだろうなーなんてことは予想ついてたしね」

ちよいまち、それって俺が信頼されてないってことなの？

おいおい、最後にきつい冗談いつてくれるじゃないか。

……本当に冗談だったらいいんだけどなあ。

「じゃあ、ちよつと小便いつてくるから、荷物番頼むわ」

K 「まかせとけ！」

そのときだった。

友に向かって歩いていこうとした、そのとき、

突如、それは現れた。

「んなっ!!」

落とし穴のように現れたそれは、先ほどまで彼が出てきてほしいと願っていた、

「ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

スキマであつた。

第八話

突然だけど、今は自己紹介してる暇無いんだ。

なぜなら今、

「アツーーーーー!!!」

絶賛落下中だからさ☆

……こんなときでもこんなことがほざけるくらい冷静な自分を、純粹に尊敬するべき

か、それとも末期だと嘆くべきか、どっちが正しいんだろうね。

さかのぼること数秒前。

なんか落とし穴っぽいものに落ちてしまった。

で、意外に深いなーなんて思ってたら、なんかすっごいでかい目と俺の目が合ったんだよ。

その時、俺は理解したんだ。

ああ、これはスキマなんだってね……

……つて、こんな悠長にしとる場合か!!

なんで冒頭で気づいたのにもう一度落ち着いたし!?

ヤバいつて!このままじゃ帰れなくなっちゃうつて!!

いや、確かに如何なる手段を用いても幻想郷に行きたいって言ったよ？
でも、物事には順番というものがあるじゃないか。

例えば、食料用意したり、護身の手段考えたりとかさ。俺は、行き当たりばったりで生き延びることができると、幻想郷は甘くはないと思っている。

だつて考えてもみるよ、どんだけ危険な場所があると思つてんだ？

もしここから魔法の森に行つてみる、森の瘴気にやられるのがオチだ。他にも、灼熱地獄に行つてしまつたら普通に焼け死ぬだろうし、太陽の畑なんか花を折つたりしたら、即死程度じゃあすまないだろう。

……自分で言つといてなんだが、即死程度つてなんだよ、程度つて。

あ、天界ぐらゐの高さから落下死つてもあり得るな。

……とまあ、ザツと述べただけでもこれだけ出てきたが、まず間違いなくこれ以上のものが幻想郷では待ち受けているだろう。

こんな場所を己の身一つだけで生き延びろつて？

無理無理。

だから、元の世界に戻りたいんだ……つて、もう無理か。

いや、まだこのスキマが幻想郷につながっていると決まったわけじゃない。

もしかしてどっかの国につながっているかも？

どっちにしろ絶望じゃねえか!!

そんなことが、どんどん小さくなるスキマを見ている時、頭の中を走馬灯のように駆け巡っていた。

黒い影が見えた。

ああっつ!!

ぬえさんじゃないですか!!

うわーーーー!!

たーーーーすーーーーけーーーーてーーーー!!!

俺はまだまだ若いんだ!こんなところで死にたくない!!!

と、その時

濃い紫色だった背景が、一瞬にして青色へと入れ替わった。
今まで暗かったので、スキマが黒色に見えた。
その瞬間理解する、外に出たんだな、と。

とりあえず受身取つとくか、なんてことをもうすでにこの世の終わりを迎えたかのような頭で考える。

すると、今まで味わったことの無い衝撃が体を襲った。

鈍い音が響く。

どうせ死ぬんだつたらえーき様のところがいいなあ……

ああ、そうだ、

ぬえは帰れたかな？

そして、俺は意識を手放した。

(くそっ!! あのバカ!! 足元くらいちゃんと見なさいよ!!)

突然、剣二が落ちた。

よく見たら剣二が落ちた穴はスキマだった。

迷うことなくそのスキマに飛び込んだ。

ほんの少しの間、呆然としていたが、その間にどのくらい落ちてしまったのだろうか？
迂闊だった。

もっと早くに飛び込んでいたらすぐに手が届いたかもしれないのに。

無我夢中で剣二に向かって全速力で飛んでいく。

後ろのスキマは、たぶん閉じてしまったが、そんなの知ったことか。

あちらも自分に気づいたようで、手を伸ばしてくる。

あと、少し。

しかし、その手は届かなかった。

拳句の果てには、劍二が落ちていったスキマも閉じてしまったではないか。どうすることもできずに、呆然としてしまう。

ダメだ。こんなことしてても何も変わらない。

とにかく、そこらじゅうに開いているスキマの中から、自分のいる場所から近いスキマを探し、そこへと飛んでいく。

外へ出ると、そこは見知った場所だった。

少し時間がかかるが、ここからなら命蓮寺への帰り方も分かる。

「待つてなさいよ!! 絶対見つけてやるんだから!!」

まだお礼も満足に言えてないのに、死なせてたまるか。

そう思った次の瞬間には、ぬえの姿は彼方へと消えていた。

とにかく、目指すは命蓮寺だ。

第九話

目が覚めたら、そこは知らない天井だった。

……といった都合のいいことは無く、どこまでも澄み渡った青空が広がっていた。
まあ、これはこれで綺麗だからいいんだけどね。

紹介が遅れたね。俺の名前は夜鳥 剣二だ。

とりあえず、周りを確認するために起き上がろうとする。

が、

とてつもない痛みにそれを遮られた。

(痛ウツツ!!)

全身がガタガタになってる気がする。

これはヤバい。

例えるとするならば……

いや、例えるのなんて無理だな。俺の人生の中でこれほどの痛みを感じたことなんて無い。故に例えようが無い。

大事なことなので二回言いました。

とりあえず、このままで歩くのは絶望的なのでもうしばらく横になっていることにする。

……ハッ!?

イカンイカン、寝てしまっていたようだ。

体のほうは……まだ大分痛い、動けないという程でもないな。

ていうか空が若干赤みがかっているのだが……何時間寝ていたのだろう。
体を起こすと、そこには絶景が広がっていた。

「おおおおおおお!! すっげえ綺麗!!」

小学生並みの感想だが、もうこれ以外に表現のしようが無いほどに綺麗だった。赤みがかつた空に、遠くの方まで見渡せるこの高さ。ここから見渡す限り、鮮やかな紅や黄が広がっている。

ゑ？

見渡す限り？

イヤイヤ、おかしいよねこれ？

なんか一つくらい民家が見えてもいいくらいなのに。

人が住んでいるような痕跡というか、気配がここには無いのだ。

どんだけ田舎？と言いたいところだが、スキマからここへと来たのだ。

ここはどこぞの異世界かもしれない。

ただの田舎だったらどれほどいいことか。そうであつて欲しいと切に願う限りだ。

チラリと横を見てみる。

思いつきり石段だった。自分が立っているところを見ると、土だった。土の上に落ちてきたおかげで、衝撃が緩和されたのだろう。

もし少しでも横にズレていたら、と思うとゾツとする。

生きる喜びを噛み締めながら、俺は立ち上がった。

ああ、この痛みも生きている証なんだな、などと、本日二度目になる生への感謝をしながら、これからどうするかを考える。

とりあえず、人を探さなくちゃいけないよな。

もしくは民家か。

幸いこの石段があるから、人が使っていたということが予測できる。誰かが住んでいなくても、家くらいは見つかるはずだ。

というわけで、石段を登っていくことにした。

しかし長いこの石段。

下の入り口であろう所がゴマ程度にしか見えないのだが。

さらにでっかい門もある。

ここに住んでた人はどんだけ金持ちなんだ、とパルパルしながらも石段を黙々と登っていく。

ううむ、この長い石段にでっかい門……

もしかするともしかするのかわ?

しかし、いくら考えたところで進まないことには分からないな。

兎にも角にも進むしかないか。

少年前進中……

ふうー……大分進んだな。

辺りは大分薄暗くなってきた。早く見つけねば今日は野宿をすることになりそうだ。因みに、既に石段は越えて道に入っている。

もうそろそろ何か見えてもいいはずなんだけどなあ……

と思っていた矢先、ちよつとした明かりが見えた。

おお!! これはひよつとしたら!?

俺はその明かりに向かって走っていく。

だんだんと輪郭がはつきりしていき、その家が大きい屋敷であることが分かる。

表札は……無いな。

誰もいないのか?

うむ、とりあえず訪ねてみようかな。

「御免ください!! すいませーん!! ぐーめーんーくーだーさー……」

と叫んでいると、パタパタという音が門の向こう側から聞こえてきた。

「はい！ 分かりましたから！ もう少し静かにしてください！」

「おお、人がいたのか」

「いますよ！ まったくもうどちら様で……って本当にどちら様？ 天狗の新聞配達か
と思ったのに……」

「まあまあ、立ち話もなんですから、上がらせてもらいますね」

「それはこちらの台詞です!! というかまだ上がるとは決まっています!! 少し待っ
ていてください！」

「ここで追い返さないあたり、ええ子やな」。

とか、こんな適当なことを思っているが、内心滅茶苦茶テンションが上がっている。

今なら空もトベそうn……違う、飛べそうな気がする。

え？

今まで話してた人は誰だっけ？

そりゃ、こういうでっかい日本屋敷に住んでて、刀二本を標準装備、周りに人魂みた
いなのが浮かんでる人なんて、

魂魄
妖夢さん以外に誰がいる？

第十話

やあ、夜鳥劍二だよ。

今はややあつて白玉楼らしきところへと来ている。

というかほぼ確定でいいんだけどね。妖夢がいたし。半霊完全装備で。

「お待たせしました。もういいですよ、入っても」

若干不服そうな顔で、妖夢が門から顔を見せた。

何故に？

「あのですね……見知らぬ人が家に入ってきたら誰でもいい気はしないでしょ？」

まあ、そりやそうだな。

でもそこで遠慮はしない。なぜなら、そこに白玉楼があるからだ。

「それじゃあ、遠慮なく入らせてもらいますよつと」

「ちよつとは遠慮してくださいよ!! とうか変なことしたら即座に斬り捨てますからね!!」

「変なことなんて……しないよ？」

「今の変な間はなんですか!? そして何故疑問形なんですか!? 本気で斬りますよ!」

おお、こわいこわい。

いや、ただ適当に間を空けてみただけなんだけど、まさかここまで食いついてくるとは。

？
そういえば、妖夢って辻斬りのイメージがあるけど、本当に人斬ったことあるのかね

……やっぱ考えて怖くなってきたからやめよ。
思考を切り替えて、妖夢のあとについていく。

入ってまず目に飛び込んできたのは、庭だった。

相当綺麗に手入れされているようで、庭なんて一ミリも知識のない俺からでも、綺麗だと素直に思えるようなクオリティの庭だった。

思わず立ち止まってみていたようで、妖夢から声がかかる。

「そんなところで何してるんですか？ 斬りますよ？」

こええよ!!

自然に斬るという単語混ぜてくるのやめて!?

本当に刀に手をかけてるんだけど!?

すべての思考が斬ることに直結してるんですかあんたは!?

とりあえず、このまま止まっていたら斬られそうなので、歩きながらこの庭についての率直な感想を、出来る限りの平静を装いながら述べることにした。

「いや、この庭本当に綺麗だと思って。思わず見とれてしまったんだけど」

「そ、そうですか？ 私が手入れしたんですけど、そんなに綺麗ですか？」

「お世辞なしに綺麗だと思ったけど？」

照れてる照れてる。

ここには人があんまり来ないから、庭を褒められることがほぼ無いに等しいのかもしれないな。

幻想郷に住んでる人（妖怪含む）って庭とかに興味なさそうだしね。

どっちかっていうと、酒やら食べ物やらに目が無いみたいな感じだろう。

しかし可愛いな。

もつと褒めてみようか。

「本当にすごいと思うな、これは。庭師として普通にやってけるよ」

「そうですか!? いやあ、話合いますね! 庭についてだけ」

んー、最後の一言は余計だったとお兄さん思うんだけどなー。

そしてこのドヤ顔である。

だがそこがいい。

そうこうしているうちに、屋敷へと着いた。

近くで見ると、その大きさと雰囲気には圧倒される。

間違いなく、俺が今まで見てきた中でも最高の屋敷だろう。漂う雰囲気からして違
う。

すると、妖夢が大きい声で叫んだ。

「幽々子様ー! お客さんがいらっしやいましたー!」

「はあーい、どうぞー」

やけに間延びした声が、屋敷の奥から聞こえてきた。

この声……!!

俺の想像と同じ、いや、それ以上に雰囲気合っている……!!

これはゆゆさまに会うのが楽しみになってきたぞ。

何故なら、東方のキャラの中でも五本の指に入るくらい好きだからだ！
異論は認めん。

少年移動中……

「粗茶ですが」

今、俺は机をはさみ、ゆゆさまの対面に座っている。

そして、いまだに機能を停止しかけている自分の頭で、最低限のお礼の言葉を搾り出す。

「あ、どうも」

率直に言おう。

想像を遥かに超える美人さんだった。

これはヤヴァイ。

ぶつちぎりで今まで会った女性ランキング一位だなこれは。

俺が見とれていると、先に自己紹介を始めてきた。

「どうも、西行寺 幽々子と申します。気軽に名前で呼んでくださいね」

「あ、夜鳥 剣二です。以後お見知りおきを」

「魂魄 妖夢です。幽々子様の従者をやっています」

幻想郷って結構自由人多いから、従者も主人もそろって礼儀正しい人ってあんまりいないよね。

大体、主人がフリーダムだったりすることが多いと思うのは、俺の気のせいだろうか。

「妖夢、お茶請けはー?」

「ちようど先程のものが最後だったようで、もうありませんよ」

さつきも食ってたんかい。

二次ではそういうのってあったけど、まさか本当に大食いだったとは。

「買ってきてよ妖夢、今すぐにく」

「ダメですよ! 今日だけで何個お饅頭食べたと思ってるんですか! ただでさえうちのエンゲル係数がもの凄いことになっているというのに……!」

「買ってきてよ妖夢、今すぐダメです! ……はあい」

カリスマの欠片も無いな。まあそこが良い所なんだけどね。

そーいや、お土産屋でお菓子買ってきてたんだった。出してみることにした。

「……よかつたらこのお菓子食べます？」

「いいの!？」

「どうぞ。どうせ今日中に消費しないと腐っちゃいますからね」

なんだこの天使の笑顔。

こんなのいきなり見てしまった日には本当に天国へと誘われてしまいそうだ。

……危ない危ない、マジで昇天しそうになったわ。

これはいけるな、逝けるの方で。

「じゃあ遠慮なく……ヒュッ」

「消えた!？」

「日常茶飯事ですので、お気になさらず」

キャプ食いじゃねえか!

比喩じゃなく本当に消えやがったぞ!？」

次々とお菓子が消えていく……あ、最後の一個が胃袋の中に消えたな。

「美味しかったわ、これどちらで？」

「ああ、それは長野っていうところで買ったんですけど……ご存知で？」

「いや、聞いたことも無いわね」

「ということは……ここは幻想郷ですか？」

………キタ。

「あれ？ さつき言いましたっけ？」

「少し席外します」

「ちよつと？ どうしたんですか？」

ありったけの思いを込めて、ガッツポーズをしながら、外に向けて……叫んだ。

「日本に生まれて……良かったああああああああああああああああああああああ
!!!」

「………」

二人が絶句しているが、まあいいだろう。

叫ばなかったら、なんか感情が爆発して頭がおかしくなって死にそうだったからね。

要するにそんだけ嬉しいってことさ。

絶対人生で一回はあるでしょ、こういうの。

俺はその時が今だったという訳さ。

「失礼。あともう一つ聞きたいことがあるんですけど」

「なんとというか、すごくフリーダムですね」

「どうも。で、どうやったらここから外に帰れます?」

「ああ、あなた外来人なのね……そうねえ、紫に頼んでみたらどうかしら?」

やっぱりそうなるのね。

「こんな何の変哲も無い人間を相手にしてくれますかねえ?」

こんなことでもあり得るから困るよね本当。

「というか幽々子様、紫様は今冬眠中では？」

「そういえばそうだったわね」

オイイ!!

もう帰れねえの確定じゃねえか!!

リリーが活動始めるまで！

そういや、そんなこと妖々夢のおまけに書いてあったわ！

どうしてもっと早くに気づかなかったし！

もう手遅れだけどな！

「大方寝ぼけてうっかり開いたスキマにあなたが落ちてしまったんでしょね。運悪いですわねー」

本当だよ！

ぬえをこっちに現代入りさせたり、俺を幻想入りさせたり、どこまでも傍迷惑だなあ

の紫スキマBBAは！

などと、当の本人が聞いたら

##この言葉はスキマ送りにされました##

してきそうなことを色々考えていると、ある提案をされた。

「私の友達のミスだし、お菓子ももらったし、とりあえずしばらくこの白玉楼にいたらどうかしら？」

「あ？？」

今なんと？

「だから、しばらくはここに住んでもいいって言ったのよ」

「本当にいいんですか!? やったー!!」

「本当ですか!? こんな何処から来たのかも、何が目的かも分からなくて、すつつつつつ
ごく怪しい奴を!」

そこまで言わなくてもいいじゃないの。

あんまりそんなことばかり言っていると、そろそろ俺の豆腐ハートに傷ついちゃうよ
?

「お菓子をくれる人に悪い人はいないわ! 経験がそう言ってるもの!」

流石ゆゆさま、分かってらっしやる。

「それでは……これからしばらく、よろしくお願いします」

「ハア……また面倒事が増えそうなのは私の気のせいかな……？」

お疲れ様です。俺のせいなんだろうけど。

こつちに来てからどうなることかと思ったけど、案外楽に生きてけるんじゃないの？

今から春まで、俺の楽しく非凡な日常生活がスタートだぜ！

やったね！

少なくともこのときはまだそう思っていましたよ。ハイ。

第十一話

目を覚ますと、えらく和風な天井が見えた。

「おお!? ……って白玉楼か、ビビったー」

やあ、最近幻想入りして、今は何故か白玉楼に居候することになった夜鳥剣二だよ。

そういや昨日はなんか色々あつて疲れたからすぐに眠ってたんだっけ。

おかげで頭は冴えてるし、朝も早く起きられたし一石二鳥だな。

グゴゴゴルルルウウウウ……

なんか今すつげえ音聞こえたんだけど、何？

誰か魔物でも呼び出したか？

……ハイそうですよ！

昨日昼から何も食ってないんだよ！

そりゃこんだけおぞましい音も出るわ！

え？

まず腹の音だってわからなかった？

あ、じゃあ今のオフレコでお願いします。

と、まあ盛大に脱線しながらも、近況報告&恒例の自己紹介を終えた俺は、顔を洗いに行くことにした。

まず妖夢を探さないと。

「みよーんみよーんみよーんみよーんみよーんみよーん」朝からあなたは何なんですか、宇宙人ですか!!」いやいつも人間だけど」

「揚げ足を取らないでください！」

呼んでみた甲斐あつたな。

ん？　　そういやみよんっていうあだ名は知らないはずじゃ？

「そんな変なことを口走ってたら嫌でも耳に届きますよ。というか私はみよんなんて名前じゃありません！」

「名前とは言っていない。あだ名だ」

「くくく!!　　……ハア、気にするだけ無駄な気がするのでスルーします。で、何か用でも？」

対処法を身に付けられてしまったか。

意外に楽しかったんだけどな、妖夢いじり。

「顔を洗いたいんだけども、何処にある？」

「ああ、それだったら向こうの井戸の方で済ませてください。今から朝食作るんで、もう少し待つててくださいね」

「ありがとさん。朝食頑張つてねー」

「言われずとも、いつも頑張つてますよ」

「よっ、従者の鏡！」

「褒めても何も出ませんからね？」

チツ、完全にスルースキルを覚えられてしまったか。

……まあいいや。次はいきなりいじつてみよう。何か反応があるかもしれん。

あと朝食がすんげー楽しみだ。

やっぱ妖夢って料理うまいんだろうなー、と期待を寄せつつ、俺は顔を洗いに行った。

「おはよう〜」

まだ若干寝ぼけ眼のゆゆさまマジ天使。

「おはようございます、ご飯出来てますよ〜」

「あ、おはようございます！ おお！ 美味そうだ！」

「それじゃあ食べましょう！」

「いただきます！」

久しぶりのしつかりとした朝食だ。

さらに昨日の夜は、何も腹に入れてないもんだから、腹が減って仕方がない。他のおかずには目もくれずに、ホツカホカのご飯に箸を差し込んだ。

カチツ

………差し込んだ。

ガチツ

………なんでご飯が入っていないんだよ！

そして、ご飯が入ってないのに茶碗が温かいのは何故だ!?

「…………ご飯入ってないんですけど？」

「食べるのが遅いからですよ。ああ、ホラ、味噌汁もやられましたよ？」

は？ と、お椀を見てみると、先程まではあつたはずのスタンダードな豆腐の味噌汁が、まるでイリュージョンのようにきれいさっぱり消えていた。

「!? 無い…………だと…………!?」

「食卓は戦場よ？」

「ハッ!?」

よく見ると、妖夢とゆゆさまの手がブレている。

というか、二人の箸がぶつかってガツチガツチと音がしてる。

それにしたがっておかずがビデオの早回しのような速度で消えていつてるんだけど。

……ヤツバ!

飯食えねえじゃねえかよ!

少し呆然とした後、急いで手を付けようとしたときには、時既に遅し。

「もう……無くなっただど!」

結局、食べることができたのは、全体の五割にも満たなかった。そしてその食べることのできたうちの八割は余ったご飯だった。

……泣いてもいいよね?

と、まあこんな悲しいことがあつたわけだが、流石に手伝いをしないというわけには
いかないと思つて、妖夢の所に行くことにした。
働かざるもの食うべからず、つていうしね。

「洗い物手伝うよ？」

「結構です。私の仕事ですから」

「遠慮しなくてもいいのに」

「いいから休んどいてください！　そうだ、幽々子様と囲碁か将棋でもしてきたらどう
です？」

「とうわけで来ました」

「将棋なんて久しぶりだわ、うまくできるかしら？」

まあ、自慢ではないが、俺は友達の中ではボードゲームの神様と言われている。

オセロや将棋などはいわずもがな、シャンチー、果ては人生ゲームなども強いのだ。

その道一筋のプロなんかには流石に勝てないが、素人や中級者相手なら負けたことなどない。

「フフフフ……ハツハツハツハア！ この将棋マイスターと呼ばれた私がかかるーくひね
……」

られました。

「……む……無念ッ……!!」

「な、何もそこまで落ち込まなくてもいいんじゃないかしら？」

「貴方が強すぎるんですよ！　なんですかこの盤面！　ボロ負けじゃないですか！」

初めて対戦したゆゆさまは、プロ棋士と見紛うほどの強さだった。

経験の差だろうか、はたまた純粹な上手さなのだろうか、よくよく思い出してみると、先の先をうたれていたような気がする。

堅実にいきすぎたか？

「守りはよかつたんだけど、少し攻めが甘かったわね〜」

「ぐ……薄々気づいてはいたけど、やはりそうだったか……」

「少し詰めが甘いわね。それじゃあ、この勝負は終わりにして、部屋に色々なものを用意してあるから整理でもしてきたらどう？」

「あ、はい……で、俺の部屋は何処ですか？」

「それならその角を曲がって二番目の部屋よ」

「どうもー」

おお、すつごく広い！

十人は余裕だな。

まあ、こんだけでかい屋敷なら当然か。でも落ち着かない……

さて、持ち物の整理といくか。

一緒に幻想入りしたカバンには、少しの筆記用具、着替え1セット、財布、お菓子少々、暇つぶしのためのボードゲーム、とそれぐらいだろうか。

携帯電話なんか……ああ、圏外だ。使えるわけ無いよな。

……白玉楼の近くに落ちてよかった、本当に。

こんな装備で生きていけるわけがない。

不幸中の幸いってやつだな。

いや、この場合は幸運中の幸運か？

なんだかんだで生きて幻想郷に来れたし。
とりあえず部屋の散策といくか。

見つかったのは、布団と枕、着替えの着物が二着だった。
それ以外何も無し。

ヒマだし一人オセロでもしとこうかなあ。

「ご飯できましたよー！」

「うおっ！ もうこんな時間か。いやー、畳が気持ちよすぎて寝ちまつてた」

イグサの香りが俺の好みにジャストミートして、ゴロゴロしているうちに寝ていたよ
うだ。

因みに、一人オセロは十分とたたずをやめた。

虚しいぜ？ これ。

そうひとりごちながら、よつこらせ、と立ち上がり、俺は食卓へと向かうことにした。

「はい、みんな集まったわね？」

「もちー！」

「準備もこれで終わりましたよー」

そう言うと、妖夢はお酒を全員に配った。

未成年？

そんなこと気にしてたら幻想郷ではやっていけないぜ？
ってけーねが言ってた、気がする。

「それでは少し遅くなっちゃったけれど、剣二の幻想入りを祝いまして……」

「これって祝つてもいいんですか？」

「楽しければいいんだよ！ こまけえこたあ気にすんな！」

「コホン、それではー……」

「乾杯!!」

晩御飯はメインとご飯と味噌汁以外ほぼ食べられませんでしたが、ええ。

第十二話

やあ、毎度お馴染み、夜鳥劍二だ。

昨日は幻想入りの祝いで色々と夜更かしをしてしまったので、今は寝不足になってしまっている。ねみい。

俺は一日十時間寝ないとダメな人間なんだ。いやほんと。

「よっし！ 今日も気合入れてくか！」

頬をピシヤツと叩いてから居間へと向かった。

その部屋には何か重苦しい雰囲気————殺気ともいえるだろうか————が
充滿していた。

そんなものには鈍い、この俺が気づく程だ。修羅場を潜り抜けてきた玄人なんかが
見ると、絶対に命の危険を感じるはずだ。

昨日までは気づかなかった、この感じ。

今までの俺がどれほど気が抜けていたかが分かる。

気合を入れる必要など、微塵もなかった。

こんな所にいたら嫌でも気合が入ると言うものだ。

その部屋には既に二人の女性がいた。

お茶を配っているところを見ると、まだお膳立てがされて間もないということが分かる。

準備は整い、役者は揃った。

極限まで張り詰めた緊張感の中、試合開始の一言を三人が口にした。

「「いただきます!!」」

瞬間、空気がはじけた。

「つしやあー！」

まずは手堅くご飯からだ。

箸を伸ばし、炊きたての、光輝く白米を掴み取り、素早く口に放り込む。

絶妙な炊き具合に、頬が落ちそうになるが、今は悠長に味わっている暇などない。と、同時にゆゆさまの魔の手がこちらのおかずを狙ってきた。

相変わらず速い。

が、

「見切れないほどでもない!!」

ガチツツと音を立て、箸と箸がぶつかりあう。

「あら？ 防がれたわね、二日目にしては上出来よ？」

「そう何度もおかずを取られたら、俺の腹の虫が泣きますよ！」

「でも、いつまで続くかしら？」

そうなのだ。

見切れないほどではないが、防ぐことに手一杯になってしまっている。

対してあちらは攻撃を繰り返しながらも、口におひたしを運ぶほどの余裕がある。

誰がどうみても両者の差は歴然だ。

ちなみに、妖夢は手堅く自分のご飯を守りながら、順調に朝食を食べ進めている。

くそっ！

ここにいる奴らは化け物か!?

「お魚いただき♪」

「なにっ!？」

魚が皿の上から消えてしまった。

迂闊だった!

余所見してたからだ、くそつたれ!

「だが、他のおかずは渡さん!」

「いつからおかずがあると錯覚していたのかしら?」

ハツタリの可能性もあるので、スキを見せないように最小限の動きで自分の周りを見た。

「なっ……なにイツ!？」

おかずがほぼ無くなっている!?

馬鹿な! いつ奪える時間があつた!?

「目立たないように少しずつ取っていたのに気がつかなかったのかしら？」

目立つように俺のおかずを取りに来ていたのはフェイクだったのか！

見事に騙されてしまった、くっそう……

そうこうしているうちに二人は食べ終わってしまった。

……………今日も負けた……………

食後、ある重大な問題が発生した。

それは俺の精神に関する問題で、何もすることがない時や、何も予定が無い休日なんかによく起こったりする現象である。

まあ、簡単にいうと、「ヒマ」だってことだ。

だって考えてもみてくれよ。

仕事はさせてくれないわ、パソコンはいじれないわ、することと言えば昼寝か将棋くらいのもんだぜ？

ヒマにもなるでしょ。

「というわけでヒマなんです、ゆゆさん。どうしましょう？」

「そっか、敬語使ってるけど、別に使わなくてもいいわよ？」

因みにゆゆさんという呼び名は、ゆゆさまだったらおかしいし、かといって幽々子と呼び捨てにするのもなあ……という自分の中の葛藤によって生まれた呼び名である。

「自分が話しやすいのでいいんです。で、何かすることってあります?」

「ん、特に無いわね。妖夢の手伝いでもしてきたらどう?」

「それがさせてくれないんですよね、自分の仕事だから取らないで下さいって」

正確に言うと、一回はさせてもらったことあるんだけど、果てしない庭の掃除だぜ? 妖夢にとっては自分の仕事だからいいかもしれないが、俺にとっては地獄も同然だ。なんといつても終わりが見えないのだからね。今考えると、出来ないこと前提でやらせてた気がする。

悔しい。

「確かに変なところで妖夢は頑固だからね、うくん、折角ここまで来たんだから、何かの

修行でもしてみたら？」

「しゅ……修行？」

その発想はなかった。

自分が戦うなんて思いもしなかったからな。

「妖夢に剣を教えてもらおうとかね。妖夢ってああ見えても白玉楼の剣術指南役なのよ？
私は教えてもらったことないけど」

ふーん、修行ねえ。

今まで経験なんてしてないし、確かにこれから生きていく上でも必要なことかもしれないな。

「修行……いいですね！ やりましょう！ ……つて、俺武器持ってないんだつた。○

r z」

「蔵の中を見てきたらどう？ 剣ぐらいならあるはずよ？」

「貸してもらえます!？」

「貸すなんてこと言わずに、気に入った剣があったらあげるわよ？ どうせ大した物置いてなかったはずだしね」

「本当ですか!？ でもお高いんでしょう?？」

「私はお菓子の恩は必ず返すから、そのお礼とでも思ってくれていいわよ」

「剣貰えるんならお菓子なんていくらでもあげますよ！」

「と、言いかけたが、あとで取り返しがつかなさそうだったので、やめた。」

「やったー！ ありがとうございます!!」

で、今は蔵にいる。

やはり、白玉楼に見合つた大きさだつた。

雰囲気もあり、中にもたくさん物が収納されている。これなら、自分が使えそうな武器も見つかるとは思ふ。

先程、妖夢にゆゆさまと話していたことを話したら、ちようど蔵の掃除及び整理をするようだったので、あつさりとする許可をもらえた。

どうでもいいけど、蔵とか入るときってワクワクするよね。

「うーん……俺が使えそうな武器が見つからないな」

「この刀とかはどうです？ 長いし」

「いや、そうじゃなくて、重すぎて俺には使えないんだよ。しんどいし」

「貧弱ですね」

余計なお世話ですー。自分でも気にしてるんだよ。

しかし、本当に使えるものはあるのだろうか。

見たところ重そうで、ものものしい刀しかなさそうなのだが。

「そんなことは置いといて、他に軽くて、汎用性があって、尚且つリーチがありそうな剣は無いの？」

自分で言ってるだけけど、これすっげえ無茶ぶりだよな。

言うことが矛盾しまくってるし。

「またそんな無茶を……いや、でもそういうえば……ああ、あつたあつた。これなんかどうです？」

差し出されたのは、一振りの小刀だった。

なんか、彫刻とかで使いそうなイメージの小刀だ。

鍔は無く、鞘も柄も漆で黒く塗られている。

これといって、何の特徴も無い小刀だけど……。

何か秘密でもあるのだろうか？

「何の変哲も無い小刀だけど……いや、まあ確かにこの軽さだったら使えるけどさ。如何せんリーチが短いし、こんなので特攻したらやられるよね？」

「ふふふ、これは少し勝手が違いましてね、靈力をエネルギーに変換して、刃を作ることができるのです！ 考えようによつてはどんなことでも幅広く可能にすることが出来るのですよ」

「おおおお！ ……つまり、どういうことだつてばよ？」

「見せたほうが早いでしょうね。これをこうしてこうすると……ホラ」

と言いながら、妖夢は小刀を握った。

すると、なんとということでしょう！

小刀の刀身から、透明感のある青い刀が伸びてきたではありませんか！
それは妖夢の身長以上の長さに達した。

なにこれすごい。

「ちゃんと物も斬れますよ。こんな小石とかでもね」

言うが早いか、そこらに落ちてた小石を空中に投げて横に一閃。

見事な切り口を見せて小石は真っ二つになった。

「スッパリと斬れたな……その小刀いいなあ、貰いたいぜ……」

「いいと思いますけど、心配だったら幽々子様に聞いてきたらどうです?」

「マジで!? 聞いてくる聞いてくる!」

「いいわよ〜」

「うわっ! いつの間に!」

そこにいたのはゆゆさまだった。

というか振り返るとすぐそこにいたから、心臓止まるかと思った……。

「今来たところよ、どうせ刀なんて使わないし、持ち主がいたほうが刀も喜ぶものでしょう? 大事に使ってくれるなら、その刀はあげるわよ?」

「ハイ! それはもう大事に使わさせていただきます!」

やったぜ！ 自衛手段ゲツト！

……使えるかどうかはともかくとして。

「それじゃあ、後で妖夢と手合わせしてみなさいな、その刀で」

「剣二さんですか？ まあ、最近手合わせなんてしてなかったからいいですけどね。それよりも、あんまり弱かったら叩き斬りますから、覚悟してくださいね？」

あるえー？

何か不穏な空気になってきたのは気のせいかなー？

第十三話

やあ、どうも。夜鳥劍二だ。

今、俺は庭で妖夢と向かいあっている。

勿論、真劍を持ってだ。

正直言うと、死亡フラグのかほりしかない。

初心者相手に真劍とかありえないと思う。最初は竹刀とかじゃないの？
というか弾幕はどうした？

自分がさつき貰ったばかりの刀も、刃の出し方がぜんぜん分からんしな。
あれか、こういう感じで適当に力を入れればいいのか？

グツと力を入れながら、一般的な刀の形を想像した。
すると、薄い青色の透明感のある刃がよきつと伸びてきた。

「おお！ 伸びてきた！」

やれば出来るもんだね。何事もまずは挑戦が大事って偉い人が言ってた気もするし。

「あ、教えなくてもできるようですね。では始めましょうか」

「ちよつと待ってくれ、早すぎやしないか？ 俺できたばk 「じゃあ一本先取ね、命はとつたらだめよ」 聞いちゃいねえ!! というか今不穩な単語が!」

タマとつたらだめって何処のヤの付く人達だよ！

いや、タマとられたら俺が困るんだけどさ。とつても困るんだけども。と、そうこうしているうちに妖夢が構える。

「いきますよ!!」

言つた直後、漫画だったらドオン!! という効果音が付きそうな爆音をたてて、足元の砂を後ろに吹っ飛ばしながら妖夢が突進してきた。

「くぁwせdrftgyふじこp;;@:」「!!!」

おかしいって!!

俺、素人だぜ?

もう少し手加減してくれともいいでしょうに!

ヤバイヤバイヤバイ!! これマジでやらないきや殺られるぞ!?

落ち着いてよく見ろ!

俺にはゲームで培った動体視力がある……ハズ!

!! ……そこか!!

ガギイツ!!

妖夢の刀と俺の刀が金属音をたててぶつかりあう。

「あ、止められましたか。初戦闘にしては中々やりますね」

さつきはいきなり目の前に現れ、横に一閃したのが見えた。
怖すぎる……

「容赦ねえな!?　　というかガードしなかったら首が飛んでた気がするんだけど!」

正直言うと、このガードもまぐれでしかないと思う。

一瞬だけ見えることは見えたのだが、体がついていかなかった。

運動不足エ……

「大丈夫ですよ、寸止めしますから」

「うわー!　信用できねえ!」

表情一つ変えずに淡々と告げるあたり、しつかり止める自信はあるのだろうか……怖いものは怖い。

だって真剣だもの。

そして今は競り合いの真つ最中なんだが、さっきの一撃ですつごい手が痺れてしまった。

速さ×力＝威力つてよく言ったもんだよ。

いくら手が痺れているといつても、男の俺と力で負けていないんだから、さっきの速さと合わせてみれば威力の大ききなど一目瞭然だろう。

しかも息一つ乱さずしゃべれるほどの余裕。

絶対本気出して無いだろ。マジで幻想郷なめてたわ。

これ以上の化け物がここにはどれほどいるのだろうか……。

「さっきは防がれましたが、これはどうですか？」

と、俺の刀をはじき返し、袈裟斬りを重ねてくる。

うわ不味った。

この刀のリーチではとてもじゃないが防ぎきれない。

ましてや今の体勢じゃ、立て直してからの防御は時間がかかりすぎる。

となると、

(刃を伸ばすしかない……)

もっと伸びろ！

頼むから伸びてくれ！

すると、刀が俺の身長の二倍ほどに伸びた。

「え!?!」

妖夢も予想外だったようで、力が緩んでしまつて楽に防ぐことができた。

「この軽さでこのリーチなら……いける!!」

とりあえず体勢を整え、刀を振り下ろす。

しかし、両手で持つてかなり速く振つたにもかかわらず、防がれてしまった。

妖夢の手元を見ると、二本の刀が握られていて、その二本を交差して刀を防がれて
いた。

そう、妖夢は二刀流であるにも関わらず、今まで一本で戦っていたのだ。追加された一本は楼観剣、つまり長い方だ。

これからも、どれだけなめられていたのかがよく分かる。にしても、

「二刀流でやるとか聞いてないんだけど……」

「流石にこのリーチの違いではきついので、やっぱり二刀流に戻すことにしました」

「マジかよ……」

もうこれ絶対に勝てないよね？

一刀流ならもしかして、とか思ってたけどね……

と、そうこうしているうちに、妖夢がもの凄いラッシュをしてきた。

縦に降り下ろしたかと思えば、斜めに振り上げ、その動きを利用して横に斬る。

その間も白楼剣は休んでいない。俺が防ぐために振っている刀の軌道をずらすような嫌らしい攻撃をしてくる。

これ絶対捌けないって!! むしろ今捌けているのが奇跡だよ!!
せめて刀がもう一本あれば……

と、思っていると、なんか刃がニユツと短くなった。

「ちよ! ダメだって! 短くなったら俺死ぬって!!」

と、思ったら

ニヨキつという音が似合う感じで刀が二本に増えた。

な、何をいって（ry

そんなテンプレはさておき、形状を分かりやすく説明すると、十手の棒の部分の長さが刀くらいになったような形になってしまったのだ。
便宜上、十手刀と呼ぶことにしよう。

……ん？　もしかするとこれは……使えるか!?

「とりゃあ!!」

「あつ!!」

白楼剣を十手刀の間に挟んでひねり、後ろへと投げ飛ばしてやった。

これで妖夢は丸腰!

勝った!!

「しまっ!!」

…

丸

腰

!?

振り向いたときにはもう遅かった。

首にヒヤリとした感触を感じる。楼観剣だ。

「これで詰みですね」

後ろと前に妖夢が一人ずついる。

半霊の分身だろう。

「そーいやそんなこと出来たよなあ……そこまで思考が回らなかった。不覚。」

「参ったな……そんなことできるとは……」

いや、知識としては知ってたんだけどね。というか知っていると云ったたら問い詰められるに決まってるから言わないでおこう。

「危なかったです、使わざるを得ない状況でした。この幽明求聞持聡明の法が使えなかつたらどうなっていたか分からなかつたですね。でも貴方は戦闘のセンスはあるみたいですよ？ これですべて霊力増やす特訓なんかをしたら、たぶん幻想郷でも通用すると思

いますよ」

こういう風に褒められるのは素直に嬉しい。
が、

「俺みたいな一般人で通用するんなら他の人が妖怪に食われたりなんてしないよ……」

「それではこの試合は妖夢の勝ちね。妖夢く、そろそろおやつの時間にしましょうよ」

「そうしましょうか」

ま、なにはともあれ生き残ることができてよかったよ。

斬り付けられたときは本当に生きた心地がしなかったからね。

「楽しみだなー、幻想郷のお菓s……………」

といいながら刀を鞘にしまった瞬間、俺を強烈な立ちくらみが襲った。

向こうで妖夢が俺を呼ぶ声が聞こえるが、それも段々と遠くなっていくような気がする。

立ちくらみに耐えられずに地面に倒れた時、

意識がブラックアウトした。

「ハッ!？」

気がつくとも布団の上で寝ていた。起きてすぐだったが、倒れた時のことを鮮明に思い出すことが出来た。

一体どうしてしまったというのだろう。謎だ。

「あ、気がついたのね、よかったわ〜」

ゆゆさまの心配している顔マジ天使。

一目見たら疲れも吹飛ぶほどの元気がもらえるようだ。心なしか体も軽くなったよ
うな気がする。

「大丈夫ですか？ やっぱりあんなに無理して霊力使うから……」

ちよいまち、そんな副作用あるとか聞いてないんだけど？

「霊力は人の力の源なんですから、無理して使ったら倒れるのも当たり前でしょう？」

「俺は外人。俺この世界のこと何も知らないの。OK?」

話を聞かされていないのに、さも当然のように説明されたところに若干腹がたつたので、思いつきり舐めた口調で話してみた。

「何でそんな話し方なんですか!? 私は子供じゃないんですよ!」

「いや、何も理解していないからこうやって説明しているんだよ、分かる?」

「その話し方をやめてください! 心配して損しましたよ!!」

やはり、妖夢をからかうのは楽しい。真面目キャラだからいじりがあるのかね?

「それじゃあ剣二も無事だったことだし、早速ご飯にしましょうか。妖夢、準備お願い」

「何か釈然としない……」

因みに完全な余談になるが、この後、ゆゆさまと妖夢の二人に同時におかずを攻められて涙目になった。

第十四話

やあ、どうも夜鳥剣二だ。

あの妖夢との勝負から三日ほど経った。

男子三日会わざれば刮目して見よ、なんて言うが、本当にその通りだと思う。自分でも驚くほど、この三日で成長した。

今すごい実感が湧いてるもの。

具体的に説明すると、ゆゆさまと互角に渡り合える（夕飯）ようになったり、まだ負ける回数が圧倒的に多いものの、妖夢との勝負に勝てるようになったり、とにかくこの三日間で色々なことがあった。

なので、この三日間をダイジェストでお伝えしたいと思う。

〈三日前〉

妖夢の手伝いをしようとした。

やっぱり怒られたので、こつそり手伝いをした。
後で見つかつて、説教された。

もの凄く足が痺れてその場から動けなかったので、近くにあった半霊を掴んで立とうとしたら、妖夢が、

「ひゃあつ!？」とかいう、変な声あげて俺のことを殴ってきた。

グーで。ひでえよ……

何で殴ったかを聞いてみたら、妖夢曰く、

「半霊は私の半身だから、感覚が伝わるんです。いきなりあんなところを触られたら誰でも驚きますよ！ まったく……」だそうだ。

……どこを触ったのかは聞かないで欲しい。俺も分からんし、答え次第では俺が犯罪

者になりかねんからな。

因みに、半霊は低反発枕よりも少し柔らかいぐらいの柔らかさだった。まるでマシユマロのように柔らかいのだ。あれ触っているだけで一日過ごせるような勢いだった。

ご馳走様でした。

く一昨日く

妖夢と手合わせしたあとは、マジで何もすることが無かったので、刀をいじっていた。それで分かったことがいくつもあった。

まず、刃は最大で俺の身長 of 三倍ほどの長さになるということだ。それ以上は無理だった。

そして、鞘にしまったときに刀に霊力が吸収され、その分の霊力が体から無くなるということだ。

何もメリツトだけではないことは分かっていたけどね。

あと、自分の霊力が無くなって行動できるのは刀が身長 of 1、5倍ぐらいのときが限

界だった。

かろうじて歩けるくらいだから、もう少し余裕を持っておいた方がいいな、なんてことも考えながらその日を過ごした。

あと久しぶりに晩御飯をまともに食べれた日でもあった。
焼き魚おいしいです。

く昨日く

この日は妖夢と試合したり、刀いじったり、ゆゆさまとお菓子食べたりとか色々なことをした。

まあ今までとしていることは同じなんだけどね。

あと、刀の新しい可能性を探ることも出来た。

例えば、十手だけではなく、槍や長刀なんかの武器でも形を作ることができた。

包丁にも使える。この刀マジ万能だわ。

しかも霊力で作った刃は、完全防水で錆びないし、刃こぼれもしないので、手入れが

簡単で本当に使い勝手が良かった。

こんなもの貰って良かったのか、と思うぐらいだ。

しかもあとで妖夢に聞いたのだが、この刀は、あの有名な楼観剣を作った妖怪が、試作で作ったものだったりする。

……本当に貰ってもいいよね？

そしてこの日は初めて妖夢に勝った日でもある。

年甲斐も無く叫んでしまった。

妖夢がとても悔しそうだったのが印象に残っている（2828

至る、現在。

そして、心に余裕が出てきたのか、あることを思い出した。

ぬえのことだ。

「そういや幻想入りするときにおぼろげに考えていたような……
今までそんな大事なことを思い出さなかった俺の頭が恨めしい。

心配してくれるかなー……無いか。

でも顔はとりあえず見せておかないと、勝手に死んだことにされても困る。

この数日の特訓のおかげで、そこそこ戦えるようにはなった。体力はつかなかったけどね。

でも、戦い方が身についただけでも大収穫だと思うんだ。

中妖怪以上の存在に出会わない限りは大丈夫な気がするんだけど……

こんなので命蓮寺まで行けるか聞いてみようか。

「というわけで、少し行きたい場所があるのですが」

「行ってきたらどう？」

即答だった。何か根拠が無いと不安だな……

ゆゆさまの言う事だから間違いないとは思うけどさ。

「え、本当ですか？ 俺が行っても死ぬとか無いですよね？」

「強い敵に会わない限り、大丈夫だと思うわよ、ねえ妖夢？」

「はい。というか私に勝ったんですから、負けてもらっては困ります。負けたら斬りますよ？」

意外や意外。妖夢からお墨付きを貰った。

うーん、確かに最初戦ったときにも同じようなこと言ってたけどねえ……
というより、

「うん、まずその斬るといふ発想から離れようか。物騒ではないんだけど」

「斬れば分かります」

「それ絶対意味を履き違えてるんだと思うんだけどな……」

たぶん妖忌さんに教わったことなんだろうけど、その意味を勘違いするだけでこんなにも印象って変わるものなんだね。

これからは誤解を招かないように俺も気をつけないと。

「そんなことより、別に行ってもいいけど自分はどうなの？ 行きたいの？」

一緒にいたのは短かったし、性格も天邪鬼みたいな感じだったけれど、最後には俺を助けてようとしてくれた。今でも手を伸ばして必死で俺の手を掴もうとするあの姿が脳裏に焼きついている。

答えなど、選ぶまでも無い。

「……行きたいですよ、やっぱり居なくなったらままって思われるのは後味悪いですしね」
「なら準備しないとね、おにぎりごと飯と沢庵と……」

「飯ばっかりか!!」

「明日出れるように準備しておいて下さいね。さ、今日は少し豪華な夕食にしますからお腹すかせて待つておいて下さい」

「流石妖夢!! 分かっているわ(な)〜」

ヤベエ。滅茶苦茶うれしいんだけど。

今までそっけなかったのに、すっかり送り出す準備をしてくれるなんて……ハッ!! これがもしやツンデレというやつか!? そうなのか!?

あ、違いますか、そうですか、ハイ。

その日は至極真つ当に食事を終えた。

いつもなら熾烈な争いになるのに……これは雷でも降るのか?

「刀を腰に差して……よっしや！ 準備完了！」

そして次の日、俺は準備を終えてから玄関へと歩を進めた。

玄関に着くと、そこには朝早いにも関わらず、二人が待っていてくれた。

ゆゆさまは何か紙のようなものと、妖夢は少し大きめの風呂敷包みを持っていた。

「はい、これ地図ね」

「何処の？」

「マヨヒガへの地図よ。何かあつたらそこに駆け込めば、ちようど今だつたら藍がいると思うわよ」

おお、それは助かります。……マヨヒガによるのもありかな。

いやいや、俺には命連寺に行くという使命が、いやで m (r y

「それで、こつちはお弁当です。マヨヒガへは少し時間がかかるので、お腹が空いたらこれを食べてください。健闘を祈ります」

「いや、別に戦いに行くわけじゃないんだけどね。でも、何から何まで本当にありがとうございました。絶対またここに来ますから、待っていてくださいね！ それでは!!」

「それでは、「いってらっしゃい（ね〜）」

「ハイ！ いってきます!!」

う……

これヤバイ。

不覚にも泣きそうになった。数日一緒に過ごしたただけなのに、この温かさはなんなん
だ？

現代では中々、というかまず味わえない感覚だろうな……

こういうことが経験できただけでも、幻想郷に来て本当に良かったと思う。

かくして、俺の旅は今ここに始まった。

どんなことが起こるのか……今からでも非常に楽しみだ。

命に関わらないことなら、ね？

「今度来るときはお土産よろしくね」

……締まないなあ……

第十五話

やあ、皆さんどうも、夜鳥劍二だ。

今さつき、白玉楼を出てきたところなんだ。

もうね、マジで泣きそうになったよ。というか泣いた。

だって本当によくしてくれたんだもの。見知らぬ人にだよ？

その君には同じことが出来るかい？

俺は出来るな。(美少女、又は美女に限る)

さて、そろそろ

……この超長い階段を降りるとしますか。

ぐああ……疲れた……

この階段何段あるんだよ……

この俺の体力じゃきつすぎるぜ。降りてる途中で休んでしまったくらいだからな。もう足が筋肉痛になりそうだ……といふかなってるな。

しかしここで休んだら日が暮れてしまう。

ゆゆさまに貰った地図を見て、マヨヒガの場所を確認することにした。

………ん？

なんだろう、俺の目がおかしいのだろうか。

この地図、どう見ても落書きのようにしか見えないのだが。

比喩とかじゃなく、マジで。

かろうじてマヨヒガへの方向が分かるくらいで、その場所がどこにあるのかは見当すらつかない。地図と言われているが、落書きか何かと間違えていたかもしれないな。

目印は、何かよく分からん絵がマヨヒガと書かれた家の近くに描いてあるだけだ。

この地図によると、このまま真っ直ぐに進めばいいみたいなのだが……

しかもなんか右下の方に「ちえん」と書いてある。どうみても橙が描いた地図です。

本当にありがとうございました。

幸先悪いなあ、おい……

そしてゆゆさまに一言。

渡すときには中身の確認をしっかりしてください。
既に心が折れそうです。

ふー……

大分歩いたな

なんかね、正直言つてマヨヒガに着く気がしない。

かといつて命蓮寺に進路変更しようにも、方向がまったく分からないのだ。

あの地図の役割を果たしていない地図にも命蓮寺の場所は書いていなかったし、もうどうしようもない。

これで手詰まりな訳だが、止まることは出来ない。

なぜなら、どこぞの妖怪に襲われるかも知れないからだ。

せっかく幻想郷にきたんだし、名無し妖怪に襲われてジ・エンドなんてことは絶対に避けたい。

ハア……

景色は綺麗だし、空気もおいしいし、良い所なんだけどなあ。

命の危険性が極端に高くなければの話だが。

え？

白玉楼に戻って、案内してもらえばいいじゃないかって？

うん、君は分かかってないね。

あんな別れをした後に、直ぐ戻っていけるような奴がいたら、俺は純粋にそいつを尊敬するよ。

と、まあそんな訳でさつきからずっと歩き続けているのだが、行けども行けども同じ景色ばかり。

こんなんじゃないつまで経ってもマヨヒガに行くどころか、寢床を確保することすらできやしない。

どうすつかn……

うわ、出た。

なんか芋虫っぽいのが出てきやがったよ。

さつきあんだだけ妖怪に襲われるのは避けたいって言ったのに……

あ、これフラグだったか。

この出てきた奴が、ただの芋虫だってなら俺は無視して、とつとどつかに行くんだけどねえ、なんせそいつ目算で全長が二メートル強だぜ？

俺の身長よりかなりでかいのに、こんな奴無視出来る訳が無い。しかも、こつち見てるし。

触らぬ神に祟りなし。さっさと逃げようと思って踵を返した瞬間、後ろからドスドスと芋虫が歩くような音が聞こえた。

「ちよつ、こつち来んな!!」

虫嫌いだったら発狂しそうなほどの気持ち悪さでこつちに寄ってきた。

そして口をモゴモゴと動かしている。

……まさか

「おつとおっ?」

やっぱり糸はいてきやがった。ネバネバとした糸に掛かったら最期、もう動くことは

できなさそうだ。

間一髪避けることが出来たが、もう次は無さそうだ。
やるしかないか……

「正当防衛だ。悪く思うなよ？」

刀を抜き、標準サイズまで刃を伸ばす。

芋虫は動きが遅かったので、ど真ん中に簡単に斬りつけることが出来た。

が、

予想通り、斬り込んだ場所から緑色をした体液がこっちに飛んできた。

こんなもの絶対にくらいたくはない。

「この芋虫がツ!!」

某太子風に言ってみる少し前、体液が飛んでくるのを見越してあらかじめ刀をある形

へと変化させていた。

そう、盾だ。

これは、白玉楼を出てから思いついて、これがあれば攻防両方出来るんじゃないかね？ と
思つて試してみたところ、案外簡単に作ることが出来たものだ。

形を説明するならば、盾の真ん中を刀が貫いているような形になる。

かなり広範囲をカバーできるというのがメリツトなのだが、ここまで大きく、尚且つ
靈力の消費を抑えるためには、必然的に靈力を薄く伸ばさなければならず、まるで餃子
の皮ぐらいいまで薄くなつてしまうというのがデメリットだ。

とは言つたものの、刀と打ち合わせしても防いでくれるくらい強度が高い靈力なので、
これくらいの薄さでも、大体の攻撃は防げるだろうというのが、俺の推測だ。

で、しっかりと体液を防ぐことが出来た。べつとりと盾に付いているが、靈力と一緒
にすぐにとることが出来るので、何も問題は無い。

つて、え、ちよつと？

地面が「シユウウウウ」とかいいながら煙あげて溶けてるんだけど!?

おお……盾作つといてよかつたあ……

芋虫の体液と相打ちとか、笑うしかないね。

それにしても、この刀は本当に使い勝手がいい。

攻めも守りもこれ一本！　って感じだな。

ふと思ったのだが、今は芋虫だから攻撃をすることができた。しかし、もしそれが人型だったとしたら？

俺はさつきみたいに躊躇いなく斬りつけることができたのだろうか？

正直、今の俺じゃあ無理だったと思う。

幻想郷のような所では、こんなことで躊躇していれば確実に生存できないというのが俺の見解だ。

これからは、この先生きのこるためにこういった覚悟もしていかなければならないだろう。

……ま、取り敢えず今はマヨヒガに辿り着くことが先決か。

「ハア……威勢よく飛び出してきたのはいいけど、本当に着くのか？　コレ……」

まだまだ道のりは長そうだ。

そーういや芋虫ほつたらかしかしだけど大丈夫だよね？

番外其ノ一

やっとたどり着いた……

幻想郷の端からここまで来るのに、遠回りしなければならなかったり、雑魚に襲われたりして、数日ほどかかってしまった。

数週間前から今まで出ていたので少しばかり怒られるだろうが、事情を話せば納得してくれるだろう。

尤も、こんなことは頻繁にあつたので、怒るといふより呆れられるだけかもしれないが。

とにかく急がなければならないので、門の内へと入る。いつ見てもボロボロの門だ。少し前に勢い良く飛び込んでしまつて、門の一部の木が剥がれて直させられた。大分面倒だったから今回は気を付けよう。

門を慎重に潜ると、せーらー服(?)という服を着た女の子がいた。

その子は私を見ると、いきなり叫んだ。

「あーっ!! ぬえだ!! 今まで何処ほつき歩いてたのさ! 皆心配してたんだよ!」

そう、ここは命蓮寺。

人からは妖怪寺とも言われる、少し変わったお寺だ。

聖 白蓮という僧侶と寅丸 星という毘沙門天（代理）が、このお寺の代表的存在なのだが……

色々問題が多くて説明するのはめんどくさいので、詳しいことはg g rか、おまけt x tでも見てほしい。

私は封獣ぬえ。

自分で言うのもなんだけど、昔は都で恐れられていた大妖怪だ。正体不明にする程度の能力を最大限に使って、都を恐怖のどん底に陥れた時がちょうど……つと、武勇伝はまた今度にしておこう。今は急いでいるのだ。

そして先程私に話し掛けてきた女の子は、舟幽霊の村紗水蜜だ。

地底にいるときに知り合ってから、仲のいい友達になった。

……つて、こんな誰にしているかも分からない紹介なんてしてる場合じゃない！

「ムラサ！ 聖は何処!？」

「へ？ あそこの部屋で瞑想してたけど……そんなに慌ててどうしたの？」

瞑想か……邪魔して怒られたら事情説明どころじゃないけど、一刻を争うのだ。仕方ない、多少強引にいけばなんとかなるだろう。

「説明は後で!! 多分力を貸してもらおうと思うから、その時はよろしく!」

「うん……あ、行っちゃった。本当にどうしたんだろ？」

聖のいつもの瞑想場所へと辿り着き、ふすまを開くと「ターン」という軽快な音が部屋に響き渡った。

「聖!! ちょっと話聞いて!」

邪魔されたせいとか、イラついた様子を見せながらこちらへゆつくりと顔を向ける。聖の説教は長いからなあ……されなければいいんだけど。

「……誰ですか。今は瞑想中だと伝えてあつたはずですが……って、ぬえ!? 貴方、今ま

で何処にいたんですか！　今回はいつもより長かったから心配したんですよ!?!」

良かった。一番嫌なパターンは避けられたようだ。

でも心配させちやつたみたい。

……ま、出ていくのをやめる気はさらさらないけどね。

「私の頼みも、どっか行ってた理由も今からまとめてザックリと話すから!」

少女説明中……

「はあ……なるほど、そんなことがあったとは……スキマに入ったのでは仕方ありませんね。それよりも、本当に無事でよかったです。よく帰って来れましたね」

「だから、そのときにお世話になった人が一緒にこっちに来ちゃったの！ ……多分。

だからなんとかして見つけたいんだけど、手伝ってくれる？」

「……その人には妖怪だということは話しましたか？」

「もう最初に気づかれてたよ。でも、妖怪だということを知っても、私を泊めてくれたの。そんな人を放っておくことなんて出来ないでしょ？」

「……外の世界の妖怪に優しい人ですか、私も興味が出てきました。ぜひ、こちらまで来ていただきたいものです。しかしそのことは無しにしても、ぬえの恩人に何かあったら大変です。こつちに来てから何日経っているのですか？」

「六日ぐらいかな……」

「それでは、今すぐにでも出発しましょう。ムラサとナズーリンを呼んで来て。早くしないと時間がありません」

「ッ……!! ハイ!!」

「という訳なんだけど、皆お願いできるかな？」

「なんかよく分かんないけど、船はまかせて！ 何処へでも行つてあげる！」

そう言ったのはムラサダ。舟幽霊というだけあり、聖輦船を操縦することが出来る唯

一の妖怪だ。

船ではキャプテンと言わなきや怒られる。

……なんでだろ？

「探し物なら私にまかせてくれ。ご主人の宝塔探して培った能力ならすぐに探せるさ」

こう言うのはナズーリン。鼠の妖怪で、物を探すのが得意だ。ナズー曰く、鉄の棒を持つてるだけで、物を見つけ出す出来るらしい。謎だ。

いつもは何処かで外の世界の漂流物を発掘しているみたいだけど、今日はたまたまこつちに来てくれて助かった。

「ちよ、ナズー、皮肉混ぜてくるのやめてくれないですか……？」

弱弱しい声で懇願しているのは毘沙門天の代理、寅丸星だ。こんなんだけど実は命蓮寺で一番偉かったりする。命蓮寺の信仰を一手に引き受けているのだが、裏では聖が動いているとかなんとか。そこらへんの話はよく分からないし、関係無いので気にしない。

しかし従者に皮肉言われるってあんた……

「だって本当のことでしょう？ この前だって普通見つかるところに置いていたのに……」

従者から主人が説教されるなんともシニールな光景が見られるかと思つたが、ここで聖が間に入つて仲裁をした。

「まあまあ、その辺にして出発しましょうか。星には私達がない間の留守番を頼みます」

「任せてくださいよ。必ず命蓮寺は守りますから！」

「それでは行きましょう。ムラサ！ 船を出して！」

船が動き出した。もう少しで全体が宙に浮くだろう。

「じゃあ行くよー!! 皆乗り込んでー!! それとナズ、どっちに進めばいいの?」

「ふむ……北東の方向にそれらしき反応があるな。そっちの方向に進んでもらえるかな?」

「目指すは北東だね! よっし! このまま向かうから、ナズは近くに着いたら船を止めよう言っってねー!」

「これだけ人手使わせといて、勝手に死ぬんじゃないわよ! 剣二ー!」

「……フツ……フツ……フエツクシヨーイイ!!
ズズ……あー、風邪かな? しかしま
ヨヒガに着かないな……」

一輪「あれ？ 私出番無し？」

雲山「……」

第十六話

やあ、どうも、夜鳥劍二だ。

長々と話しても仕方ないので、率直に言おう。

「迷った」

さつきまで人が通るような普通の道通つてたんだけどなあ……
いつの間にか森の中の獣道を歩いてたんだよ。

いや、確かに俺は方向音痴だけど、流石にこれは無いと思う。

だって、俺が迷ったのなんて何の装備も無しに冬の山の中に友達と入って行って、帰り道が分からなくなつてカロリーメイトで夜を過ごした時ぐらいなもの。

うーん、あの時はきつかったなあ。

寝てしまいそうになつた時に、友達に何度起こされたことか。「俺はもうダメだ……
せめてお前だけでも早く山を降りろ」とか死亡フラグみたいなのも建ててしまったが、
結局回収せずに終わったのはいい思い出だ。

でも回収したら困るんだけどね。

そんな話はおいといて、そもそも気づかずに獣道に入ってる時点で、おかしいと思うんだよ、俺は。

意図的に森へと入ったんだっただらまだしも、無意識にだぜ？　ちよつと考え事してから周りを見たら木のオンパレードだよ。

この状況で俺にどうしろと？

まあ、どうせ元から迷ってたから、そんなに変わらないんだけども。

とりあえず歩くこと数十分。

そろそろ二時過ぎ……

くらいだと思う。体内時計クオリティだからあんまり気にしないでくれ。そういやKの腹時計の正確度は分単位だったな。今でもすげえと思うわ。だって何回やつても同じなんだからな。時計がわりに使ったことがあるほどの信頼度で、冬山ではものすごく頼りになった。

あと、他の人にとつちやどうでもいいことだろうが、さつき妖夢の作ってくれた弁当を食べた。風呂敷の中身はおにぎりや、具は昆布の佃煮だった。

それはもう大変美味しかったです。

しかし、早くマヨヒガを見つけないと日が暮れてしまうから、さつさと見つけられないな。

ハア、さつきから暇なので、周囲を見渡してみても、やっぱり周りは木ばかり。

森

森森森

森森森森森

漢字で表したらこれくらいいきそうだな。
それにしても獣道は歩くのが疲れるな……

よつほど体力ある人でないと……つとお？

もしかして……ありやあ、出口か？

向こうから強く光が差し込んできている。

これは行くしかないな。というか、行かなければならないな。
とにかく急いで外へと飛び出してみると……

普通の道だった。

ええ……そこはマヨヒガが見つかって、ヤッター！
つてなるとこでしようよ……

仕方が無いので、また探し始める。
果てしないなあ……

ん？

これって元の道に戻ったんじゃないのか？

よく見れば、なんか元の道と色々違うところがある。緑の多さとか、道の幅とか。気のせいかもしれないが、俺の勘がそう告げてる。

別の道に来てしまったか、こりや面倒なことになりそうだ。

もう既に白玉楼がどっちにあるかも分からないのに、どうやって探せばいいんだよ。

向こうの方を見ても民家なんて……

あつたわ。

こぢんまりとした家が一つ、ポツンと建っていた。

もしやあれがマヨヒガでは!? と思つた俺は、その家に急ぐことにした。

ここまで来るのに意外に時間かかったな。

まあ、遠目でかろうじて分かるくらいなので、そんなものなのだろう。それから近くで家を見てみると、白玉楼には及ばないが、なかなか味があつて良い家だということが分かつた。

というか何で俺は毎回毎回家の批評をしているのだろう。

別に家に興味があるとかじゃないんだけどなあ……

ここにも表札は無いようだ。

必要性が無いのだろうか。あつたら便利だと思うのだけど。

インターホンも無かった。時代が違うみたいだから、当たり前だが。

やっぱり自力で呼ばないとダメか。白玉楼の時はしつこくし過ぎたので、今回は普通に一回で呼んでみる。

「ごめんくださいーい」

周りが静かだと、音もよく聞こえるもので、奥の方からトタトタと足音が聞こえてきた。

「新聞なら要らないぞ……つと、人里の者か？」

なんで幻想郷の人って真つ先に新聞配達と来客を間違えるんだろうね。天狗のせい

だろうか。もしそうなら、傍迷惑以外の何物でもないよね。

「いや、まあ少々事情がありました……西行寺さんの紹介と言えば話は聞いてもらえま
すかね？」

すると、少し考えるような素振りを見せてから、俺の質問に答えてくれた。

「……フム。それじゃあ、立ち話も何だから上がってくれ。話を聞こう。こっちだ」

そう言うってから、俺は居間へと案内された。

「粗茶でシユ……がつ……」

嘸んだ！　嘸んだよ、今嘸んだ！

大事なことなので多分三回ぐらい言ったと思いました。すげえかわいいわー。赤面してるし。

と、小さな子供を見るような目でその光景を見ると、机の向かい側から言葉が飛んできた。

「あまり気にしないでやってくれるか？　なにぶんお茶汲みはあまり慣れていないものでな」

台詞だけ聞いていると子供思いの優しい人のようだが、だらしなく頬を緩めて、鼻血が吹き出す一步出前の状態で言われても説得力が十割減するだけだ。

今度はじつとそちらを見ていると、「ハッ!？」としてこちらを向いた。

「コホン、失敬。それでは本題へ入ろうか。私は、妖怪の賢者である八雲紫様の式の八雲藍だ。そしてこちらは私の式神の橙。見て分かる通り私は九尾、橙は猫又だが、よろしく頼む」

そう自己紹介した藍さんは、九尾の名前にふさわしく、いかにもモフモフしているような金色の尻尾が九本あった。服はなんだか個性的で、道士が着る服のようなデザインだった。猫又というように紹介された橙は、中華風の洋服を着ていて、二本の黒く細い尻尾が特徴的だ。

正直、こんな説明なんていらなと思うが、初めて尻尾が生えている妖怪を見たので、ありのままに伝えてみた次第だ。

藍さんの後ろで橙が俯いていた。嘸んだことを気にしているのだろう。

やっぱりかわいいな。なんでこんなにかわいいのだろう、かわいいは正義とはよくいったものだ。

でも俺はロリコンではない。断じて。

「初めまして、夜鳥剣二です。こんななりでも外来人ですが、よろしく願います」

とりあえずは自己紹介だな。別に気の利いた冗談とかを言う訳でもなく、伝えればいいだけのことを伝えた。なんか血液型とか星座とか自己紹介に入れる人って結構いるけど、あれって意味あるのかね？ 時間稼ぎと言ってしまうばそれまでだが。

「へえ、和服を着ているから人里の者かと思ったが、外来人なのか。……人里の者なら冥界には行かないか。それで、私達を訪ねてきたからには色々事情があるのだろうか、まずはそれを教えてくれないか」

「そうですね、掻い摘んで話しますと……」

今までの出来事を思い出しながらどうでもいい部分をはしよって話していく。

そうすると話を進めていくにしたがい、藍さんの顔が青ざめていくような気がする。幻想入りした後の話に入ると、急に大きな声が聞こえた。

「本ツツ当にすまなかつた!!」

「はいイ!？」

ちよ、いきなり叫ぶもんだから変な声出しちゃったんだけど。裏返った気がする。

「紫様の不手際でこんな危険な目にあわせてしまって、どう詫びればよいのか……」

「いやいや、そりやもちろん危ないとは思いましたが、妖怪なんてそんなものでしょう？ 現に失踪する人だっているんだし……あれってスキマの神隠しですよ？ 推測に過ぎませんが」

今地味に妖怪のことを批判したよね？ そんなものつてどんなものだよおい。

「多分、その神隠しの八割方は紫様によるものだろう。しかし、拐う人間には色々と決まりがあるんだ。例えば、生きる気力を無くした人間とか、忘れ去られた人間とかだな」

「ほー、そんな決まりがあつたとは」

本当にこんな聞いたことないな。まさか……生きる気力を無くせばこちらへと来れるというのか!? あ、こっちに来たいと思ってる時点で生きる気力あるから無理だわ。

「紫様が自分自身で決めたことなのだが、貴方は完全にその決まりに反している。つまり、ここへと連れてきてはいけない存在なんだ。向こうの世界でいなくなつて困ることだつてあるだろう?」

「ありますけど……個人的には、こちらへ来れてうれしい、という感情が大きいですね。だからそんなにお気になさらず」

藍さんは面食らつたような顔をしてから、不思議そうな顔をして聞いてきた。

「むう……それでは、今回は何の相談に?」

「少し知り合いを捜してましてね、命蓮寺つて場所にいると思うんですけど、何処にあるか分かりますか?」

「命蓮寺……ああ、最近人里の近くに出来たあの妖怪寺のことか。まあ、普通に案内も出来るが……それだけか？」

「どうやら場所を知っているようだ。流石に幻想郷を管理する妖怪の式神ならではの。こういった大きな変化に関してはきつと誰よりも早く情報を入手できるのだろう。やっぱスキマは便利でいいねえ。」

「ここに来たのは、それが本命ですからね。うん、なんとかかなりそうでよかった」

「しかし、もう日が暮れそうだ。今日は泊まっていくといい。いや、今日だけと言わずにしばらくここでゆつくりしていつてくられても構わないぞ？」

「すごい嬉しいんだけど、待たせてるかもしれないしなあ……。」

「あ、でもそういうえばここに来てからスペルカードを見ていないような気がする。」

「……よし、いい機会だし幻想郷やらスペルカードやらについて教えてもらおうか。命蓮寺に行くのはそれからでも遅くないはずだ。」

どうせもう一週間くらい経ってるわけだし。

「では、色々と教えてもらいたいこともあるので、お言葉に甘えさせてもらいます」

「よし！ それじゃあ決まりだな。橙、夕飯の準備を手伝ってくれるか？」

「は、はあい！」

「あ、自分も手伝いますよー」

「助かるな、それじゃ、これを……」

ようし、ここらで一つスベルカードでも使えるようになってぬえを驚かせてやるとするか。

どんな顔をするだろうか、今から楽しみだ。

第十七話

やあ、毎度お馴染みの夜鳥劍二だ。

先程藍さんと話し合った結果、俺はマヨヒガにお世話になることになった。ま、ほんの数日間だけだと思うけど、それでもありがたいことだ。

あと、本当にどうでもいいが、俺が藍さんと呼んでいるのは心の中での呼び方と、話しているときの呼び方を混同しないようにするためであって、つまり端的に言えば、俺が間違えて藍さまなんて呼んでしまったら気持ち悪いし、さらにドン引きされるだろうからこの呼び方になっているのだ。

さて、こんな話は銀河の果てまで投げ捨てて、今の話をしようか。

一言で言うと、ただ今絶賛夕食中だ。

さつきは藍さんや橙に混じって準備手伝ったりとか、料理手伝ったりをしていた。そ

れからは別に何か事件が起こったり、作業が中断させられたりすることもなく、今に至るといふわけだ。

……話す必要なかったかなこれ。

ちなみに今晚のメニューは、御飯、俺作(ここ大事)の油揚げと小松菜のおひたし、油揚げと豆腐の味噌汁、揚げ出し豆腐、魚だった。

……油揚げがやたらと多くね？ 料理の大半に混ざっているのだが。

狐が油揚げ好きって真実だったんだな、幻想郷に来てからこういった知らないことが多く学べて新鮮だ。今日だけたまたま油揚げが多かったという可能性もあるかもしれないが。

というか白玉楼でも気になってたことなんだけど、幻想郷には海なかったはずだよな？ それならなんで魚が食卓の上に出されているんだ？

あ、川魚ならあるかもしれないね、霧の湖や九天の滝もあることだし。でもね、このお皿の上の魚がどう見ても秋刀魚なんだよね。テラテラと脂がのっついて、まさに今が

旬！ といった感じで非常においしそう……って、そうではない。

この海産物をどっから調達してきたのか非常に気になるところだが、ここはスキマパワーで解決しておこう。うん、俺にはそれしか考えられないな。

いやー、便利だね、スキマって。

「ところで剣二君」

おっと、考え事に耽りすぎて危うく藍さんの話を聞き逃すところだった。

「はい、何でしょう？」

「さつき言っていたけども、聞きたいことっていうのはなんだったんだ」

「あー……今話したら少し時間がかかりますし、後でゆっくり聞かせてもらいます」

「ふむ、時間はたっぷりあるからな。それなら後でゆっくりと聞かせてもらおうとしよう」

やっぱり藍さんは話しやすくて助かる。ちよどいいところまでこちらの話を聞いて、キリのいいところでの的確な意見をくれるところは流石計算の得意な式神といったところか。

今思えば、妖夢とかは話しかけると、何かにつけて斬るという単語をおまけでつけてくるし、ゆゆさまはなんか考えがよく分からないところもあつたし、白玉楼ではよくあれだけ自然に溶け込めていたなと思う。

まあ、もつとひどいところもあるのだろうけど。主に紅すぎる館とか楽園の素敵な巫女さんが住んでいる神社とか。

そんなことを考えていると、不意に秋刀魚に向けてかなり強い視線のようなものが飛んできたので、ヒョイと秋刀魚の乗った皿をずらした。

「あむ……ありや?」

「くら、ちえ……ん!」

どうやら橙が俺の秋刀魚をとろうとしたらしい。俺が反応できない素早さだったの

は天晴れと言いたいところだが、相手が悪かった。

なんせあの白玉楼での食事せんそうを潜り抜けてきた人間だからな。いつの間にか食事に関しては人一倍優れた嗅覚を持つようになっていた。

これ幻想郷で生きていくために使えないかな。食事に関してだけは並外れた才能と身体能力を発揮する程度の能力とかで。

……自分で言ってるんだけど、こんなピンポイントで長い能力いらねーわ。もつとオールマイティな、そう、魔法を扱う程度の能力とか。……無理か。

横目で見やると、橙は不思議そうな顔をして箸とこちらの秋刀魚を交互に見ている。かわいい。

「どうやって今の動きを見切ったんだ!? 私でさえ不意打ちを喰らうときがあるのに!？」

え、不意打ち喰らうときあるんだ。今のは寝ながらでも防ぐことができるくらいの攻撃だったぜ?

……すいません、盛りすぎました。正直言うと、少しだけ自分の周りに注意していないと防ぐことはできないくらいの攻撃だった。というか無意識に注意を張り巡らすこ

とができている俺すげえ。どんなことでも身になってるんだね。

「うーん、少しだけ白玉楼での経験が活きたってことですかね」

「君、あの食事のとき限定の人外魔境をやり過ぎたと言うのか!?! その話、是非詳しく聞かせてくれ!」

九尾をもつてしてここまで言わせるとは。俺がいた場所って本当になんだったのだろう。生き残れたのが奇跡っぽいなこれ。

そういつたことも含めて藍さんに臨場感たっぷりに話すことにした。

少年説明中……

「へえー！ そんなことがあったのか！」

「本当にあのときは吃驚しましたね。まさかあんなテクニックが存在するなんて思いも
しませんでしたよ」

今更だけど幻想郷でやることじゃないよねこれ。こんなのやるのは美食屋が跋扈する世界だけでいいと思う。話してて違和感しか感じないしね。

「いい話を聞かせてもらったよ。それじゃそのお礼といつちゃ何だが、後で君の質問を聞かせてもらおうか。答えられる範囲ならどんなことでもお答えしよう。さ、まずは食卓の片付けといこうか」

「よっし、ちゃつちやと片付けよう。橙ちゃんも手伝ってくれるかな？」

「ちゃ……ちゃん付けはやめてよ！」

顔を赤らめながら言い放ってきた。

何このかわいい猫。今すぐにも抱きしめたい。

「ああ、ごめんごめん。じゃあ橙さん、これ運んでいってくださいな」

「もう橙でいいよ、敬語じゃなくても大丈夫だから。言われ慣れてないし、橙のほうがしつくりくるもん」

今回はからかうのを自重しようと思う。

何でかって？

そりゃあ、何か前の方から「ツチ」とかいう舌打ちが聞こえてきて命の危険を感じるからに他ならないからだ？

「ふー、これで一段落つきましたね」

わりかし時間がかかった気がする。一人増えるだけで結構かかる時間が違うのな。

「さて、することも無くなったことだし話を聞こうか」

藍さんは普通に愛想とかいいし、しっかりと物事を考えて動けるんだけどなあ、橙が関わってこなかったら。

橙が関わってこなかったら幻想郷の力のある人物の中でも良識ある方なのに。大事なことなので二回言いました。

「それでは単刀直入に……スペルカードってどういうものなのですか？」

スペルカードについてゲームの中での知識だけなら知っているが、細かい決まりなどは知らないのとおりあえず一から聞くことにした。

「ほう、スペルカードのことを知っているのか……って君は白玉楼から来たのだったな。知っていてもおかしくはないか。では、スペルカードのことを簡単に説明すると……」

藍さん曰く、スペルカードとは必殺技のようなもので弾幕ごつこの最中に紙にかかれた言葉……まあスペルのことだな、を宣言することによつて発動する、至つてシンプルなものだった。

しかしシンプルゆえに奥が深く、使用者によりさまざまな弾幕を見せるようだ。

というところまでが俺の知っているスペルカードの説明だ。

そしてここからの説明が幻想郷での決まりのようだ。

「まずスペルカードを作る時に注意するべきことは、相手がよけられるスキマを作ることだな。避けられなかったら遊びにならないからな。そしてもう一つは、意図的な殺傷はしないことだ。もともと安全を確保するための『ごっこ』だから、それでケガをさ

せてしまったら元も子も無い。しかし逆に言えば、弾幕ごっこは戦いをごっこ遊びにしたものであるために、攻撃の殺傷力は抑えてあるが、当たればもちろんケガをする。安全だとたかをくくっていると後悔するハメになってしまうから注意をしたほうがいい。……フム、大まかに説明するとこれくらいかな。他に質問はあるか？」

初めて知ることが多かったが、分かりやすい説明のおかげで一発で理解できた。もう一度聞き返すことが無くて本当にありがたい。ただ、疑問はいくつもある。

「恥ずかしながら弾幕が撃てないのですが……その場合は？」

「別に近接でも構わないぞ？ 私も突撃系のスペルカードを一つ持っているしな。他に持っている妖怪で言えば、紅魔館の門番なんかもそうだな。手持ちから察するに君はその刀で戦うのだろうか？ それに霊力でもなんでも纏わせて名前をつければ立派なスペルカードだ。華はもう少し欲しいところだな。あ、相手を斬るときはしっかりと刃を潰しておくか、霊力で切れ味を抑えるなどのことをして殺傷力を抑えるのを忘れずにな」

なるほどねー。たしかに星蓮船でも突撃（？）するスペカあったもんな。エア巻物とか。でも致命的な問題があるんだよなあ。

「うーん、霊力は一応扱えるし、スペルカードの案もありますけど霊力が足りないんですよねー」

「ううむ……それじゃあ少し小細工をしようか。実はスペルカードに使う紙は何の変哲もない唯の紙なんだ。それどころか、お札でも大丈夫だし、果ては紙なしでもスペルカードを出せる妖怪もいる。あくまで形式的なものなんだ。そこで、その紙をうまいこと使ってみよう。例えば、ここにある紙はお札を作るための紙なんだが、これには霊力を吸収する性質がある。これに霊力を注入して、戦闘時だけお札から霊力を引つ張り出す、なんてのはどうだ？」

「おお！ その案貰います！ これで懸念してたことは解決できましたよ、よかつた〜」

俺が問題解決してホツとしていると、藍さんは何か思いついたような顔をした後に、こんな提案をしてきてくれた。

「では、明日実際に訓練といこう。橙と戦って倒してみてくれ」

「ええ!?! それは少し急すぎやしませんかね……?」

「これはひどい。例えるならば、ただの一般人が格闘技経験者と戦うようなものだ。無理ゲーすぎるぜ。」

「出来るだけ早く慣れておいたほうがいいと私は思うがな。それに橙にはちゃんど手加減はさせるから大丈夫さ。兎に角、今日中にスペルカードを三つほど作っておいてくれ。紙はこの束を渡すから好きに使ってくれて構わない。私は橙にこのことを話してくるから、頼んだぞ」

「ちよつと待つて……ああ……」

「どうしていつもこんなことになるのだろう。白玉楼でも同じようなことがあった気が……」

ふう、でも過ぎたことを言っても仕方が無い。俺は俺なりにいつちよ足掻いてみますか。

フツフツフ、俺は普通の人間のようにはいかんぞ!!
首を洗って待っておれ、橙!!

第十八話

やあどうも、夜鳥剣二だ。

さて、今俺が何をしているのかと言うと。

「ハツハツハ!! その程度の密度の弾幕じゃあ俺を被弾させることは出来んなあ!」

「なんで当たらないのよお!」

「地上で避けているというのに凄いな……」

そう、みんな大好き弾幕ごっこだ。

今がどんな状況になっているかというのを詳しく説明するためには、少し時を遡らなければならぬだろう。

やつとこさ最後の一枚。二時間休んで若干回復した今の俺の霊力を半分ほどカードに染み込ませて……できた……!!

「フフフフ……できた、できたぞ……!! 睡眠時間は驚きの二時間！ こんな眠たい

のは久しぶりだぜ……そしてあとはこの俺の全力を注ぎ込んだスペカの威力を試すだけだ!! 今ならどんな妖怪にも勝てそうだ! フウーハハハ!

近年稀に見るテンションの高さだ。いまなら空も自由に飛べそうだ。あれ? おかしいな、彼岸花の花畑が見え……

「君は朝から元気だな……」

危ねえ、危うくこつち此岸からあつち彼岸へと行くところだった。

「あつ、藍さん、おはようございます! つべーわ、昨日二時間しか寝てねーわ」

「いやもうさつき聞いてたから。それよりも朝餉ができているから顔を洗って居間に来てくれないか?」

「ハイ! ラジャーでつす!! ツフウー!」

「本当に大丈夫か君……」

ちなみにこの会話からも分かるように、俺は寝ていないときはテンションがヤバイことになる。そうでもしないと立ちながらでも寝てしまいそうになるからだ。

体育祭のとき、前夜祭と銘打って徹夜したのはいいものの、眠すぎて100mを走りながら寝てしまい、観客席に突っ込んでしまったり、玉入れのときに盛大にポールにぶつかって中の玉ぶちまけてこっぴどく叱られたりしたのはいい思い出だ。

友人Mは俺よりもさらにテンションがヤバくなつて、放送席をジャックし、「私は東方が好きだ（中略）よろしい、ならば戦争だ」と言い切つてたっけなあ。その後謹慎処分くらつたそうだけど。

あれは本当にカオスな体育祭だった。俺らからあふれ出る雰囲気毒された生徒たちがスポーツマンシップ？ 何それおいしいの？ といった感じでお互いの組を潰しにきてたし。

あるものは情報戦で相手の組の生徒を寝返らせたり、あるものは敵の使う道具にトラップを仕掛けたり、拳句の果てには騎馬戦で皆が皆バットやら竹刀やら持ち出してきていた。

絶対無いとは思うけど、よい子のみんなはマネしないようにね！

盛大に話がそれたな。えーつと今は……そう、顔洗いに行くんだっけ。そんじやとつと洗って飯にしますか。

「「いただきます」」

今日の朝ごはんも昨日と同じようなものだった。強いて言えば、一品減って納豆に変わっているくらいか。

うう……それにしても眠い。何か、何か俺のテンションを維持できるような話題が……あつた。

「ところで橙、今日は弾幕ごっこするんだよね？」

「うん。ところでスペルはちゃんとできたの？」

「そりゃ夜通し考えたからね。それよりも、普通に弾幕ごっこやるには何か物足りない気がしない？ ……率直に言おうと、ちよつとした賭けをしたいと思うんだけど、どう？」

「賭け？」

「そう、俺が負けたら君にマタタビをプレゼントしよう」

「え!?! 本当に!?!」

「はっ。」

実は俺は無類の動物好きで、いつも犬か猫を喜ばせられるようなちよつとしたグッズを持ち歩いている。

今回持ってきたのはマタタビとその他色々で、流石に今回使う予定は無いだろうし、どっかの道具屋で売り払おうかと考えていたのだが、こんなところで役に立つとは思わなかった。準備はしてくるもんだね。

というか、藍さんから「は？」とかいう声が聞こえた気がするんだけど、気のせいだな。多分。

「俺が勝つたら……ま、そのときはそのときでいいか」

「よーし！ やる気出てきた！ 絶対負けないから覚悟してよー！」

「あの……」

「よし、そうと決まれば食べた後に早速勝負だ。いつとくが、こつちも初試合だからと行ってそう易々と負ける訳にはいかないからな？ そつちも覚悟しておいた方がいいと思うね」

「ふふん、そう言つてられるのも今のうちさ。あんまり早く勝負がついてもう一回やろ

うとか恥ずかしいこといわないですよ？」

「言つたなこいつ〜！」

よし、元のテンションに戻つたな。これで弾幕ごつこの最中は普通に過ごせるだろう。終わった後は知らん。勝負もまあ、こちらには秘策があるのでね。そう簡単に負ける気は無いさ。

あと、今視界の端のほうに藍さんが映つたときに、なんか凄く暗い表情をしていたんだけど気のせいだと俺は思う。

「さ、飯食べて腹も膨れて靈力が少し回復したところで始めますか！」

橙を見ると準備運動の屈伸をしていた。やる気は十分のようだ。

「いつ来てもいいよー」

どうやら準備は万端のようだ。妖力でも集めているのだろうか、普通ではない気配を橙から感じる。しかし、こんなのを感ぜられるようになった時点で俺って人間やめてると思う。この世界にはもつと人間やめてる人はいると思うけど。

「藍さん、ルール説明お願いしますね」

「ん、ああ……ハア……それではルール説明といこうか。今回は初心者がいるのでスペカは三枚のみの使用とする。一回被弾したら負けだな。特別なルールは無しでいこう。……そして、剣二君。マタタビを賭けの商品にしたからには付き合ってもらわねばならんことがあるので覚悟しておくように。もちろん負けたら、の話だがな（ボソツ）」

ん？

もしかして非常に不味いことしちゃったかな？ 今更後悔しても遅い訳だが。

「それでは、始め！」

藍さんの大きな声が庭に響き渡る。今更だけど庭でやって大丈夫なの？ コレ。

「さあ、この弾幕を避けられるかな!？」

橙はそういうと、毎度お馴染みマスカットのような通常弾幕を放ってきた。この密度から察するに、Easyモードといったところか。しかし悪いんだが、俺は小学生じゃないんでこの程度の弾幕なら地上でも楽に避けれる。自機狙いだし。

ただ、やはりというかこの世界は当然平面ではないので、放たれる弾幕も縦に厚みがあつた。

うーん、3Dとはやはり新鮮だ。

「この程度だったら寝ながらも避けられるぜ！」

「ならこれはどう？ 仙符「鳳凰卵 — Easy —」!!」

大きな声でスペルカードを宣言した橙はスペルカードを放り投げてすぐさま行動を開始した。

くると縦回転をしながら五芒星……陰陽師風に言うときーマンかな。その形の線をなぞるようにして移動する。

その際に頂点すべてに卵形の弾幕を置いていくのだが、次の頂点に移動すると卵形の弾幕が弾け飛び、赤やオレンジを基調とした弾幕がばら撒かれる……というのがこのスペルカードの全容だった。

しかし俺は友達の家で妖々夢のパターン作りを手伝ったことがあるのでこのスペカは攻略済み……言ってしまうと、橙のスペカや通常はすべて見たことがあるし、避け方も知っているのだ。これ以上のチートがあるだろうか、いや、ない。(反語) さらにEasyということもあり、すすいと避けることができる。地上で避けるんだからかなり難しいかな、と思っていたが、案外いけそうさ。問題は俺の運動神経なのだが……まあ、その辺は追々考えていくとしよう。

ときどき避けた先にまた別の弾幕が、なんてこともあったが、意外に速度が遅いおかげで難なく避けられた。そうこうしているうちにスペカを避けきった。

この間まだ俺は一回もショットを撃っていない。いや、そんなポンポン撃てないと

言ったほうが正しいだろう。

だって体力を弾幕にする訳だから、打ち続けたらガス欠で負けることもあり得る。さらにスペカを夜通し

作ったせいで今既に限界に近い。

たつた三つ作るのにここまで労力を使うとは思わなかった。それを勝てない言い訳にするつもりは無いけどね。

そして、最初に戻るといわけだ。

あんまりEasyで俺を舐めすぎてるよと痛い目見るぜ？

「初心者だと思って舐めすぎてたようね。ちよつとこれから出力上げてくよー!!」

というと、少し弾幕の密度が上がった。恐らくNormal程度までレベルを上げているのだろう。

だが、まだまだ避けられるぜ！

「それじゃあいくよー！ 天符「天仙鳴動」!!」

またクルクルと回りながら移動し始める。どうでもいいけど、これ目は回らないのだろうか。見ているだけでも気持ち悪くなるくらいのもので回っている。

その移動時に宙を漂う並サイズの弾幕をばら撒いていく。宙で漂うそれはあつという間に橙の居る辺りからかなり広くまで上空を覆い、スキマの多い壁のような形になる。そして、弾幕が震えたかと思うと、いきなり小さな弾に分裂してこちらへと自由落下してきた。

「とかおかしいよね？ 斜めなのに自由落下って物理法則無視……いや、もともとそんな常識は通用しないか。巫女が空飛ぶような所だしね。」

「だんだん速くなって、避けるのは厳しいかな、と思われたのでこちららも秘密兵器を発動しようかなと思う。」

さ、次はこちらの番だ。覚悟しろよ？

第十九話

ようし、一晩かけて仕上げた秘密兵器を発動しますか！

「スペルカード発動!! 破砕「金城鉄壁」!!」

抱え落ちは絶対に避けたいから、惜しむことなくスペカ使っていくぜ！

スペルカード宣言と同時に刀にお札を押し付ける。こうすることにより、昨日死にそうになりながらもつぎ込んだ、お札の霊力を刀に供給することが出来る。

さて、このスペカの概要を説明しよう。

まずはいつも通りに盾を展開する。ただ、いつも通りとは言ったが盾はこちらの方が断然分厚く、大きい。今回は機動隊の使うシールドみたいな形だ。具体的な形をイメー

ジすると形が作りやすいことを最近知ったので、今はフル活用している。

ちよつとばかし盾にイメージを使った細工をして、準備完了だ。
ね、簡単でしょ？

見上げると橙は少し訝しげな顔をしていたが、気にしても仕方ないと判断したのか、すぐにいつもの笑顔に戻った。余裕だねえ。

そろそろ弾幕がこちらに到着するので身構えて待つておく。

すると、ビシビシと音が鳴って結構な衝撃がきた。これ絶対生身で受けたら悶絶するレベルの威力だね……？　そうでなくとも、すりむいたときくらいの痛みはありそうだ。

本人は全然本気を出していないようだけど、実際本気出したらどんな感じになるんだろう……非常に気になるが、取り返しがつかなさそうなので怒らせるのは止めておこう。

でも被害がこちらに及ばないのなら凄く見てみたい（外道）。

「ホラホラ、防いでるだけじゃ私は倒せないよ！」

ま、それはさておきこのスペカ、ただ防ぐだけだと思つたら大間違いだ。このスペカの真骨頂、とくとお見せしよう。

しばらく降り注ぐ弾幕を防いでいると、ピキピキと音をたてて盾にヒビが入ってきた。橙のスペカの時間が終わりに近づくとつれ、そのヒビは広がりを増していく。ちょうど薄いガラス板に亀裂が入るように。

……あり？　こんなハズじゃなかったような？

慌てていると、橙がこちらをニヤニヤして見てくるのがよくわかる。クソツ、外道め！　さつき外道なこと考えてた俺も人のこといえないが！

橙のスペカの最終波が迫ってくる。弾幕と盾がぶつかり合うと、さらに盾のヒビが広がり、端まで到達してしまった。これ以上喰らったら、盾がブツ壊れてピチユること間違いないだ。

ちよ、ちよつとまってタンマタンマこんなはずじゃ……アツ——！！

………なんてね。

盾は確かにブツ壊れたが、それによつて撒き散らされた盾の破片が、橙の弾幕を相殺しながら勢いよく前の方向へ飛んでいった。

「うわっ！」

流石にこの展開は予想していなかったのか、橙は驚き、少し硬直していた。が、ギリでグレイズしながらも全ての弾幕を避けてしまった。

ううむ、元々弾消しと初見殺しを主軸において作ったスペカだからなあ。弾数もそこまで多くはないし、バラ撒きだから、妖怪の動体視力と身体能力があれば流石に避けられるか。改良の余地ありだな。

余談だが、金城鉄壁つてのは実在する四字熟語で、たしか守りが固いという意味だったと思う。したがって盾が砕けてしまうこのスペカは根本から矛盾していたりするのだが、そこに突っ込んだらおしまいなのであまり触れないでほしい。

さて、これで俺はスペカを一枚使用した訳だが、相手は既に二枚使っている。出し惜しみしても仕方がないし、もう一枚使ってしまいたいと思う。

「連発だ！ スペルカード、狙撃「二発必中」!!」

この宣言で、橙はかなり動揺していた。無理もない、連続でスペカ使うのなんて6ボスかE xボスくらいしかいないもの。ゲームの中での話だけどな。でも動揺しているのは非常にありがたい。注意力が薄れるから、そこを利用してもらおう。

俺は刀を構えると、腰のヒネリとかなんやかんやを総合させて、渾身の突きを繰り出した。別に剣道なんかをやっていた訳ではないので、完全に素人の突きになってしまったが、肝心なのはそこではない。大切なのは、突きを放った直後、刀の切っ先から大玉くらいの弾丸が勢いよく放たれたことだ。

ちなみに、弾の形はロケットランチャーの弾を採用してある。理由は特にならない。強いと言うとするならば、ロマンだろうか。

しかし、そんなことはどうでもよいと言うかのように、放った弾は靈力の雲を撒き散らしながら橙に向かって進んでいく。ちょうど飛行機雲のような感じだな。かなり細かいが。

橙はといえば、当たり前だがそんな真っ直ぐに自分へ向かってくる弾をみすみす受けるようなマネはしない。そこそこの速度の弾を、身をひねって最小限の動きで避けた。

うん、ここまでは予想通りだ。問題はここからなんだが……

流石に一発だけというのには橙も警戒しているのか、常に避ける体勢を崩さない。

うーむ、拙いな……気づかれるか？

ふと違和感を覚えたのか橙は後ろを振り返る。普通であれば、まず間違いないで被弾するような行為だが、今回に限ってはそうでもなかったようだ。

橙は体を一瞬硬直させたあと、回転するようにその場から脱出。その瞬間に、橙のいた場所を、さつき空の彼方に飛んでいったはずの弾丸が通過する。

そう、このスペカには、弾丸が相手を追尾するという特殊効果がある。

しかし放てる弾は一発、正確に言えば自動追尾ではなく手動追尾、一回目さえ避けてしまえば次からは絶対に被弾しない、などという欠点のオンパレードなので、使いどころが大事なスペカでもある。

ちなみに、分かる人には分かると思うが、「宝永四年の赤蛙」の完全下位互換とも言う。なんでこんなスペカ作っちゃったんだろね。深夜のテンションと言えばそれまでののだが。

無駄だと分かりつつも弾を橙に追尾させる。さつき「手動」と言ったのは、霊力で

きた雲を伸ばして、俺の意思で相手を追尾させるからだ。どうでもいいが、雲には触ることが出来る。鉄みたいにカッチカチだけど。

橙も、一度避け方が分かればもう楽なもので、ヒヨイヒヨイと跳ねるように避けていく。うーん、軽やかだ。

しばらく追尾させていると、札の分の霊力が切れそうになったので、スペカを終了した。橙も、もう先程のような動揺は見せていない。勝てる確率はかなり下がってきた気がするな。

俺が仕掛けてこないと判断したのか、橙は余裕を含んだ表情でこちらを見て、スペカを宣言した。

「もう終わり？ でもちよつとあなたのこと舐めすぎてたかも。ちよつと本気出してみるから頑張つて避けきつてみてよ。方符「奇門遁甲」！」

は？ いま何つった？ 奇門……遁甲……つてまさか……

聞き慣れないスペカの名前にしばし呆然としていると、前二つのスペカとは比較にならないほど夥しい量の弾幕がこっちに殺到してきた。

うわああああああああ!! これ Lunatic のスペカじゃねーかああああ!! Normal からいきなり Lunatic とかバカじゃねーの!?! Hard すら避けられないのにこんなのできる訳あるかあ!!

いや待て、落ち着け、俺にはスペカがある!! 抱えるのだけは御免だぞ! たしか懐に最後の一枚が……って、焦ってうまく取り出せん! このっ、このっ……っしやあ! 「発動!、閃……h」

懐から顔を上げると、目の前がキラキラ光ってたんだ。まるで花火のようにね。それで、ああ、これは橙の弾幕なんだなって気づいたときには、既に眉間に鱗型の弾幕がクリティカルヒットしていた。

目の前に火花が散った(物理的に)。顔面に並のパンチを喰らったぐらいの衝撃が俺を襲う。気を抜けば倒れてしまうだろう……が、ここで踏ん張り、体勢を整える。俺は

まだやれるぞ！ と、顔を上げたら、

目の前にさっきの数倍くらいの光が見えました☆

肩、腹、足、腕、とにかく体の至るところに着弾した。一発一発の威力はさほど高くないもの、これだけの量だとまったく違ってくる。集団リンチされてるみたいだ。橙は弾幕を放つのを既に止めていたようだが、その前に放っていた弾幕はまだ残ってい

るので、これでもかという程喰らってしまった。

そして止めに頭に一発をもらい、俺は意識がシャットダウンしました。

気がつければ俺はどこぞの館の中を走っていた。それはもう、凄まじい速さで。

それで、何でかは知らんが、弾幕が飛んできた。走り続けても絶対逃げられないと踏んで、その場で必死に避けるのだが、流石に精神と体力の限界が訪れてしまう。

諦めんなよ!! どうしてそこで諦めるんだよそこで!! ダメダメダメダメ諦めたら!! ウオオオ!! 俺は避けきつて見せる! 俺は……………俺はああああ!!!

「イ、エアアアアア!!」

「うわア?!?!」

ハッ!? 俺は一体…………?

「やっと起きたかー。いやあ、無事で良かったよ。あれは流石に私もやりすぎちやつたよね、ごめんごめん」

あー…………そういや俺、橙にフルボッコにされたんだっけ。というか本当に生きてて良かった。弾幕ごっこで死亡とかシャレにならない。まあ、フルボッコにされたといって

も、目立った傷も見当たらないし、気絶していただけなら万々歳だ。

「ところで、さつきからうなされてたけど、何かあったの？」

「少し悪い夢を見ていただけだ。気にしなくていいよ」

何故呪いの館だったんだろう。俺の深層心理はどうなっているんだ。意味不明過ぎるぞ。

まあそれは置いておくとして、

「結局負けちまった訳か、残念だ。それで、何すればいいんだっけ？」

「マタタビ!!」

「ああ、そうだったな。よし、取ってくるからちよつと待ってて」

しかし、猫ってやっぱりマタタビ好きなのかね。一応持ち歩いてるだけで、あんまり

使ったことないんだよね、マタタビ。個人的にはねこじやらしを振っている方が好きだ。あのじやれてくるときの体勢がたまらん。可愛すぎて死にそうになる。

さてと、どこにカバン置いたっけな。藍さんに聞いてみつか。てか今どこにいるんだ？

……いた。部屋のすぐい隅っこにいた。けど、なんか暗いオーラを発している。うん……ここまでスルーしてきたけど、これはもうスルーできないよな。

意を決し、どす黒いオーラを纏う（ように見える）藍さんに話しかけてみた。

「あの一……？」

「負けて……しまったな……」

負のオーラを一層強くさせた藍さんは、こちらを光の消えた目で見てきた。うわ、これ相当キてるな。藍さんに一体何があったんだ……？

「それがどうかしたんですか？　少し悔しかったんですけど修行不足な俺が妖怪に勝てるなんて思ってませんでしたから。これはしょうがないかなあ、と」

実際かなり強かったし。正直、初見殺しのスペカが外れた時点で勝てる見込みはほぼなかったからね。あとは悪あがきでしかなかった。

「では何故……何故、よりにもよってマタタビを」

「たまたまカバンの中にあつたからですが？」

どうやらこの一言が止めだったらしい。藍さんはがっくりと肩を落とす、台所へと向かっていった。そして去り際に一言。

「悪酔いした酔っ払いほど面倒な相手はいない……」

藍さんが立ち去ったあと、俺はその場に立ち尽くして、台所の方を見ていた。どうしよう。この後の展開が予測できてしまった。

これは悪いことをしてしまった。もうかける言葉が見つからん。そして俺の身が危ない。割と本気で。

このあと、夕食時にマタタビによって悪酔いした橙に、色々させられたり言われたりして俺と藍さんは病んでしまうことになるのだが、それはまた別のお話。

第二十話

やあ……どうも、夜鳥劍二だ……。

今回は話せないが、昨日の晩に色々あつてね、今はちようど藍さんと一緒に病んでいるところさ……。橙だけが「どうかしたの？」的な表情で見てくるのだが、流石にお前が元凶だ、なんて言えやしない。ただその可愛さにより、俺の心の清涼剤となつてくれるので、その辺りはよしとする。チラリと横目で藍さんを見ると、あちらもあちらで橙を心の清涼剤としているようだ。若干目つきが危ないことには目をつむっておこう。

さて、気を取り直して、今日も張り切つていこう。

といつても、今日は特に何もすることがないので、日向ぼっこでもするか、刀をいじるか、マヨヒガの中を散策するか、ぐらいいしか選択肢がない。

脳内会議をした結果、日向ぼっこをすることにしました。わーわードンドンパフパフー。

マヨヒガ散策をすることも思ったか！ 残念、今回はアクション無しだよ!!

いや、ちゃんとした理由もあるんだよ？ マヨヒガの中つてスゲー広いんだよね。多分幻術が何かの類いでそう見せられてるだけなのだろうけど。それで、マヨヒガを現代の言葉に直すと、迷い家になる。その名の通り、偶然ここへ迷いこんだ人が目にする家って訳だ。

つまり、これが何を意味するのかというと、ここをよく知らない人がさらに迷ったら、もうもとの場所には戻っては来れないってことだ。

でもそんなリスクがある代わりに、マヨヒガの日用品を持って脱出できたら幸運が訪れる、なんていうリターンもある。その幸運は些細なものから人生を変えてしまう程に大きなものまでピンキリがあるらしいけど、まあ要は生きて帰って幸せになるか、それともそこで野垂れ死ぬかは運次第ってことだ。

そんな危ない賭けに俺が乗るかと言われれば、否と言う他ない。あーハイハイ、つまらない男ですいませんでしたー。てかそもそも迷い家自体にはとつくのとうに辿り着いているのだから、これ以上深入りする必要はまったくと言っていいほど無い。

あと、刀については、昨日一昨日と無理をしすぎたのか霊力がすつからかんなので、今日はお休みだ。

という訳で、今は縁側にて日向ぼっこ中でありませう。

フハア〜……気持ちいい〜……。

最近では肌寒くなってきたが、今日はかなり天気がいいので、太陽の光の具合とたまに吹く風が実にいい感じのハーモニーを奏でている。

あ、唐突に睡魔が襲ってきた。こいつはかなりレベルが高いな。ぐっ、瞼が！ 瞼がものすごい力で閉じられようとしている！ と思つていたら閉じてしまった。あーあ。どうでもいいが、元から皆には糸目とか言われていたので、目を閉じていても外から見ればいつもとまったく変わらないらしい。なんじゃそりや。自分では普通だと思つてゐるんだけどねえ。

しかし眠い。もうこのまま夢の世界に旅立ってもいい……よね……？ そんなや、今回はこれで終わりつてことで。おやすm

「あ痛あ！ コラー！！ 何すんのさー！」

はあ、どうやら容易に夢の世界へはいけないようだ。さて、私の眠りを妨げるのは何処の何奴なのだろうか。顔をお見せ願いたいな。

「あ、夜鳥……つて怖いよ！　なんか後ろにどす黒いオーラが出てる！　笑顔が黒いよ！」

チツ、橙だったか。他人だったら家の場所を聞いてそこまで送った挙句に、飴をあげて迷い家まで戻ってきていたのに。え？　ドS？^{親切}　そりやどうも。

「……んで、そんな大きな声で怒ってどうしたんだ？」

「あ、寝てたの？　ごめんごめん、ちよつとその猫達が言うこと聞かなくてさ」

どうやらこの辺りに住む猫と争っていたらしい。顔にできた生傷がそれを物語っている。しかし、猫「達」？　どうみてもそこには一匹しか見えないのだが？

「いやいや、よおく見てみなよ。隠れてるだけだから。ホラ」

と言われて橙が指をさした方向を見ると、なるほど確かに猫が一匹隠れていた。しかしお前らいままで何処に隠れていたんだ？ まったく気づかなかつたぞ？

橙が言うにはまだまだいるらしいので、しつかり目を凝らしてよくよく見てみると、そこらじゅうにいるわいるわ、たくさん見つけることができた。その数十七。むしろ今まで気づかなかつた俺エ……。それから一匹ずつに目をやっていると、気づかれて観念したのか、十七匹全員がワラワラとでてきた。

「おおおおお？」

「ね、そこらじゅうにいたでしょ？」

出てきた猫は一斉にこちらのことを見上げてきた。いや、俺何もするつもりないから。別に観念しなくてもいいよ？ というか俺何かしたわけ？

そう思いながら困った顔で猫を見ると、思いが伝わったのか、自分の立ち位置へと戻っていった。

「どっから湧いてでたんだか……」

「元々この家にはこれくらいの数がいたけど？」

え、そうだったのか。ということは今まで気づかずに過ごしてたってわけか。こいつ等……できるッ!!

とか言いたかっただけなんだけどね。原因もわかったことだし、今度こそ夢の世界に誘われようかな。

「じゃあ俺そこの縁側で寝とくから、あんまり物音は立てないように頼むわ」

「守れるようには努力するよ」

ということとは守れない可能性大ってことなんだろうな。でもこっちは泊めてもらってる身だから、多少のことは我慢我慢。それに俺は少しのことじゃ動じない。こちらら伊達に何回も野宿していかないのさ。

橙にそう言った後、頭を掻きながら移動して縁側にゴロリと寝転んだ。おおう、この床の冷たさが何とも言えないな。夏も気持ちいいけど、春や秋もいい。ただし冬、てめーはダメだ。

てな訳で、寝ようか……と思ったのだが、これが中々眠れない。ちくせう。

しかも、後ろでは気をつかって音をたてないようにしているのだろうが、ゴソゴソとしては余計に気になってしまう。一回気にすると異常にそれに集中してしまうという、よくあるアレだ。

しかし、せつかく気をつかってもらっているのに、今更「あ、別にうるさくして平気だぞ？」言うのもなんなので、逆に後ろに集中してみることにした。外向いて目も閉じているが、大体のことは想像できるので精神統一して音を聴き、俺の類い稀なる妄想力を駆使して、起こっていること実況していこうという魂胆だ。

まずは集中だ。如何なる音も聞き逃さないという気持ちで臨む。コラそこ、無駄遣いとかいいな。

……お、動きがあつたようだ。この一定のリズムで聞こえる、小さな足音は猫だろう。聞いたことのある俺が言うのだから間違いない。そして橙にも動きが、立とうとして……座つたな。大方、猫に挑発でもされたのだろう。ていいうかなんだコレ、スゲー想像

が広がる。

そして精神統一してから数分後、橙は後ろで猫と元気に追いかけています。ええ、ものの数分でしたよ。ま、予想はしてたけどねー。少し早すぎる気もしたけど。そのまま外側を向いている必要はなくなつたので、寝返りをうつ。と、目の前にドアップで猫の顔があつた。

「おおおう!？」

猫は意に介さずこちらを見る。まるで「何があつたんです?」と言わんばかりの不思議そうな表情だ。コノヤロウ、可愛いじゃねえか。あまりに可愛かつたので、俺のテクニクを使つて猫をいじり倒すことにした。

まずは喉元からだ! フハハハハ! 今まで味わってきた気持ちよさを超越するそれに倒れ伏すが良い!

「ニャーン……」

いやあー、やっぱり猫の毛並みは気持ちいいわー。触っていてクセになるな。友達の家でも触っていたから余計にその感触が思い出される。

……今は元気かな、あいつら。まだここに来てからほんの少ししか経っていないが、気になるものは気になる。

あー、でもあいつらは俺が居なくても元気でやつてるんだろな、今とか「俺はッ！ EXクリアするまでッ！ リトライをやめないイツツ!!」みたいなことをやつてるんだろな。ダメだ、考えてて虚しくなってきたからもうやめよう。ホラ、こつちに来いよ、俺の心を癒してくれ、名も知らぬ猫よ。

そんな俺の切実な思いが猫に届いたのか、身をこちらに寄せてきてくれた。本当、お前はいい奴だよ、さつき会ったばっかだけど。俺の胸の前で丸くなって、気遣うように見てきてくれた。あれ？ 目から汗が……。

しばらく猫を撫で続けていると、走り回っている橙はこちらの様子に気づいたようで、驚愕の表情を浮かべながら駆け寄ってきた。

「なんで数日前に来たばかりのあんたに服従してるの!？」

ちよ、服従て。どう見ても服従してるようには見えないでしょうよ。というか、服従という言い方はもう少しどうにかならんものか。

「いやいや、少しだけ懐いた、というか対等に見てもらっただけさ。そんなに驚くようなものでもないよ」

「何日かかっても私の言う事なんて聞こうとしなかったのに……」

うーん、言う事を聞かせること自体が難しいからな、猫は。犬なら、賢かったら聞くけど。

「まず猫つてのは他人の言う事を聞こうとしないからね。自分の仲間だ、なんていう意識はもったりするけど、言う事を聞こうとはしないよね」

「え、そうなの？」

「逆に聞くけど、自分はどうなのよ？ 藍さんとか紫さん以外の言う事は聞く？」

「時と場合によるけど、基本的にはあんまり……」

「でしょ？ だから言う事を聞かせるためには、主人となる人と従者との間……橙の場合で言えば術者と式神かな、の間には圧倒的な差がないといけないんだ。橙だって全力を出しても藍さんの足元にも及ばないだろう？」

具体的には、鬼と天狗とか、閻魔と死神とか、親と自宅警備員とか。

「確かに、勝てたことは一回も……」

「つまるところ、自分自身を上まで持つていけないと、この猫たちは言う事聞いてくれないうってことさ。この猫はそんじょそこらの猫よりも賢いみたいだからね、相当頑張らないといけないよ？ それか式神の実力を落とすとかね。鼠なんかいいんじゃない？

猫は天敵だし」

「絶対やだ！ 自分で頑張るからね！ まずは私の実力を教え込まないと……つて、そ

んなところに！ 待てー!!」

……話聞いてたんだろうか。まずは自分の実力を高めるって言ったのにねえ。お前もそう思うだろう？ 猫よ。

そう聞くと、猫はニヤオン、返事を一つ返してくれた。ついに庭にまでフィールドを広げた猫たちの追いかっこは、まだまだ終わる気配がありそうにない。

結局、それが終わったのは三時間ぐらい過ぎた頃だった。橙は疲労困憊でもう動けそうになく、縁側で倒れ込んでそのまま寝てしまった。全力疾走し続けてたからなあ。それにしても寝顔が可愛い。

猫たちもかなり疲れたようだが、してやったり、といった顔で橙を見ていたので、問題はないと思う。それから、いつの間にか全員が縁側に集まって日向ぼっこをし始めた。何匹か橙の周りで寝ている奴もいる。お前ら本当は仲良いんじゃないの？

そんなことを考え、苦笑しながら太陽を見上げた。若干光も柔らかいで、少し肌寒くなってきたが、まあ日が落ちる前に起きればいいか、と俺も縁側に寝転んだ。

フウー……平和だ。

第二十一話

やあ、毎回毎回しつこいと思うが、夜鳥劍二だ。

またやつちまったよ。元々そのために此処に来たつていうのに、それ自体を忘れてどうすんだよ、俺。ああ、一日だけとはいえ、やるべきことを忘れてぬくぬくと過ごしてしまつた……気分は正に墮天使！

などと封魔師のようなことを言っていないで、すぐに此処を出発しなければならぬ。こつちに来てから何日経っていたか……少なくとも一週間は経つてはるはずだ。妖怪に襲われたなんて思われてなきやいいけど……。いや、それよりもまだぬえがこちらへ来ていると決まつた訳じゃないんだ。まずはその確認をするために行かなきゃならないな。

え？ さつきから「それ」とか「その」とかなんのことだつて？

そんなの決まってるだろ。命蓮寺のことだよ。

「と、ということまでありがとうございます……ございました」

「と、唐突だな……」

素直に驚いたような顔の藍さん。

「いやー、急ぎの用事だったのにちよつとゆつくりし過ぎてしまったもので。そろそろ行かないといけないと思いましてね」

「もっとゆつくりしてもらってもいいのだが……しかし急ぎの用事ならば致し方ないか」

「それで、命蓮寺までの道が分からないので、案内を頼みたいというのが最初の目的なんです……」

「ああ、構わないよ。ちょうど食材も切れかけていてね、買い出しにいかねばならないところだったんだ。命蓮寺は人里の近くだったから、ついでに送っていいこう」

「本当に助かります。それじゃ、早速準備をしましょうか」

「忘れ物のないようにな」

俺は小学生か。

「え、もう行つちやうの？」

やはり橙も驚いたような顔を見せた。長居はしないと云ったはずなのだが……。

「そうだけど、きつとまた直ぐに会えるさ。というか来なかったらこっちが困るからね」

「ふーん……いつ頃になりそうなの？」

「来年の春くらいかな。ちよつとばかしズレることもあるかもしれないけど、まず間違いないと思うよ」

「そっか。じゃ、くれぐれも体に気を付けて。今度弾幕ごっこするときはあるんまり簡単に負けないですよ？」

ほう、言ってくれるじゃないか。

「よく言うよ、結構危なかつたくせにさ」

「あれは油断してたからよ。本気出してたら数秒で終わってたから」

「へえ、そいつはどうだろうねえ？」

しばし橙とにらみ合うと、橙は何かを思い出したような顔をして一言告げた後に何処かへ行ってしまった。うーん、もつと食ってかかると思ったんだけど。

その数分後、何か綺麗な音が部屋の外から聞こえてきた。ふすまを開いて、入ってきた橙が持っていたのは、澄んだ音色を鳴らす鈴だった。

「これは？」

「マヨヒガの物って持って帰ったら幸せになるらしいから、とりあえず身につけられる物と思って」

「おお、ありがとう！　これがあつたら春まで無事に過ごせそうだな、うん」

その鈴はカバンに付けておいた。カバンを肩にかけるときにチリンと小さく音が鳴

る。こういう音があるだけでも色々と違ってくるものだろう。主に退屈度合いとかが。ありがたく頂戴しておくことにする。

「おーい、そろそろ仁日はできたかー？」

カバンを肩にかけた辺りで、ちょうど藍さんが部屋に俺を呼びに来た。藍さんの装備は、いつもの服に籐のかごだった。超家庭的だなオイ。

「準備万端ですよー」

「なら行こうか、人里まで」

マヨヒガから出て後ろを振り返ると、橙が此方へ向かつて手を振ってくれていた。ニコニコと笑顔で見送っている。やべえ、どこぞの九尾では無いが、鼻から愛が溢れ出そうだ。そして俺も良い笑顔で手を振り返す。傍から見ているとつても微笑ましい光景なのだろうが、横の人の黒いオーラのせいで台無しになっている。こういう時くらい自重してください。それと、橙はなぜ気づかないんだ。謎すぎる。

マヨヒガが見えなくなつてしばらく経ち、今は道中で藍さんと他愛もない会話や世間話なんかをしながら人里へと歩を進めている。橙の可愛さとか、橙の普段の生活ぶりとか、橙の可愛さとか、とにかく九割九分が橙の話題だったことは言わずともわかるだろう。

そして、人里まであと少しで着こうかというところで、唐突に話は変わった。

「ところで、君は幻想郷に何か危害を加える気はあるかな？」

「は？　危害……ですか？」

いきなりだな。

「そう。幻想郷にとっての危険分子であるかを聞いているんだ」

「そりやまた唐突な……というかそれ聞かれたところで言う人つていますかね？」

「フム、やる気がないならいいんだ。間違っても博麗大結界に手をだそうとか巫女に何かしようとか考えるんじゃないぞ」

ま、こちらとしては手を出したくもないし、出すことも出来ないのだからんぷりを通しておこうか。それに部外者がそんなこと知っているとなったら面倒なことになりそうだ。

「はあ……よく分かりませんが、とりあえず気をつけておきますね。……因みに、そういうことをしてしまつた場合はどうなりますかね？」

質問すると、藍さんは動きをピタリと止めた。若干後ろについてきていたので、俺も少し遅れて立ち止まる。

「知りたいか？ それはな……」

藍さんは何やら不敵な笑みを浮かべながら、ゆっくりと俺の眉間に指を突き立てた。つてか痛い。痛いですつて。爪が眉間に刺さつてますつて。

「こうなるんだ」

瞬間。俺の頭が弾けとんだ。

……いや、そうなったような気がした。幻覚と称するのも生温い程に鮮明な映像が、俺の脳に流れ込んできたのだ。洒落にならないリアルさに、思わず体をのけ反らせ、たじろいだ。この状況で腰を抜かして尻餅をつかなかつたのは僥倖だろう。体が頭に追いつかず、悲鳴すら出せない。

数分か、数十秒か、あるいは数秒か。どれ程の時間が経つたのかは分からないが、続いてきた沈黙を藍さんが破った。

「……………ククツ……………ハ、アツハツハツハハハハ!!」

腹を抱えて笑ってた。心底面白そうに。

……え、ここつて笑うところか？ と、先程の緊張感はどこへやら、キョトンとした顔で藍さんを見てみると、俺の視線に気づいたようで、息を整えながら言った。

「フウー、ああ、すまなかつたね。ちよつと君の顔が面白かつたんで、つい」

俺つて爆笑するほど可笑しな顔してたっけ？ ……いや、これはアレか、からかつているだけなのか。俺の顔が変とかそういうことじゃないだろうな。……そうだと思いたい。

「ええー……それつてひどくないですか？ 割と真剣にビビつたんですけど。しかし何故こんなことを？」

「橙がここ数日間私に構つてくれなかつたことに対しての腹いせだな」

聞きました？ 今キリツとして言ってるけど、コレ、八つ当たりなんだぜ？ というような何とも言えない微妙な雰囲気俺の顔から溢れ出ていたのか、藍さんは言った。

「という冗談はさておき」

あ、冗談だったんだ。

「今でこそ幻想郷自体に手を出す者はほほいないが、昔……ちようど幻想郷ができた辺りは、ちよつかいをかける程度の奴から、本気で幻想郷を奪おうとする奴まで、とにかくその手の問題が沢山あったんだ。だから、言い方は悪いが、こうして外来人には脅しをかけるようにしているのさ。まあ、悪気があつて幻想郷に来る奴は滅多にいなかったから、あまりやったことはないのだがね」

「脅しですか……確かにさつきみたいなの見せられたら死んでも戦いたくないって思いますよねえ、納得だ」

「しかし、今回は既に数日間は君のことを見てきたから、別にこんなことしなくても良かったんだ。最近この手の幻術は使っていないかったから、まだ上手く使えるかを確かめたかっただけなのだが……いやはや、まだまだ大丈夫そうだな」

「うん、完全にとぼちりですよね」

「まあ、そう怒らないでくれないか。ちよつとした出来心だったんだ」

出来心で自分が死ぬところを見せられるとか、たまつたもんじやない。頭吹っ飛んだぜ？ 何も言われずにこんなことになったら、そりや怒りもするだろう。でも生きてる
しいいか。

「では、しばしのお別れですね。永遠の別れにならなくて良かったですよ」

「本当に悪いと思ってるから機嫌を直して欲しいのだが……」

どうやら本当にすまなかつたと思つているようだ。証拠に、ピンと立っていた耳が、
こう、何というか、シユン、となつているのだ。尻尾も心なしか元気がなさそうだ。

これはこれでいいな。

「別に怒つてませんで。頭上げてくださいよ。それでは、今回は本当にありがとうござ

いました。また会いましょう」

「ああ、少し待ってくれ。行くのならばこれを持って行ってくれ。私特製の御札だ。そこらの小妖怪ぐらいだったら、持っているだけで寄ってこなくなるだろう」

そう言って手渡されたのは、歪な文字がびつしりと書かれた御札だった。正直、見た目だけだったら効果の程はまったくわからないが、今までの経験からなのか、妖力がこの中に凝縮されているのがわかるため、効果は期待できそうだ。ありがたく頂戴しておこう。

「あと、いつでもマヨヒガに来て貰って構わないからな。困ったことがあったら私たちに頼るといい。出来るだけサポートをしよう」

「おお……本当にありがとうございます。この御札は有効活用させてもらいますね。マヨヒガには行けるか分かりませんが、機会があれば」

「時間をとらせてしまったな。では、そろそろ」

「はい。また来春に会いましょう」

そう言うと、藍さんは消えた。いや、消えたのではなくて、超高速で走っているようだ。こういうところを見ると、純粹なスペックの違いが嫌でも思い知らされる。そしてスペックが違うことは、今まで俺に合わせていたということにもなる。

俺はそのことにありがたさを感じると共に、恐怖も感じた。幻想郷を敵に回すということは、藍さんのような幻想郷の有力者を敵に回すことと同義だ。藍さん一人でさえ歯が立たないのに、全員を敵に回すと、塵も残らないのは火を見るより明らかだろう。

俺はもう二度とBBAとか、幼女などの有力者をからかうような発言はしないでおう、と心の中で誓いながら、命蓮寺へと向かうことにした。

番外其ノ二

上を見上げれば、一日の始まりを告げる朝焼けが、私の心の中と反比例するかのよう
に綺麗に広がっている。

ここは地面から一町ほど上空。今は聖輦船に乗って飛行中である。非常に景色が良
く、ちよつとした観光には最適なのだろうが、生憎今回はそんなものに構っている暇は
ない。

現在、何をしているのかと言うと、上空から人を探しているのだ。しかし、かれこれ
三日か四日は経っていて、船に乗っている人は皆揃って顔に疲労を浮かべている。かく
いう私もその一人だ。

あ、船に乗ってない人も一人居た。いつから居たのかは知らないけど、確か……
ええつと……雲居……七輪？ だったっけ？ まあ、その命蓮寺の妖怪尼が、雲山つて

いう見越し入道連れて空を飛び続けていた。でも石に疲れたのか、命蓮寺に帰ってしまつたようだ。船に乗れば良かったのに。

そろそろ船に載せている食料も底をつきそうだ。これ以上の長期戦はもう限界だろう。大体、あいつが見つかからないのが悪いんだ。ナズーリンによれば、見つかつてるのか見つかつてないのか分かんない状態だし。よく分からないけど、その辺のことを説明するには少々時を遡らなければならない。

「もう少し船を北にずらしてくれるかな、船長」

「まっかせなさい！」

ムラサの言葉と共に船体が動き出したかと思えば、ピタリとその動きを止めた。いつも思うのだけれど、どうやってこんな微調整をしているのだろう。でも知ったところで出来るわけではないし、しようとも思わないけどね。

しっかし、

「反応を追ってきてここまで来たのはいいとして、着いてからずうっと動いてないんじゃない？」

船首にいるのはナズーリン。何とかって言う棒を持っているだけなんだけど、それで剣二の持ち物の反応を探しているらしい。

棒を持って棒立ち。うける。

「見つかるはずなんだけどね……聖、そっちはどう？」

「うーん、人っ子一人居ませんねえ……妖精なら見えますが」

船首の近くから身を乗り出して、下の方を見ているのが聖白蓮だ。こっちは魔法か何かで視力を強化して探している。森の上なのによく見えるらしい。

私でも見るのが厳しいというのに、平然とやってのける聖。憧れるなあ。

……？ 憧れるの前に、「そこにシビれる」って聞こえた気が……まあいいか。

そして私は索敵担当だ。妖力を薄く広くのばして、異質な力を感じるというだけの仕事なんだけど、成果は、

「妖怪一匹もないね。かなりの範囲探してるけど、うんともすんとも言わないよ」

そう、微かな妖力さえも感じられない。これは、はつきり言つて異常だ。人間が存在する限り、妖怪なんて何処にでもいるものだ。ましてや、この狭い幻想郷の中で人間以外の存在を見かけないなんてことはありえない。特別な場所なら話は別だけど、こんな小さな森の中でも一匹や二匹くらいは居るはずだ。

しかも、何故か少しだけ違和感を感じる。何か自分の感覚がおかしくなっているよう

な……。

「……少しやり方を変えてみようか。船長、船を完全に止められるかい？」

「それじゃあ、風の影響を受けないように帆を畳まないかね。誰か手伝って——」

ナズーリンは、少し考える素振りを見せた後、ムラサへと何かの指示を出した。すると、大きな帆が折り畳まれていく。それをしているのは、ムラサと……雲山？ 何でこんなところに？

まあいいけど、それによつて船が完全に止まった。先ほどのような揺れがまったくなく、まるで陸地を歩いているような感覚だ。

雲山たちが帆を畳むのに四苦八苦しているとき、ナズーリンは何やら地図を机の上に広げて準備していた。この地図は、この辺り一帯の上空から見た地図で、ナズーリンが一人で夜に作っていたものだ。そして、ぺんでゆらむ、とか言う振り子みたいなものを地図の上にぶら下げた。

「どう、何か分かった？ ナズー……」

「なっ!？」

私も驚いた。何故って、手を動かしていないのに振り子が揺れているからだ。縦から横に。横から斜めに、と不規則に揺れ動いている。それも結構大きくだ。

ただ、ナズーリンは私よりも大げさに驚いていた。何かあるのだろうか。

「えっと、これは……?」

「やられた。森の中に結界みたいなものが張られているようだ。違和感の原因はこれだったか……」

ナズーリンは心底悔しそうな顔で呟いた。

「じゃあ、見失ったの!？ あいつは無事なの!？」

「正確には見つかっているのだけど、反応している場所が分からない状態なんだ。移動

しているのかも、ある一点に留まっているのかも分からない」

「そ、それじゃあ見つかってないのと一緒じゃない！」

「結界さえ無くなればなんということはないけどね……強度を見たところ、かなり高位の妖怪か、妖獣によって張られたものだろう。なんとかするには少々厄介な相手だ。目標に結界から出てきてもらおうしか、見つける方法はない」

なんてことだ、そんなことではこの場所まで来た意味がまったくない。本当に面倒な場所に行ってくれたものだ。でも、反応がある、ということは……

「あいつは無事なんですよ？　ペンでゆらむってやつは反応してるんだし」

「いや、そうとも言えない。私が探せるのはあくまでも『物』だけなんだ。そして、探せるのが『物』だけということは、持ち主がどこにいるかは分からないということだ。最悪、探し物だけが残っているという可能性もある」

「無事かどうか分からないって……何か方法は!?」

「自分たちで行くにしても、迷ってしまうことには変わりなし、鼠を使つてのダウジングもあるにはあるが、生き物を探すのには向いてない。空まで結界の影響が届いてるから空でも感覚が狂わされることには変わりないだろう。……残念ながら、手詰まりのようだ」

「そんな……」

「ただ、この結界のせいで下級の妖怪はあまり近寄ってきていないらしい。妖怪は感知出来なかつたんだろう?」

「そりやまあそうだけど……」

「ならばまだ安全な確率が高い。上位の妖怪は、勝手に人間を襲うなんていう馬鹿な真似はしないだろうからね。聖も妖怪か人間か、何でもいいから見えるかい?」

船の縁にいた聖は、大きく体を乗り出して下の方を見つめながら言った。

「いや、依然として変わりませんねえ。妖怪も見えません」

「ほら、聖からも妖怪がないことを確認できた。それに、もうこの船に居るのは限界だ。食料も、もうほとんど無い。ここに留まって泥臭く探すよりかは、まず命蓮寺に帰って体勢と作戦を立て直すべきだと私は思うが、どうする？」

確かにナズーリンの言う事はもつともだ、だけど……。いや、まだここに残って探すことはただの私の我儘か。現に今は待つことだけで、何もすることが無いじゃないか。闇雲に探すだけでは見つかる道理はない。ここで無駄な時間を過ごすよりかは……

「……帰ろう。一度帰って、もう一度ここに来よう！」

「よし、話はまとまったね。それじゃあ船長、一旦命蓮寺に引き返してくれるかい？」

その問い掛けに、ムラサは少し困惑顔で答えた。

「いいの？ まだ見つかってないみたいだけど……」

「いいんだ。一回帰って作戦を練り直さなければいけないからね。それに……」

ナズーリンが何か言いかけたとき、グウ、とお腹の鳴る音が聞こえてきた。それも全員のお腹から。

「……皆、お腹空いてるだろう？」

その瞬間、皆がどつと笑い出した。さっきあんなに迷っていたのが嘘のようだ。

けれど、笑ってばかりじゃられない。早く準備してまたここに戻ってこなければ。

剣二はまだ大丈夫そうだけど、何が起こるか分からない。こうしている今でも妖怪に襲われているかも……。

いや、そんなことはない。私は私の全力を尽くすだけだ。それでダメだったら仕方ない。というよりも、こんなに頼もしい仲間たちがいるのだから、見つけられないはずはないんだ。

だから今は命蓮寺に戻る。戻って最高の状態で此処に来るんだ。そうすれば、次こそは見つけられる。絶対に。

私の決意と呼応するかのように、船は動き出した。この速度ならば直ぐに着くだろう。次の目的地は、とりあえず現時点では命蓮寺だ。

命蓮寺に戻ってからしばらく経って、私は驚くべき体験をすることになるのだけけれど、それはまだ先の話。

くおまけく

ここは白玉楼。私の仕える主人が住む、冥界の中心地。

今日も今日とて炊事、洗濯、お庭の整備などやることが目白押しである。幽々子様は、剣二さんが白玉楼を出て行ってから、非常に暇そうだ。たまには剣の稽古をしてほしいのだけれど……私が言ってもまったくの無駄であろうことは、既に自明の理だ。ハァー……。

剣術指南役としての立場が失われつつあろうとしていることは、とりあえず置いておき、今は何をしているのかというと、部屋の片付けをしている。の、だが。

「おかしいなー、この辺りに置いてあったはずの地図が無くなって……」

そう、地図が忽然と姿を消しているのだ。あれは藍様に渡そうと思つてとつておいたのだけどなあ。

と、頭を抱えているところに、いつもの着物を身に纏つた私の主人、幽々子様がかつた。

「どうかしたの？ 妖夢」

「いえ、この辺りにあつたはずの地図が無くなつていのですけれども……つて、また饅頭食べてるじゃないですか！ 今日の朝あれだけ食べておいて、まだ食べますか!?!……まあいいです、それより、地図のことについて何か知りませんか？」

「ああ、あれなら剣二に渡したわよ？」

「……え？」

何を言っているのだろうか。冗談は、その食欲だけにして欲しいのですけれども。

「だから、渡したの。あれってマヨヒガへの地図だったでしょ？」

「ちよつと待ってください、あの地図がほぼ地図としての役割を果たさないことを知っていますか!？」

「そつよつ？」

「また面倒なことを……。処理するのはすべて私だというのに、分かった上でやっているのだろうか。」

「ああ……。直ぐに剣二さんの所に行かないと……。きつと今頃迷っているはず」

「その必要は無いわ」

「はっ。」

「一瞬面食らってしまった。」

「マヨヒガっていうのはね、迷った人が辿り着く場所なの。そのまんまね。だから本当に正式な地図なんて存在しないし、あれぐらいの地図がちょうどいいのよ」

「では、蔵にあった地図は……」

「当然の如く正確なものではないわよね。逆にあの地図だったらあの子はたぶん字が読めないだろうし、結局どっちの地図を持って行っても同じだったはずよ」

幽々子様、そういうことが分かっているんだったら先に言ってください。

「……幽々様様がそう言うなら間違いは無いのでしようが……やはり心配なものは心配ですよね」

「大丈夫よ、あの子ならきつとマヨヒガまで辿り着くわ」

何が根拠でそういうことが言えるのだろうか。

「そうですかね？」

「じゃあ、剣術の修行は何のためにしていたの？ そのためじゃなかったの？」

「でも付け焼刃ですしねえ。正直言つて、後は劍二さんの吸収力に任せるしかなかったです」

それに、これといったことは教えていないし、稽古と言つてもただの模擬戦だったしねえ、たったこれだけの経験で今後が何とかなるとも思えない。

「うーん……まあ、何とかなるはずよ。後で藍にも伝えておくわ」

「あ、それなら安心ですね」

「幻想郷にとつて劍二が問題無いこともわかったし、後は藍がなんとかしてくれるでしょう……」

その時、幽々子様が何か呟いたような気がした。気のせいだろうか。

「何か言いました？」

「いいえ、何も言っていないわ。さあ、問題も解決したところで、今日のおやつを……」

うーん、何か聞こえた気がしたんだけど……って、それより!!

「ダメです。さつきも食べておいて言ってるんですか!」

本当に、この人の胃はどこか遠い場所にある謎の空間にでも繋がっているんじゃないかならうか。

「むうー、妖夢のケチー」

「ハア……」

また買い置きしているお菓子がいつの間にか無くなってそれで怖い。もう今度から買わないでおこうかなと思う今日この頃。

まだ少し剣二さんのことは気掛かりだったが、藍さんが居れば大丈夫だろう。

というか、今はそれよりも剣二さんが来たことで減った、危機的状况にある食費をなんとかしないと、と、今日の晩御飯の献立を真剣に考え始める妖夢なのであった。

第二十二話

やあどうも、夜鳥劍二だ。

長かったが、やっとここまで来たぜ……。そう、命蓮寺までな！

この重厚で雰囲気のある佇まい……。正に寺って感じだな。ただ、見たところは普通の寺なんだけど合ってるんだよね？ 藍さんに聞いてきたから間違いないと思うけども……。

門は既に開いているけど、これは入ってもいいのかな？

ま、俺には入る以外に選択肢は無いけどね！

「つー訳でおじやましませ」

『ごーんにーちわー!!』

「うおう!？」

いきなりビビッたー……鼓膜が破裂するかと思ったぜ……。右の方から拡声器使つてシャウトしたぐらいの爆音が聞こえてきたが、この大声の正体は大体予想つくな。

ズバリ、

「山彦か!!」

『山彦だ!!』

おおう、すぐくハッキリと返された。若干、というかほぼ声が被った。これも山彦ゆえだろうか？

しかし声でけえな。寺とかは俺の中では静かなイメージだったが、この大声で雰囲気ぶち壊しだな。それが悪いとは言わないが。

「まあそれはおいといて」

「私のアイデンティティーを華麗にスルー!」

すかさずツツコミ。キレがいい。だがここはあえてさらにスルーだ!

「君ってこの寺の修行僧だよな?」

「私の台詞までスルー……まあいいけどね……。あなたの言う通り、私はこの命蓮寺の修行僧だけど、何か用でも?」

ぬえの居場所が知りたいんだけど、と言おうと思ったが、初めて会った人間が仲間のことを知っているのもどうかと思ったので、名前は伏せることにした。

「や、ちよいとこの寺に住んでる、ある妖怪に用があつてね。所在を知りたいんだけど、ここの代表みたいな人は今いるかい?」

「さつき帰ってきたところだけど、君って人間だよ、なんでまた一人でこんなところまで？ もしかして、私達のことを退治しようなんて思っただけよ？」

「いや、そんなつもりは無いけど。一介の人間にそんな大それたことはできないよ」

「ならいいや、あそこから寺に入ればいいよ」

「……俺が言うのもなんだけど、ちよつと警備が雑過ぎやしないか？」

「いや、自分で何も言わなかったじゃない。まあ、騒動が起これたら他の妖怪が止めてくれるだろうし、ぶっちゃけあんまり心配しないでいいんだよ」

へえ、この寺の中では常に誰かが目を光らせてるってことか。事を起こしたら、雲山みたいな奴が駆けつけてくる……なるほど、それは確かに怖いわ。そんなことは無いとは思いますが、一応寺の中で荒事が起こらないように気を付けとくか。

「それじゃ、寺に入らせてもらおうわ。道案内ありがとさん、掃除頑張つてね」

「くれぐれも気をつけてー」

寺の中を一頻り歩くと、本堂に着いた。他の部屋からはまったく気配も話し声もしなかつたから、ここに誰かがいることはほぼ確定だろう。しかし移動中に誰にも会わなかつたのには疑問が残るが……逆に怪しまれなかつたとポジティブに考えとくか。

さて、ここまで来るのに何週間か過ぎた。割と短い期間だったが、その密度はかつて山の中で遭難してサバイバルをした時と勝るとも劣らない。そんな日々を過ごしてやっとぬえに会えるのかと思うと……つとと、まだここにいるかどうかは分からない

だっけか。

ふすまの前で深呼吸して……行くか、と決心した俺が、本堂のふすまを開けて見たものは……

「帰ってきたのはいいけどさー、結局みんなはどうするつもりなのよ？」

不機嫌そうにそう言ったのはムラサダ。しかしその気持ちは分からないでもない。何もできないまま寺に戻ってきて、何もせずにもこのままダラダラしているのは非常に居心地が悪い。

私としても早くこの状況から抜け出したいので、必死に打開策を考えているのだが……どうにもこうにも方法が思いつかないので仕方がない。

「今また同じ場所に戻ったところで前と同じ結果になるのは目に見えてるからね……それに、ご主人にばかり業務をまかせておくのは気が引けるし、目標があそこから出てくるまでは打つ手なしだね」

「わ、私は一人でも大丈夫ですよ！」

そう言った寅丸に対して、ナズーリンが呆れた感じで溜息をついた。

「ハア……帰ってきてからご主人が踏んでしまったドジの後処理するのに何時間かかったと思ってるんですか？ 次にここを離れた時にはもつとひどい有様になっていることが容易に想像できるね」

「うう……」

でも、確かにこれは仕方ないよね。もう大惨事だったもん。主に台所と作業部屋がここに集まっている者総出で後片付けをやらなきや追いつかなかったからね。

「まあまあ、その話はそのくらいにしてご飯にしましょう。皆帰ってきてから後片付けに追われて何も口にしていないでしょう？ お腹が減っているはずよ？」

聖がそう言った瞬間、全員からお腹の音が鳴った。勿論、聖も含めて。皆、聖が言うまでお腹が減っていることを忘れていたらしい。そして、その瞬間、笑い声が部屋中に木霊した。

「皆忘れてたの？ アツハハハ！ おつかしー！」

「こども綺麗にタイミングが合わさるとはね……」

「と、とにかく何か作りましょうか。何人が来てくれますか？」

その声に真つ先に反応したのは一輪と雲山だった。

「私が行きましょう」「……」

その二人について、ナズーリンも立ち上がる。

「なら私も行こうか」

「わ、私も……」

「あ、人手は足りているのでもう結構です」

「やんわりと断られた!？」

ということで、この部屋に残ったのは私、ムラサ、星の三人だ。私は普通に料理が出

来ず、星はドジを踏んでしまい、ムラサは何故か水難事故を起こしてしまうので、このメンバーだ。

しかし、私はそんなことよりも雲山が料理班に入っているということに違和感を感じる。どうやってあの手で料理をするのだろうか。謎だ。

と、その時、足音が外から聞こえてきた。この時間帯はほとんど人はいないから、かなり珍しいことだ。

「ん、誰か来たみたいだね。新しい入門者かな？」

「まっさかー、こんなお寺に頻繁に人が来るわけが……」

そして、ふすまの方に目をやった。すると、

「ちわーつす。聖さんいますかー？」

それはあまりにも唐突だった。

光さえも飲み込んでしまいそうな闇のように真っ黒で、クセのある髪。見た目は細

く、周りの人と比べると少し高めの背丈。糸のように細い目。手に下げた鞆には、私の羽と同じ色の青と赤の線がそれぞれ入っていて、黒い本体のアクセントになっている。

間違いない。今着ている服こそ前に見た時とは違うものの、それ以外はまったく同じだ。私の中の記憶にある人と寸分違わない。

しかし、いきなり過ぎて思考が追いつかない。何分経ったかよく分からないが、呆然としていた頭がハッキリするまでにとっても時間がかかったように感じた。

私は、今までであったことを思い出しながら、その場から立ち上がってその人の元へと駆けていった。

「ちわーっす。聖さんいますかー？」

つと、聞くまでもなかつたようだ。どうやら一番目の部屋でビンゴだったらしい。

それにしても、無事にこの世界に帰れていたようでよかつた。本当によかつた。元氣そうだなによりだぜ。当の本人は、開いた口が塞がらないといった様子でこちらを見上げている。まあ、こんだけ長い間姿を見せなかつたら当然の反応か。

……ここは俺の方から声かけた方がいいのか？　と思つてみると、ぬえが俯いてしまった。よく見れば肩も震わせているみたいだ。

はっはーん、さては会えたことが嬉しくて泣きそうになつているな？　ぬえはああ見えて照れ屋だからなあ。元の世界でもまさにツンデレつて感じだったし、今回は我慢できないんだな？　そうなんだろう？

そうなると、紳士な俺はぬえを抱きしめるといふ選択肢しか選べないつて訳だ。ハハ、すまないな君たち、私は先に女の子を抱きしめるといふステップを登つてくるよ。

え？　逆になんてお前は女の子を抱きしめたことが無いんだ、つて？　うん、そう

思った奴はとりあえず飯食って寝ればいいと思うよ。

てなことを頭の中で考えていると、ぬえが立ち上がった。と、同時にこちらに向かつて駆け出してきた。よし、もうこれは完璧に俺の推論通りだ。

腕を大きく広げて、「俺の胸に飛び込んでこい!!」と言わんばかりの格好でぬえが来るのを待つ。といってもそれは一瞬のことだ。眼前に迫って、ぬえを抱きしめようとしたところで、

「こんつ……の馬鹿剣ニイツツ!!!」

罵声と共に岩をも貫きそうな程、固く握り締めた拳が顔面に飛んできました。

あるえー？ おかしいな……俺の予想ではこの後に胸に抱きついて泣かれるぬええ俺が慰めるという画が出来上がるはずだったんだが……。

そんな妄想も虚しく、拳が顔面にクリティカルヒットした俺は、ふすまを貫きながら綺麗な放物線を描いて外へとブっ飛んでいった。そして、地面と背中が接触し、肺から空気が吐き出されると同時に、ここに来てから何度目かも分からないブラックアウトを

しなかった。というか、できなかった。

何故なら、ダメ押しとばかりにさらにさらにぬええが俺の上から飛びかかってきて、馬乗りをしたからだ。

「グツフウ！　ちよ、ぬえさん、それは流石にモラル的な意味でどうかとおも……ブツ」

盛大に鼻血を吹き出しました。殴られて鼻血出すのつてかなり久し振りな気がする。そうあれは中……イタイイタイイタイ。ちよつとマジで遠慮ぐらいはしてくれ……ま
せんよね。

「うるさい！　こんだけ心配かけて何処ほつき歩いてたのよ！」

馬乗りしてきてさらに顔面パンチで。ひどいと言うよりも先にええ……つて感じがするな。今も殴られ続けているけど、そこは描写すると色々不味いかと思わるので、割
愛します。

結局、呆然としていた星さんと村紗さんが目の前の惨状に気がついて、ぬえを止める
まで殴られ続けることとなった。解せぬ。

「それは災難だったわねえ。まあとにかく皆お腹空いてるでしょうし、ご飯を食べましょう」

聖さんが言ったときには、全員が食卓についていた。というか聖さん、俺の話はスルーですか、そうですか。

机の上にはホカホカのおにぎりがたくさん並べられた皿と、漬物が置かれている。品数は少ないが、まだ湯気がたつほどの出来立て感満載のおにぎりがたくさんあるだけでも最高の昼食になるだろう。

「それでは……」

「「「「いただきます」」」」」

すかさず手を伸ばし、おにぎりを一つ取ってほおぼる。うーん、この温かさと絶妙な塩加減がたまらん。握り方もふつくらとしていて非常にいい。やつぱおにぎりは出来立てだよ。ムツ、あえて具なしの塩おにぎりか。だからこそその漬物か。味に飽きてきた時に食べるためだな。よく考えられている……。

おにぎりをしつかり咀嚼し、飲み込む。そして、口を開いた。

「ぬえよう。さつきも言ったと思うけど、ここでの勝手が分からないのにすぐにここには来れないよね……?」

「……」

「怒らないで!! 俺だってそれなりに頑張ってここまで来たんだぜ!!」

「……じゃあ、今まであつたことを全部話してよ」

ムム、どうしようか。割とのんびりしたり、寄り道したりしたこともあつたからな、ここは一つ話を盛って……

「本当のことを話してよ？」

「……どうやら俺に逃げ道は無いようだ。」

「ハア!?　なんでそんなところに行ったりしてんのよ!　あんた馬鹿なの?　死ぬの!?!」

「だからそれは成り行き上からして仕方なかったんだって!」

「成り行き上ってアンタねえ、直ぐにでもここに来れたでしょうが!」

「道分かんねえのにどうやってここまで来いと!?!」

嘘はついてないぜ。嘘はな。

「誰かに道聞けば良かったじゃない、それで直ぐにここまで来れば良かったのよ!」

「聞いてここまで来たのにこの時間だけ!?　お前は俺に瞬間移動でも使えってか?」

繰り返し言うが、嘘は (ry

「ぐっ……とにかく、あんたが全部悪いのよ！」

「ついに明確な理由も無くなりましたか！でも俺は寛大だから、今からでも謝るってんなら許してあげないこともないんだけど？」

「誰があんたなんか謝るかあ!!」

そんな感じでワーワーギャーギャーと言い争いを続けていると、聞き捨てならない言葉が何処からか聞こえてきた。

「なんだ、結局二人とも仲良いじゃありませんか」

「誰がこいつなんかと!!」

奇しくも言ったことが被ってしまった。俺はそこまで終わったが、ぬえは例の台詞を言った当人に向かって妖力弾を放ち、当たって吹っ飛んでいったのをナズーリンが見

て「ご主人ー!!」とか叫んでいたような気がするが、俺は何も見えていない。

「どうせあんたにことだから、『嘘自体はついてない』とでも言い張るつもりなんでしょう? 私には全部お見通しよ!」

チツ、いつものことながら、勘がいいな。

「な、何を言ってるんだ? 俺にはちよつと意味がワカラナイナ」

「ほら最後の方だけ棒読みになった! さあ、洗いざらい吐いてもらおうよ!」

「俺にだって黙秘権はあるぞ! どうしてもっていうなら弾幕ごっこで勝ってからだ!」

「私に勝てると思ってるの?」

「じゃあ確かめてみるか? んん?」

「のぞむところよー」

と、会話を終えたところで、二人共が立ち上がった。俺がぬえを見下ろして、ぬえがこちらを見上げる体勢で睨み合う。

……正直、啖呵切ったのはいいけど、E xポス相手に勝てる気がしないんだよなー。一応、新しいスペカも考案してあるし、使おうと思えば使えるんだけど、それでもやはり心も無い。できるなら万全の状態で挑みたかったが、仕方ないか。

よし、覚悟決めてくぞ……ッ!?

分かる。分かってしまう。後ろから恐ろしいほどの量の殺気、いや、少し違うか。とにかく、怒気のようなものが吹き荒れているのを全身で感じる。

全身から冷や汗が吹き出すのを感じながら、横目でぬえをチラリと見やると、不味いことをした、というような顔で硬直していた。

あー、ダメだ。俺もこの怒気の正体分かってしまった。どうしよう……俺、あの人が怒るところってあんまり想像できないんだけども。

いつまでもここでジツとしているわけにはいかないの、錆び付いたブリキ人形の首のようにギギギと首を回して見てみると、そこにはものつそいダークな笑顔を浮かべて、こめかみに青筋がビキビキと浮き出ている聖さんが、ぬえと俺に挟まれるように間にいた。

「ど、どうも……」と、俺。

「ど、どうしたの、聖……？」

そのぬえの一言で、聖さんの頭からプツツつという音が聞こえた気がした。

「お二人共、お食事中はお静かに♡」

その言葉と共に、鋼みたいに固く握り締められた拳が二つの脳天に直撃して、鈍い音が頭二つ分鳴った。

「—————ツツツ!!!」

声にならない悲鳴をあげてその場に蹲る二人は、その後しばらく悶絶して動くことが出来ませんでしたとき。

「「「「「ちそうさまでした」「「「「「

「さあ、片付けをしましょうか。いつもと同じようにお願いしますね。あと、剣二さんはそこに座っていてください。お茶を淹れてきます」

「はあ、どうも」

聖さんの一言で、その場にいた俺以外の全員がしやべりながら動き出した。和気合い

合いとしていて、非常に結構なのだが、一人だけ取り残された俺にとっては居心地が悪くて仕方がない。結局、食事を作ったメンバーが片付けをして、その他は何処かへ行つてしまった。散歩にでも行つたのだろうか。

畳に仰向けに寝転がって、イグサの匂いを嗅ぎながら静かに待つことおよそ五分。湯気の立ち上る湯呑を二つ、小さな盆にのせて聖さんがやってきた。

「ふふふ、お疲れですか？」

「はは……お恥ずかしながら、体力が無いもので。少し距離を歩いてきただけでこのザマですよ」

まあ、それだけじゃあ無いけどね。ここに来る前にマヨヒガでスペルカード作ったつてのもあるし、一番の理由はあなたに殴られたことですかね、聖さん。綺麗に山形のたんこぶができちまりましたよ。

しかし、喧嘩してたから悪いのは俺の方なんだろうけど、なんか釈然としない。

「そうですか。それはいけませんねえ。なんなら私が指導しましょうか？ 体力には少

しばかり自信がありますから」

ゴクリ、と唾を飲み込み、しばかり間をおいてから答えた。

「い、いやあ、遠慮しておきますよ。自分でやりますんで」

聖さんの特訓とか何やらされるか分かったもんじやないから、こういうのはスルーに限る。もしかしたら一日に感謝の正拳突き一万回とかやらされるんじゃないだろうか。

「それは感心です。さて、本題に入りましょうか。あなた……剣二さんは今後どうする予定なのですか？」

「そうですねー、とりあえず、元の世界に戻る方法は見つかったので、春くらいまでは幻想郷をブラブラと巡っていききたいと思ってます」

「そこで、です。何をするにしても準備は必要でしょう？　ここでそういったことをしていきませんか？」

「え、そりやまあできた方が嬉しいですけども……迷惑かけちゃいますし」

「いいんですよ、こちらにもぬえが大層お世話になったようですから。」

「でも、ほんの数日間でしたから。その程度でお世話になるわけにはいきませんよ」

「それならば、ぬえがそちらにいた日にちの分だけこちらにいらるといのはどうでしょうか。これで同じ条件ですが」

「うーん……しかしですね……」

「貴方が嫌というのであれば別に里に行ってくださいっても構わないのですが……こちらとしては、お礼が出来ないというのは心苦しいのです。どうか一日だけでも居ることは出来ませんか？」

いや、こちらとしても悪くはない、っていうか破格どころじゃない条件なんだけど

……。ホラ、如何せんここって妖怪寺な訳じゃないですか。その辺りがどうも嫌な予感
しかしないというか……。

事実、人間目的で入りたがってた妖怪もいた訳だし、さつき食卓に集まったとき
みに襲われなくても限らないしね。

ああ、そんな顔で見ないでくださいよ。そんなの引き受けるしか無くなるじゃないで
すかー！

……。でも、人里行ったとしても住むアテが無いのも事実なんだよね。結局、ここで泊
まるしかないのか。

「分かりました。ここですばらく休ませてもらうことにします。私がここを発つ日まで
よろしくお願いします」

俺が承諾した途端に眉が上がって明るい表情になる聖さん。マジ聖母だと思う。

「そうですか！ 是非ゆっくりして行ってくださいね」

「お気遣いなくー」

ま、これではしばらくは衣食住困ることなく過ごせるだろう。安全は完全に保証された訳ではないけど、藍さん特製の御札を持っているから、この寺の妖怪が強くない限りは多分大丈夫だと思うんだけど……。

心配しても仕方ないものは仕方ないし、常にほんの少しだけ気を張っておくしかないか。

それで、これからどうしようかなー。まだ何も考えてないし、そろそろ計画を練らなきゃいけないよね。でないと幻想郷を旅行するなんて到底無理だ。

頭の中で計画を立て始めたとき、聖さんが立ち上がった。

「それでは、私は人里の方に用がありますので、半刻ほど失礼させていただきます。用があれば先程集まっていた者達の誰かに言ってくだされば問題無いと思います」

「これはご丁寧にも。私は大丈夫ですから遠慮なく行ってきてください」

いつてきます、と聖さんは廊下の方に消えていった。再び部屋の中を静寂が包む。といても少しは片付けをしている人達の笑い声なんかが聞こえてくるんだけど。

すっかり冷えてしまった茶をすすりながら、さつき中断してしまった、計画を立てることを再開する。

考え始めると、やっぱりどこへ行こうか夢が広がる。守矢神社でもよし、永遠亭でもよし、太陽の畑……はとりあえず保留で、魔法の森は瘴気を防ぐ手段が見つかれば行ってみたいね。

他にも色々……と考えてたところで、星さんらしき人の悲鳴と、食器が割れる音が盛大に聞こえてきた。何故アンタがそこにいるんだ、とか、何故手伝おうとした、とかツツコミどころがありすぎるんだけど。

考えるのもいいけどまずは食器の片付けからか、と独りごち、その場からよいしょと立ち上がって割れた皿の掃除に向かう俺なのであった。

第二十三話

命蓮寺の朝は早い。

寺の一日は座禅から始まる。

四時に起床、三十分で朝の準備を済ませて本堂にて座禅を組むのだが……。

(なんで俺と他三人しかいねえんだよ！)

いや、俺も最初から真面目にする妖怪とかほぼいないだろうな、とか思ってたよ？
でもさ、こんな少ないとか普通思わないでしょ？

それで、初心者の俺が、熟練者であろう寅丸さんと雲居さんの二人に挟まれて座禅組んでるのも何かおかしと思う。

結跏趺坐とか初めてやったわ！　つうかそんな名前あるとか知らなかったわ！　二十分くらいやり続けているから痛いし、そろそろ限界ですしおすし！

あ、やべ、また眠くなつて……。フラフラと揺れ始めた俺の体の後ろに誰かが立ったのが分かったが、姿勢を直そうとしたときにはもう遅かった。

「どうしました？　集中力が足りませんよ？」

バシイッ！　とむしろ清々しいほどに気持ちのいい音が本堂に鳴り響く。思わず、ぐう、と小さなうめき声が漏れてしまった。

(いでえ……くそ、今日だけで何回目だ？　警策入ったの……)

警策、とは長い木の板で「喝！」とか言われながら、肩を叩かれるイメージがあるであらうアレのことだ。本当は軽く肩を叩いて姿勢が崩れたりするのを気がつかせるくらいのもんだって聞いてたんだけど、聖さんの頭の中からは、俺が初心者だという事実が欠落しているようだ。誰かなんとかしてくれ。

というか、寅丸さん。あなた祀られる側なのに修行し続けるってどうなの？ いや、熱心なのはいいことだけどさ、普通そういう立場じゃないんじゃないんじゃね？ うーん、初心忘るべからずってところか。

まあいいや、それから雲居さん……は元々修行僧だしいいか。

それより、さつきも思ってたんだけど、人数が少なすぎだと思う。その辺りに誰も突っ込まないってのもおかしいと思うんだ。形だけでも整えようぜ。さもないと寺でさえ無くなってしまうんじゃないか？ 酒好きで修行もしないってあんた、それ唯の妖怪じゃねーか！ って、全員妖怪だったか。これは失礼。

とにかく、もつと強制するべきでしょ、などと命蓮寺の在り方についてぐぬぬと考え「剣二さん？」……何か幻聴g「肩の力が入り過ぎです。今一度雑念を振り払ってください」いやちよつと待って連発はさすがに不味いですツツツツ!!

その時、言葉に表せないような叫び声が寺の中に木霊した……：……ような気がしたけど、早朝だったので気を遣って息が漏れる程度に収めた俺であった。

「あー、いでえ……これ絶対青アザできただろ……」

こんなことを呟きながらも、まだほとんど人が見えない部屋に、既に用意されていた席へと腰を降ろした。

さて、朝の修行が終わってから数時間が経ち、今現在時刻は朝少し遅めの午前8時。これから何があるかは想像に難くないだろう。

そう、皆さん待望の朝飯である。

それに伴い、のそのそと起きてくる妖怪達。凄く眠たそうだ。一体昨日何やってたんだ……？ 因みに俺は色々あつて疲れたので、昨日は直ぐに寝た。だから寺の人達が何をやってたのか知る由もない。

しばらく待つっていると全員揃ったようで、いただきます、という声とともに、全員が朝飯をもそもそと食べ始めた。

周りにいる人たちは、ボソボソと何か喋りながら食べてるように見えるが、自分の周りには知っている奴が一人もいないので、何か俺だけものすごくアウエーだ。すごく気まずいんだけど。どうする？ どうすんのよ!?! 俺!!

結局、一言も喋ることなく朝飯は綺麗にいただきました。ゴチになります。

時刻は午前九時半。食事の後片付けが終わり寺の中の掃除が始まった。

何処その寺でみたような服を着ながら廊下を雑巾掛けする者たちや、境内を竹箒で掃き掃除する者たち、水場の掃除をする者たちなど、その役割は千差万別だ。皆かなり真面目にやっているようで、結構驚いた。その他、落ち葉を掃いて掃除してから、その落ち葉を燃やしてその中に芋を……って、ちよつと待てーいい!!

「おーい! そこ、何やってんだー! 俺も混ぜろー!!」

「うわあ!! ……つてなんだ剣二か、驚いて損したよ」

焚き火と焼き芋、という現代ではそうそう御目にかかれない行為をしていた人物は、皆さんのお察し通り、ぬえであつた。

「割とひどいなその言い草。つーかお前は掃除しなくていいのかわ？」

こんがりとした焼きあがつた芋を木の枝で作った串から外し、慣れた手つきで皮を取りながらその黄金色の身を頬張った。とつても熱そうに。すつげえ美味そうだ。

「ハッフハッフ……ふー、いや、いつものことだし問題無い問題無い。あんたも食べる？
もう一個あるけど」

「おお、じゃ遠慮なくいただく……つと思つたけどやっぱやめとくわ。じゃ、俺はもう行くから。悪いことは言わん、とりあえず掃除しとけてっていう忠告を試してみよう」

その言葉と同時に俺はぬえに背を向け全力疾走した。ぬえよ、達者でな。

「だから大丈夫だって……？」

不思議そうな顔をするぬえが後ろを振り向いてから、その顔色が変わるまでにさほど時間はかからなかったようだ。

それに対して、全力疾走中に一言。

「俺の予報によると雷に注意だ。拳骨も降ってくるかもね」

ま、自業自得だな。こっつり絞られてこいよ。

「ぬえ？ あなたここで何やっているのですか？」

全力疾走からジョギング程度の走りに移行したところで、遥か後方から悲鳴が聞こえてきた。南無。

十時半頃になった辺りで、皆は掃除から農業へと仕事を変えた。

成程、流石にお布施だけじゃ生活なんてしていけないから、買う物以外はこうやって自給自足で補ってるのか。納得だ。

とはいったものの、時期が時期だからほとんど育てていたものは収穫を終えてしまつたらしい。その代わりに冬野菜が植えられているから、今日やることはその世話ぐらいだろう。

遠くから畑を傍観していると、見知らぬ妖怪一人に声をかけられた。

「よお兄ちゃん、あんた何やってるんだい？　傍目からにやあ何かやりたくてウズウズしてるようにしか見えないが、どうだ？」

声がかかってきた方向にある顔を見てみると、一つ目で、しかもやたら強面な妖怪がいた。なのに、喋り方が見た目によらず気さくだったもんだから、少々面食らつてしまった。

「あ、ああ、どうしようもなく暇だったもので、ちよつとポーつとしてただけです」

別にやることも無かったので本当に農作業を見ていただけである。何も意味なんて無い。

すると、俺に質問をしてきた妖怪は、今の俺にとっての致命的な部分を抉る爆弾発言をした。

「あー、外の世界ではそういうの何ていうんだっけか？ 確かにーと、とか……」

NEET (ニート: not in education employment
t or training)

ニート、とは教育、労働、職業訓練のいずれにも参加していない状態を指した造語である。

く Wikipedia より引用く

「はうう!! やつべえ、こうしちやいらねえぞ！ 何かやることを見つけないと！」

このままではいたたまれない気持ちになりそうなので、何か自分にもできることをを

見つけにいくことにした。まずは調理場からだな！ うおおおお！！

「……行っちゃった。いきなり叫んで走っていったが、一体何だったんだ？ 変な奴もいたもんだな。フウー、さあて、一休みしたところで仕事の続きでもやるとすつかない」

「という訳なので、俺にも仕事をください！ ニートは嫌なのでござる！ 働きたいでござるー！」

と、聖さんに物凄い剣幕でまくし立てた。

見て分かるとは思いますが、只今聖さんに仕事を得るための交渉中である。というのも、行く先々で俺からの申し出がことごとく断られてしまったからだ。

ちよつと皆、俺に対して遠慮し過ぎだと思う。でも、俺って一応客人扱いだから、向こうの立場になって考えてみると仕事をさせたくないっていう気持ちも分からなくは無いんだけどね……。

少々強く言い過ぎたのか、聖さんは困ったような顔をしながらも俺の質問にはしっかりと答えてくれた。

「は、はあ……仕事ですか。無いことも無いですが……あれは出来ますか？」

聖さんが手のひらを向けた先に見えたのは、十数本の木材を一気に運んでいく雲山の姿だった。何に使うのかは知らないが、並大抵の重さではなさそうなことは確かだった。

だから、

「無理です」

即答した。

ただでさえ非力な俺にあんなのできるわけ無いだろ！ 自分で言っていて悲しくなってきたが、事実なのだからどうしようもない。でなければ白玉楼で貰った武器はもつと普通の刀になっていただろう。今の刀も便利だから、それはそれでいいのだが。

「そうですか……ではもう仕事はありませんねえ。では、瞑想なんてどうですか？ やるのであれば御一緒に構いませんが」

「もう座禅は勘弁してください……あの後しばらく足が動かなかったんですよ」

「別に半跏趺坐でも構いませんよ？ 初心者ならそうであると言ってくださいれば良かったのに」

「いやどうみても初心者でしょ！ そこは察してくださいよ！ というか何で仕事はしなくていいのに座禅は組まなきゃいけないんですか!？」

しかし聖さんは俺の声が聞こえていないのか、しゃべり続けた。あれだな、自分に都合のいい話以外は耳に入ってこないんだな。うん。

「騙されたと思つてやり続けてくださいね、きつとあなたの役に立つはずですから。それに、どうせ今から自由時間に入るので仕事はもうありませんよ？ それでも、どうしてもやりたいのであれば、明日から掃除に混じるぐらいであれば好きなようにしていた

だいて構いませんが、他の妖怪の邪魔はしないであげてくださいね？」

おお、やつと俺の仕事ライフに光が！

「合点承知！ 明日から本気出します！」

あれ、自分で言ってるんだけど、これダメなやつじゃね？

正午。今から待望の自由時間である。

とはいっても、妖怪達は何故か元気がないようで、毛布に包まって眠る姿が多々見られている。俺もやることないし、俺も昼寝してしまおうかな。ちようどお日様もいい感じに照ってきたことだし……。

と一人で考えていると、一陣の風がヒユウと吹き抜けた。

「さつふう!! ……うう、流石に十一月に外で昼寝は馬鹿だったか。というかそもそもこの着物が薄すぎるんだよな。貫い物だから贅沢言えないけど、下に着るものぐらいい欲しいよねえ……」

冬の寒さには慣れちやいるけど、この薄着じや体が冷えて堪らん。着替えが二着しかないから早急に行かねば、と密かに人里に行く予定をたてていると、この寒さにも関わらず寝落ちをしてしまう俺なのであった。

「ぶへえつくしよいい!! ズズ……ああ、こりや風邪ひいちゃったかもしんねえな……」

起きた時間は午後三時。驚くべきことに十二時半ぐらいから今の今までずっと寝ていたのである。

しかもこのクソ寒い外で、である。自分でも驚いたわ。

体も芯から冷え切って、ものすごい鳥肌も立っているの、とりあえず中に入ってあったまろうと思う。どっかに火鉢とかないかな、と暖房器具を捜索することにした。

結論を言おう。灰一つ見つからなかった。

どこの部屋を探しても妖怪が寝ているという何の面白みもない光景が広がっているだけだったのだ。皆寒くないのだろうか。うっすい毛布一枚で寝てたし。暖房くらいあってもいいと思うんだけどな。

さて、これはいよいよ不味くなってきたぞ……。体を温める手段がないと、マジで凍死しそうなくらい寒くなってるんだけど。

仕方ない、少々古典的だが走るしかないか。ウォーミングアップと言わずに本格的に走れば少しは体も温まるだろう。まずは寺の周りを十周ぐらいから始めるか。おっしや、締まってこうぜ！ ッフウー!!

うん、走ろうと思った俺が馬鹿だった。素直にちよつとした体操程度にとどめとけばよかった。何が悲しくて一時間もぶつ通しで息が切れるまで走らなきゃならんのだ。

しかも、走った後に焚き火にでもあたろうかなと考えてたのに、終わってから火種がないことに気がついた。ぬえが普通に火を焚いていたのですっかり失念していたが、今の自分はライターすら持つていない。この寒さで頭もおかしくなってしまうか。ハア……。

まあ、過ぎたことをグググ言つても仕方が無い。もう寺の中でおとなしくしておこうと、ゼエゼエ息を切らしながら、全力で走ったからなのかズキズキと痛む頭と筋肉痛寸前の足で、俺はゆっくりと歩き出したのだった。

一時間と少し、俺に割り当ててもらった部屋の中で一人寂しく詰将棋なんかをして時間を潰していると、部屋の外からドタドタと大勢の足音が耳に入ってきた。

なんだなんだとふすまを開けて見てみると、本堂へと足を進める妖怪達の姿を見たので不思議に思い、最後の一人の後をつけてみると、聖さんと一緒に座禅を組んでいる妖怪達が所狭し……って程ではないけど、かなりの人数並んでいた。

成る程、朝に俺と三人以外に妖怪の姿を見かけなかったのは、なんのことはない、活動的な時間帯が夜だったからなのか。そう言われれば今まで疑問だったところにも合

点がいく。昼から眠り始めたこと、朝の座禅にほとんどの妖怪が参加してなかったこと、エトセトラエトセトラ。

覗き見を続けていると、皆真剣にやっていることが伺える。こりや朝は悪いこと言っちゃまったなあ。前言撤回しとくよ。済まなかった。……うん、ぬえがこの場にいないことには目をつむっておこう。本当に何処に身を潜ませてるんだ？

ずつとここにいるのもアレだったので、もうしばらく座禅の風景を見てから、俺は自室に戻ることにした。

その後、座禅が終わってから唐突に姿を現したぬえが夕飯ができたと告げに来たので、そのあとに行つて、メンバーが集まり次第、全員で飯をペロリと平らげた。ちなみに、今回も精進料理でありました。精進料理も別に悪くはない、というかむしろかなり美味い方なんだけど、如何せん量が少ないので育ち盛りの俺としては少し物足りないというのが、命蓮寺の飯に対しての感想だ。でも戒律とかもあるだろうし、そこは割り切つてるからいいけどね。

夕飯を食べ終わって、洗い物をしようとして誰かに止められるという、もはや恒例となつてしまった行事を済ませ、もうやることも無くなつたから歯磨きして寝るかなーとか考えていると、キャプテンに声をかけられた。

「そういえば、お風呂あるけど貴方は入るの？」

「え？ お風呂あんの？」

俺としては当然の疑問である。てつきり水でも浴びてるのかと。キヤプテンは俺の考えを察したのか、大きな声で答えてくれた。

「あるに決まってるでしょ！ 水は無駄遣いできないけどね」

寺に風呂が装備されてるとか初耳なんだが。もう住居みたいになつてるじゃねえか。料理できるし布団あるし、畑あるし。

「もし入れるのであればただこうかな。最近バタバタしてて入れないときもあつたし」

とはいっても昨日は入ったんだけどね。確か、一昨日は橙が酔い潰れるまで眠れな

かったし、その前は忙しくて入れなかった覚えがある。

ま、最近はその程度の頻度でしか入れていないということだ。冬場だからまだいいが、夏だったらやばかったかもしれないな。

「じゃあ沸かしとくから、呼びにくるまで待つてー。すぐできると思うから」

「ああ、ありがとう、よろしく頼むよ」

水場担当がムラサなことに若干の不安を覚えなくてもないが、冷えた体を温めるにはうってつけなので、素直に向こうの好意に甘えることにした。

支度が終わった、とムラサが言ったので、早速風呂場に行ってみたのだが……。

「さ、五右衛門風呂とか初めて見たぜ……」

モノホンの五右衛門風呂だった。水は無駄遣いできないと言っていたせいか、確かに水の量は少ない。座ってへそが隠れる程度の深さだ。

いやー、なんというか、某映画のとなりのなんとかで出てくる感じの風呂を想定していただだけに、鉄の鍋みたいな感じのそれには、一瞬来た時代を間違ったかと思つてしまった。

鉄製の風呂からは濛々と湯気がでていて、温度は申し分なさそうなので、とりあえず入つてみる。

「ちよつ、あつづ……ふはぁー、これはいい気持ちだわー」

入るときに風呂の淵をがっちり掴んでしまった時はかなり熱かったものの、入つてしまえばどうということとはなかった。もたれられないけど。

体の芯から温まってくのが分かる。今日ずっと体が冷え切っていた俺にとつてはかなり嬉しい。この後湯冷めしないか心配なのを除けば、正に極楽だ。たまにはこういう風呂もいいものだね。

……しかし、女性陣はどこで風呂に入っているんだ？ まさかこの五右衛門風呂に全員が順番に入るということは無いだろうし、どこか別の場所を使っているのだろうか。

と考えていると、非常に小さなものだったが、どこからともなく女性……これは星さんの声か？ が聞こえてきた。

内容からすると……ビンゴォー！ やはりこことは別の場所だったか！ ということは、男性陣はいつもその浴場を使っているということに……ぬうう、うらやまけしから……ゲフンゲフン、べ、別に羨ましくなんかないぞ！ 俺は紳士だからな！！

その後、色々と考え事をしては悶々としていたのだが、男の妖怪達は五右衛門風呂をたまに使うくらいであり風呂に入らないという事実を、その時の俺は知る由もなかった。

風呂から上がると、長風呂し過ぎて火照ってしまった体を、心地よい冷気が包んだ。かなり薄着だから、湯冷めしないうちにさっさと寝てしまおうか。

着替えているうちに一瞬で冷えてしまった足で外の廊下を急ぎ気味で歩いていると、やけに外が明るいことに気がついた。

「ああ、そうか、今日は満月だったのか」

道理で外が明るいわけだ。しかしこれは……。

廊下から外に足を出して、廊下に腰を下ろして上を見上げた。大きく、丸く、何より綺麗な月だ。澄み切った空の影響なのか、月の模様までよく見える。

そういや、月には綿月姉妹が住んでるんだっけか。できれば月にも行ってみてえな。もし行ければ民間人初の快挙になるんじゃないやね？　ロマンが……こらそこ、絶対不可能とか夢のないこと言わない。

しばらく眺めて、そろそろ部屋に戻ろうかと思った時に、後ろから声がかかった。

「ほーう、月見酒か。ふむ、雪が降っていればもつと良かったんじゃないやがのう。ま、ええじゃろ、ちと隣いいかの？」

「ああ、別に構いませんよ、マ……失礼、貴方は？」

あつぶねえええええええ!! 紹介されてないのに名前言いかけちゃったよ!! き、気づかれたか!?

「儂は佐渡から来た二ツ岩マミゾウという者じゃ。君のことはぬえから聞いておる。今後宜しゅうな」

……つふうー、危ない危ない。大丈夫だったようだな。次からは気をつけないと。

「そうですか、でも一応自己紹介をば。私は夜鳥剣二という者です。最近幻想郷に来ました。半強制的に、ですがね。それはそうと佐渡から、ということとは東北の方からですよね？ どうやってここまで？」

「何、ぬえの奴に連れてこられただけじゃ。もう通ってきた道は忘れてしまったから戻れませんが、しかしここは良い場所じゃのう。力が漲ってくるし、空気が綺麗だし、何より将来有望な妖怪狸が多い。外の腑抜けと違って育てがいがあるわ」

腑抜けって……やっぱ狸とかにも現代っ子とかあるのか？ まったく想像できないんだが。

「お前さんはどうなんじゃ？ 此処には住まないのかい？」

む……………。

「……………確かに、この月は綺麗です。外の何処で見る月よりも綺麗でしょうね。でも、私はこの月よりは美しさが劣っていても、賑やかな中で見る月の方が好き……………それだけのことです」

「……………ふむ、ま、それもよからうて。帰る場所があるというのはいいことじゃ」

そう言って、マミゾウさんは徳利と御猪口を取り出し、酒を注いだ。……………寺なのに。

「どうじゃ、お前さんも一杯やるか？」

「そ、そうですねー、どうしましょうか」

多分言ってなかったと思うが、実は白玉楼で初めて酒を飲んだとき、しばらくしてか

らりバーズしてしまったのだ。胃の中身が少なかつたからまだマシだったものの、もう酒は飲まないでおこうとあの時誓ってしまっている。下手に飲んでリバーズしてしまうことは避けたいのだが……。

どうしたものか。

「かか、そんなことでは幻想郷でやっていけないぞ？ 例え下戸でも少しは飲んでおくのがスジつてもんじゃないやろう」

マミゾウさんは歯を見せて笑いながらそう言ったのだが、実際そうなんだよな。幻想郷じゃ宴会があいさつみたいなものだしなあ。万が一鬼とかに会ってしまったら、強制的に飲まされかねないし、やっぱりここは少しでも慣れておくべきなのかな、未成年だけど。

「ほれ、少しだけじゃ。外から来たもの同士、これから仲良くやっていこうじゃないか」

「結局飲まされるんですね……。分かりました、呑みましようか」

受け取った御猪口に口をつけようとしたとき、マミゾウさんに少し待ってくれ、と言われた。

「すまんが、お前さんに少し頼みごとがある。他でもない、ぬえのことじゃ。儂もそうじゃが、この寺では浮いてしまつていてのう、連中とは距離があるんじゃ。そのことについて気にかけてやつてはくれんか？ 今回のお前さんの件で少しは良くなつたようじゃが、もつと深めておくことに越したことはない。本人はあまり気にしていないがのう、仲間は大切なもんだと儂は知つとる。だから、頼まれてはくれんか？」

「……分かりました。力になれるかどうかは分かりませんが、手伝わさせていただきま
す」

「そうか、それは重畳じゃ。では、乾杯といくか」

「ですな」

小さく乾杯、と言つて月を見ながらグイッと酒を煽つた。辛口の日本酒だったよう

で、飲み干したときに喉がヒリヒリしたが、量が少なかつたせいか、心地よく感じられた。

体も温まってきたので、しばらく無言で星空を見上げていると、大部屋の方からワイワイガヤガヤと話し声が聞こえてきた。話の内容から察するに、妖怪達が酒盛りを始めたらしい。念のためもう一度言っておくが、ここ、寺だぜ？

夜から……いや、妖怪からしたら朝からつてとこか。そんなときから宴会つて……。満月だから気が大きくなっていたりするのだろうか。

しばらく耳を傾けていると、一際大きな唸り声……というより、何かの鳴き声かと、それを囁し立てるような声が聞こえた。

——また寅丸の奴が飲み過ぎで変化しやがったぞー！

——惨事になる前に宝塔を奪えーッ！ 後は誰か後ろに回って気絶させろ！

——任された!!

——いいぞもつとやれー！

……もう俺は何も突つ込まんぞ。色々おかしいが、俺は突つ込まない。絶対にだ。

俺は持っていた御猪口を脇に置いて、すっかり冷えてしまった体を震わせながら立ち

上がつて言った。

「マミゾウさん、今日はもう疲れたので寝ますね」

「そうかい、俺はまだ飲み足りないから、まだここに残ろうか。それじゃあ、また明日」
「はい、また明日」

妖怪達のバカ騒ぎが聞こえる廊下を歩いて、自分に割り当ててもらった部屋へと向かった。話の内容からすると、どうやら星さんは無事に取り押さえられたようだ。本当に何やってんだよあんたは……。

自分の部屋に着いたので、備え付けの布団を敷いた。一応蠟燭もあったが、月明かりだけで十分よく見えるので、特に支障はなかった。

俺は楽しそうな話し声を聞きながら、布団に潜って眠り始めた。今日あった出来事が、頭の中を駆け巡る。……あんまり何をしたという記憶がないな。鮮明に覚えているのは坐禅が辛かったことくらいだろうか。そんなことを考えながら、俺は眠りに落ちて

いった。

騒がしい妖怪達の夜は、まだ始まったばかりだ。